

靈界物語 第二三卷 如意寶珠 戌の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第二三卷』愛善世界社

1997(平成9)年11月04日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 なんかい
南海の山 やま

第一章 たま
玉の露 つゆ〔七一三〕

第二章 ふくしゆのみちやき
副守囁 ふくしゆのみちやき〔七一四〕

第三章 松上しよつじやうの苦悶くもん〔七二五〕

第四章 長高説ちやうかうぜつ〔七二六〕

第二篇 恩愛おんあいの涙なみだ

第五章 親子奇遇おやこきぐつ〔七二七〕

第六章 神異しんい〔七二八〕

第七章 知らぬが佛ほとけ〔七二九〕

第八章 纏れ髪もつがみ〔七三〇〕

第三篇 有耶無耶うやむや

第九章 高姫騷たかひめさわぎ〔七三一〕

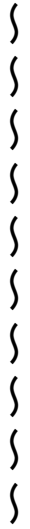
第一〇章 家宅侵入かたくしんにふ〔七三二〕

第一一章	難破船 <small>なんばせん</small>	〔七二三〕
第一二章	家島探 <small>えじまさがし</small>	〔七二四〕
第一三章	捨小舟 <small>すてをぶね</small>	〔七二五〕
第一四章	籠拔 <small>かごぬけ</small>	〔七二六〕

第四篇 混線状態こんせんじやうたい

第一五章	婆と婆 <small>ばば</small>	〔七二七〕
第一六章	蜈蚣の涙 <small>むかで なみだ</small>	〔七二八〕
第一七章	黄龍姫 <small>わうりゅうひめ</small>	〔七二九〕
第一八章	波濤萬里 <small>はたうばんり</small>	〔七三〇〕

靈たまの礎いしずゑ（八）



序文 じよぶん

またしても高姫物語かと、讀者の飽き玉ふとは知り乍ら、是れも一つの經路として述べて置かねば、神靈界の經緯が判りませぬから、口述者もいやいや乍ら口にしました。

併し親子の愛情や、堪忍の報いの尊き事は本卷に依りて、徹底的に分明する事と確信して居ります。幸ひに御愛讀の上、幾分なりとも修養の資料とならば、口述者に取りて望外の欣幸とする所であります。

大正十一年舊五月十八日

於龍宮館 王仁識

總説 そうせつ

一身上に關する大峠を一週日の前に控へたる舊五月十八日、離爲火の本卦、火

天大有の枝卦を得たる瑞月王仁は、天佑の下に漸く二十三卷の靈界物語を口述し
了り、進んで雷天大壯の神業に奉仕せむと、身心を清め、生田の森の訪客の、息
のまにまに口ずさむ。罪も穢れも那智の瀧、心の駒彦や、木枯氣分の秋彦始め、
虻蜂取らずの泥棒が、心の底より悔悟して、神の恵みの絲筋に、曳かれて親子の
再會や、魂をぬかれし高姫が、執着心のいと深き、心の瀬戸の家島やま、小豆ヶ
島に聳え立つ、國城山の巖窟に、バラモン教の花形役者、蜈蚣姫と面會の珍物語、
古今混同、不可解至極の頭腦の記憶を辿りつつ、蒲團の上に横たはり、日本一の
吉備團子、ムシヤムシヤ喰ひ喰ひ述べ了る。

大正十一年舊五月十八日

龍宮館にて

第一篇 南海の山

第一章 玉の露〔七一三〕

經と緯との機を織る

錦の宮の御經綸

玉照彦や玉照姫の

神の命の神勅を

四方に傳ふる宣傳使

國依別や玉治別の

神の命は神徳も

大臺ヶ原の峰つづき

日の出ヶ嶽より流れ來る

深谷川の畔をば

青葉滴る木の茂み

飛沫を飛ばす千仞の

谷の絶景眺めつつ

足を休らふ折柄に

追々近付く宣傳歌

後振り返り眺むれば

草鞋脚絆の扮装に

金剛杖に饅頭笠

二つの影はゆらゆらと

此方に向つて進み来る。

國依別「玉治別さま、あなたも随分永らく無言の行をやつて居ましたネー。若彦の宣傳使が熊野の瀧で荒行をやつて居ましたが、どうでせう、まだ依然として繼續して居るでせうか」

玉治別「私も實は若彦さまに會ひたいので、やつて來た途中、ゆくりなくも貴方にお目にかかり、様子を伺ひたいと思つた所です」

國依別「玉能姫さまが、あれ丈の御神業を遊ばしたのだから、若彦の宣傳使も聞いたら大變に喜ぶ事です。それに就ては何時までも紀の國路に居つて貰ふ譯にはゆかないから、實は言依別命様の内命を奉じて、お迎へに來たのですよ」

玉治別「私も堅い祕密を守り、玉能姫の御神業を口外する事は出来ないのだが、貴方と二人の中だから云つても差支あるまいが、併し乍ら惡靈は吾々の身邊を付け狙うて居るから、迂闊した事は云ひますまい。……時に彼の宣傳歌はどうやら

三五教らしいですな。何人か、近寄つて来る迄、此絶景を眺めて待ちませうか」

國依別「ヤアもう顔が判然する程近寄つて来ました。兔も角待つ事にしませう」

斯く言ふ折しも、宣傳歌は俄に歇んで、二つの笠追々と、木の茂みを分けて近

寄つて来た。見れば魔我彦、竹彦の兩人、二人の端座せるに驚いた様な聲で、

魔我彦「ヤア貴方は玉治別、國依別の宣傳使で御座つたか。何れへ宣傳にお出で

になるお考へですか」

國依別「誰かと思へば、魔我彦さまに竹彦さま。あなたこそ何方へ、何用あつて

御出でになります。言依別の教主より御命じになつたのですか。此紀の國の方面

は若彦の宣傳區域と定つて居る。其處へ貴方がお出でになるのは、チツト合點が

行きませぬ」

と問はれて魔我彦稍口籠り、手持無沙汰の様な顔付して、

「ハイ……私は宣傳に來たのでは有りませぬ。熊野の瀧へ、罪穢れを洗ふ爲に荒

行にやつて來たのです」

玉治別「遙々斯んな所まで荒行に來なくても、聖地には立派な那智の瀧が落ちて

居るぢやありませんか

魔我彦はソワソワし乍ら、

「なんと、天下の絶景ですな。縁滴る木々の梢と云ひ、此谷川の水音と云ひ、實に勇壯ですなア」

と成るべく話を外へ轉ぜようと努めて居る。玉、國の二人は其意を察し、ワザと忘れた様な風をなし、

玉治別「流石は大臺ヶ原に源を發した丈あつて、随分に立派な流れです。あの溪川の巨岩怪石に水の噛み付いて、水煙を立て、白銀の玉を飛ばす光景と云つたら、實に天下の絶勝です。斯う云ふ所にせめて三日も遊んで居れば、生命が延びるやうな氣が致しますワイ」

魔我彦は恐相に谷底を覗き見て、驚いた様に、

「ア、大變々々」

と足掻をする。玉、國の二人は其驚きに何事か大事の突發せるならむと、慌て谷底を覗く。魔我彦は竹彦に目配せし乍ら、全身の力を籠めて二人の背後よりドツ

と押した。何條堪るべき、二人は千仞の谷間に風を切つて顛落した。木々の青葉は追々黒ずんで、太陽の高山の頂きに姿を隠し、黄昏の空氣四邊を壓する。魔我彦「アハ、ハ、ハ、何程立派な宣傳使でも、斯うなつては駄目だ、玉、國の兩人、言依別の教主に巧く取り入り、變性男子の系統の高姫さまに揚壺を喰はし、若彦の女房：元のお節や空助の女つちよに御用をさせる様にしよつたのは、皆此奴等の企みだ。是れから先、生かして置けば、どんなに邪魔をしやがるか分つたものぢやない。一つはお道の爲、國家の爲ぢや。竹彦、巧く行つたぢやないか」竹彦「俄に其處らが暗くなつて來て分りませぬが、うまく寂滅したでせうか。萬一此中の一人でも生き残つて居ようものなら、忽ち陰謀露顯、吾々は到底此儘で安樂に神業に参加する事は出來すまい」魔我彦「アハ、ハ、ハ、そんな取越苦勞はするものでない。斷崖絶壁屹立した、岩ばかりの所へ落ちたのだから、體は忽ち木端微塵、こんな者が助かるなら、それこそ煎豆に花が咲くワ。アハ、ハ、ハ、」と心地よげに笑ふ。

竹彦「それでも煎豆に花の咲く時節が来ると、神様が仰有つた以上は、油斷がな
りませぬぞ」

魔我彦「そりや比喻事だよ。そんな事を心配して居て思惑が成就するか。高姫様
を表面へ出さねば、到底五六七の神政は完全に樹立するものでない。吾々は天下
國家の害毒を除いた殊勳者だ。萬一人や半分生き残つて居つて不足を云つた所
で、肝腎の高姫さまの勢力さへ旺盛ならば何でもなし。勝てば善軍、敗くれば魔
軍だ。何程平等愛の神様の教でも力が肝腎だ。力が無ければ國祖國常立大神様で
も、むざむざと良へ押籠められなさるのだから、兔も角吾々は勢力を旺盛にし、
部下を多く抱へ、一方には害物を除却せねばならぬ。攝受の劍と折伏の劍は、平
和の女神でさへも持つて居るのだから……」

竹彦「こんな宣傳使の二人位葬つた所で、肝腎の言依別命が頑張つて居る以上は
何にもならぬぢやないか。根本的治療を施さんとすれば、先づ言依別を第一の強
敵と認めねばなるまい」

魔我彦はニタリと笑ひ、

「天機漏らす可からず。吾神算鬼謀、後にぞ思ひ知らるるであらう」

竹彦「大樹を伐らむとする者は、先づ其枝を伐るの筆法ですか」

魔我彦「音高し音高し。天に口、壁に耳、モウ此話は只今限り言はぬ事にせう。

是れから熊野の瀧へ下り、若彦に會つて其上に分別をするのだから、ウツカリ喋

舌つてはならないぞ。お前は表面俺の隨行者となつた心持で、何を若彦が尋ねて

も、知らぬ存ぜぬの一點張で居るが宜からうぞ」

竹彦「委細承知しました。併し乍ら私の副守護神が喋つた時は如何しますか」

魔我彦「そんな副守護神を何時までも抱へて居る様な奴は、忽ち……ムニヤムニ

ヤ」

竹彦「忽……の後を瞭然聞かして下さい」

魔我彦「そんな事聞く必要が何處に有るか」

竹彦「我身に係はる一大事、どうも意味有り氣なお言葉でした。猿の小便ぢやな

いが、【キ】に懸つてならない。それを聞かねば、私も一つの考へがある」

魔我彦「八テ困つた事を言ひ出しやがったものだ」

竹彦「こんな事なら竹彦を連れて来なんだがよかつたに……併し乍ら二人の奴を、
谷底へ轉るのには、一人では都合好う行かず……アア一利あれば一害ありだ。
肝腎の處になつて竹彦の副守護神が發動し、斯んな事を素破抜かうものなら、高
姫も、魔我彦一派も、それこそ大變だ。アア後悔しても仕方がない。……と云
ふ様な貴方の心理状態でせう。御心配なさいますな。私も同じく共謀者だから滅
多に拙劣な事は申しませぬ。併し國依別、玉治別の亡靈が貴方や私に憑依して喋
つた時は、コリヤ例外だから仕方がない、アハ、ハ、ハ」
と氣樂相に笑ひ轉ける。魔我彦は雙手を組み、蒼白な顔になつて、肩で息をし乍
ら思案に暮れて居る。夜の張はますます濃厚の色を増し、遂には相互の姿さへ闇
に没して了つた。木々の梢を揉む暴風の音、何となく騒がしく、陰鬱身に迫り、
鬼哭啾々恰も根底の國に獨り彷徨ふ如き不安寂寥を感じた。二人は互に負ん氣を
出し、何となく心の底の恐怖を抑へ、強い事を話し合つて、此寂しさと不安を紛
らさうとして居る。風はますます烈しく、夜は追々更けて来る。女を責める様な
小猿の聲、彼方にも此方にも、キヤアキヤアと聞えて来るかと思へば、山嶽も震

動する許りの狼の聲刻々に高まり来る。青白い火は闇の中よりポツと現はれ、ボヤボヤと燃えては消え、燃えては消え、二人の身邊を取り巻き、遂には頭上を唸りを立てて燃え狂ふ。二人は目を塞ぎ、耳を詰め、頭抱へて大地にかぶり付いて了つた。首筋の邊りを、誰ともなく氷の如うな手で撫でるものがある。頭の先から鞆丸までヒヤリと氷の如き冷たさを感じて来た。竹彦は慄い聲を出して、竹彦「のー恨めしやなア。如何に魔我彦、騙し討ちとは卑怯未練な奴。モウ斯うなる上は汝が素つ首を引抜き、根の國底の國に落して呉れむ。覺悟せーよ」
と暗がりに靈懸りをやり出した。魔我彦は、

「オイ竹彦、厭らしい事をするものではない。チツと落着かぬか。そりや貴様、神經だ。今から發狂して如何なるか。チト氣を大きう持たぬかい」

竹彦「何と云つても此恨み晴らさで置かうか……押しも押されもせぬ宣傳使の玉治別、國依別を亡き者にせうと企んだ、汝の心の鬼が今此處に現はれ、竹彦の肉體を借つて讎を討つてやるのだ。其方も今迄高姫の部下となり、變性女子を苦めよつた揚句、猶飽き足らいで、我々兩人を谷底に突き落とし殺すとは、極惡無道の

癡者。只今幽界の閻魔の廳より命令を受けて、汝を迎へに來たのだ。サア最早逃るるに由なし。尋常に覺悟を致せ。花は三吉野、人は武士だ。せめてもの名残に潔く散つたがよからう」

と冷たい手で首の周圍を撫でまはす。青い火は燃えては消え、燃えては消え、ブンと唸りを立てて魔我彦の周圍を飛び廻る。猿の聲、狼の聲は刻々に烈しくなつて來る。魔我彦は餘りの恐さに魂消え、其場に人事不省になつて了つた。竹彦も亦其場にバタリと倒れて、後は風の音のみ。やがて下弦の月は研ぎすました草刈り鎌の様な姿を現はし、熊野灘から浮上り、二人の姿を怪しげに覗いて居る。夜は漸くにして明け放れた。小猿の群、何處ともなく兩人の前に飛び來り、足の裏を搔き、顔を搔いた。其痛さに氣が付き、兩人は期せずして一度に起きあがりたり。

魔我彦「ア、夜前は大變な恐ろしい目に遇うた。お蔭で新しい日天様が出て下さつて、稍心強くなつて來た。これと云ふも全く日の出神様のお助けだ。月の御魂と云ふものは出たり出なかつたり、大きくなつたり、小さくなつたり、まるで變

性女子の様なものだ、チツとも當になりやしな。天地から鑑を出して見せてあ
るぞよ……と仰有つたが、本當に愛想が「ツキ」の神ぢや。何時も形も變らず晃々
と輝き給ふのは日の出神様ばかりぢや。それだから俺は日の出神の生宮でなけれ
ば夜が明けぬと云ふのだ。月の御魂なんて、精神の定らぬ事は、天を見ても分つ
て居るぢやないか。それに就て坤の金神ぢや。未や申と云ふ奴は碌な奴ぢやない。
紙を喰らつたり、人を掻きまはしたりする奴だよ」
竹彦「本當にさうだなア。猿の奴惡戯しやがつて、そこら中を掻きむしりやがつ
た。此方が吃驚して起きるが最後、一目散に逃げて了ひやがつたぢやないか。是
れもヤツパリ坤の金神の力の無いと云ふ證據だ。アハ、ハ、ハ、」
魔我彦「併し昨夜の兩人は如何なつただらうかなア」
竹彦「どうも斯うもあるものか。人の體に幽靈となつて憑つて來やがつた位だか
ら、心配は最早有るまい」
魔我彦「そらさうだ。青い火を點して、パツパツとアタ煩雜さい、出て來やがつ
て、思ひ切りの悪い奴だなア。サアこれから若彦の居所を訪ね一つの活動をする

のだ。グズグズして居ると、險難だから、早く目的地點まで往かう。と先に立ちスタスタと坂路を、又元の如く蓑笠を着け、金剛杖を突いて、ケチンと音させ乍ら岩路を下つて行く。

谷底には一人の男、赤裸となつて水行をやつて居た。そこへ薄暗がり、二つの影、青淵へ向つてドボンと許り落ち込んで来たものがある。男は驚いて手早く二人を救ひ上げ、イロイロと人口呼吸を施したり、指を曲げたりして蘇生せしめた。男「モシモシあなたの服装を見れば、夜陰にて確には分りませぬが、宣傳使の様に見えますが、一體どなたで御座いますか」

國依別「悪者に突き落され、思はず不覺を取りました。其刹那、吾身は最早粉碎の厄に遭つたものと覺悟をして居ましたが、よう助けて下さいました」

玉治別「私も實は宣傳使です。此れだけ澤山の岩が竝んで居るのに、少しの怪我もなく、此青淵へうまく落込んだのも、神様のお蔭、又貴方様のお助けで御座います。此御恩は決して忘れませぬ」

男「確かに分らぬが、お前さまは何處ともなしに聞覚えの有る聲だ。玉治別さまに國依別さまぢやありませんか」

と問はれて二人は、

玉、國「ハイ左様で御座います。さうして貴方は何れの方で……」

と皆まで聞かず男は、

男「ア、それで安心致しました。私は初稚姫様のお指圖に依つて、言依別の教主の承諾を得、此谷川へ、何故か急に派遣され、水行をしかけた所へ、あなた方が落ちて來られたのです。モウ少し私の來るのが遅かつたならば大變な事でした。」

私は空助ですよ」

と聞いて二人は、安心と喜悅の念に堪へず、空助の體に喰ひついて、嬉し泣きに泣くのであつた。

空助「随分暗い夜さだが、其二人の聲で少しも疑う餘地はない。斯様な所に長らく居つては面白くない。今回の私の使命はこれで終つたのだらうから、どつか平坦な所へ行つて、詳しく話を承はりませう。何を言つても此谷川の水音では、十

分の話が出来ませぬ

と云ひつつ、闇に白く光つた羊腸の小徑を、探り探り下つて行く。路が木の蔭に

遮られて見えなくなると、白い白狐の影一二間前をノソノソと歩む。空助は其跡

を目當に七八丁許り降り、平たき岩の上に腰をおろし、

空助「サアサア御二人さま、此處でゆつくりと夜明けを待ちませうかい」

二人は「ハイ」と言ひ乍ら、濡れた着物を脱いで、一生懸命に絞り直し、岩に

パツと擴げて乾かして居る。晝の暑さに岩は焼けたと見え、非常な暖かみがある。

着物は少時の間に元の如く乾燥した。

國依別「天道は人を殺さずとはよう言つたものだ。何處も彼も夜露で冷やかうな

つて居るのに、此岩計りは全然ストーブの様だ。日輪様もお上りなさらぬのに、

着物が乾くと云ふ事は珍しい事だ。これもヤツパリ神様の御恵だらう。サア皆さ

ま、神言を奏上致しませう

と茲に三人は天地も揺ぐばかりの大音聲を發して、スガスガしく神言を奏上し、

宣傳歌を歌つて、暫く夜明けを待つ事にした。夜は漸くに明け放れ、木々の梢に

置く露つゆにいちいち太陽たいやうの光宿ひかりやどつて、恰あたかも五色ごしきの果實くだもの一面いちめんに實みのるが如ごとく麗うるはしくなつて來きた。

玉治別たまはるわけ「スンデの事ことで、玉治別たまはるわけも魂たまの宿換やどがへする所ところだつたが、東天とうてんには金鳥きんうの玉たま晃々くわくくわつと輝かがやき玉たまひ、一面いちめんの草木くさきには吾輩わがはいの分身ぶんしん分魂ぶんこん、空閒すきまもなく憑依ひょういして居ゐる。ヤ

ツパリ玉治別たまはるわけの宣傳使せんでんしに限りかぎますよ。なア空助もくすけさま」

空助もくすけ「ア、、、體からだや着物きものが燥はしやいだと見みえて、徐々そろそろ燥はしやぎかけましたなア」

國依別くによりわけ「オイ玉公たまこう、そんな氣樂きらくな事言ことつてる時ときぢやないぞ。昨夜ゆうべの讎かたきを討うつと云い

ふ……そんな氣きは無ないが、併しかし吾々われわれ二人ふたりにあゝ云いふ非常手段ひじやうしゆだんを用もちひた以上いじやうは、何なに

かこれには深ふかい計略たくみが有あるに違ちがひない。餘程よほどこれは考かんがへねばなるまいぞ。空助もくすけさま、

どうでせう」

空助もくすけ「さうだ。グツグツして居ゐる時ときではない。餘程よほど注意ちういを拂はらつて居をらねば、此邊このへん

は某々ぼうぼうらの陰謀地いんぼうちだから……。さうして其惡者そのわるものは誰たれだい。名なは分わかつて居ゐますかな

ア」

玉治別たまはるわけ「分わかつたでもなし、分わからぬでもなし。他人ひとの事ことは言いはぬが宜よろしからう」

國依別くによりわけ「マガ」な隙すきがな吾々の行動かうどうを阻止そしせむと考かんがへて居ゐる「マガ」ツ神かみの容いれ器ものでせう。何れ心こころのマガつた奴やつに違ちがひありますまい」

玉治別たまはるわけ「悪人あくにん「タケ」タケしい世よの中なかだから、誰たれだと云いふ事は、マア止やめにして推量すゐりやうに任まかしませうかい」

空助もくすけ「モクスケ」して語かたらずと云いふ御兩人ごりやうにんの考かんがへらしい。ヤア感心かんしん々々かんしん。それでこそ三五教あななひけうの宣傳使せんでんしだ。今迄いままでの二人ふたりに加くはへた悪虐無道あくぎやくぶだうを無念むねんには思おもつて居ゐませぬか」

玉治別たまはるわけ「過越苦勞すぎこしくらうは禁物きんもつだ」
國依別くによりわけ「刹那心せつなしんだ。綺麗きれいさつぱりと谷川たにがはへ流ながしませう。天下てんかの政權せいけんを握にぎる内閣ないかくで

さへも、敵黨てきたうに渡わたして花はなを持もたす志士しし仁人じん的てき宰相さいしやうの現あらはれぬ時節じせつだから……ア

ハ、ハ、ハ……マア此岩このいはの上うへでカトウ約束やくそくをして、空助もくすけ内閣ないかくでも組織そしきし、熊野くまのの瀧たきへ政見發表せいけんはつぱうと出でかけませうかい」

空助もくすけ外二人ほかふたりは蓑みの、笠かさ、金剛杖こんがうづえ、草鞋わらじ、脚絆きやはんに小手脛こてすね當あて、宣傳歌せんでんかを歌うたひ乍ながら、熊野くまのの瀧たきを指さして進すすみ行ゆく。

（大正一一・六・一〇 舊五・一五 松村眞澄録）

（昭和一〇・六・四 王仁校正）

第二章 副守囁（七一四）

罪も穢れも那智の瀧、洗ひ流した若彦は、心もすがすがしく三五教の教理を遠
近に傳ふべく、普陀落山の麓に館を造り、教を四方に布きつつあつた。門を叩い
て、

「頼まう頼まう」

と訪ふ二人の宣傳使がある。門番の秋公、七五三公は此聲に眠りを醒まし、大缺

伸をしながら、

七五三公「オイ秋公、誰だか門外に訪ふ人がある。早く起きて開けてやらないか」
秋公「夜も碌に明けてゐないのに、此の門開ける必要があるか。少し時刻が早い

から、マア一寝入したがよからう

門を叩く聲益々忙はしい。七五三公は夜具を被つた儘、

「オイオイ開けるのは秋公の役だ。早く起きぬかい」

秋公「夫程喧しく言ふなら、貴様開けてやれ」

「オレは其名の如く「しめ」る役だ。愚圖々々して居ると、又若彦の大將からお

目玉を頂戴するぞ。エー仕方の無い奴だ」

と寝巻の儘、佛頂面を下げて片足に下駄、片足に草履を穿き、三尺帯を引摺り乍

ら、門をガラガラと開いた。二人は丁寧に會釋し、

「若彦の宣傳使は御在宅ですか」

七五三公「そんな難かしいことを言つて解るかい。居るか、居らぬかと云ふのか。

さうしてお前は何と云ふ宣傳使だ」

「ハイ私は魔我彦、外一人は竹彦と云つて三五教の宣傳使です。大神様の御命令

に依つて、遙々参つたのですから案内して下さい」

「【曲】つたとか、【曲】らぬとか、【案内】とか、【門内】とか、お前の言ふ

事は全然譯が分らぬ。そんな英語を使はずに俺達に分る様に云つて呉れ

魔我彦「アハ、ハ、ハ、譯の分らぬ門番もあつた【もん】ぢやなア。こんな奴が門

番して居る位だから、大抵若彦の御手竝も分つてゐるワイ」

七五三公「一寸待つて呉れ。今お前は此家の御主人を若彦と云つたなア。何故若

彦さまと言はないのだ。そんな無茶なこと云ふ奴は、此の門は通されぬのだ。大

方魔谷ヶ嶽の蜈蚣姫の乾兒だらう。三五教の宣傳使だなんて、うまく化て來たの

ではないかな。……オイ秋公、貴様起きて來い。大變な奴がやつて來居つたぞ」

秋公は此聲に驚いて、寢卷の儘此場に現はれ來り、

「大變な奴とは此奴か。如何したといふのだ」

「此方の主人を若彦なんて呼びつけにしやがるものだから、むかつくのだよ秋公」

「それはむかつくとも、オイ何處の奴か知らぬが今日は歸つて呉れ」

魔我彦「其方は謂はば若彦の門番でないか。大神様の御命令で來た吾々を、通す

の通さぬのと云ふ権利があるか。早く案内を致せ」

と稍怒りを帯びた語氣で呶鳴りつけた。二人は頭を掻き乍ら、

秋公「マア是から吾々門番は手水を使ひ、着物を着換へ、朝飯を食つて悠くりと案内をしてやるから、それ迄其處に待つてゐるが好いワイ」

竹彦「魔我彦さま、廣いと云つても「たか」が知れた若彦の屋敷、サア、行きませう」

と先に立ち奥に入る。若彦は涼しさうな薄衣を着て、庭先の掃除に餘念無く、箒目を正しく砂の上に畫いてゐる。

魔我彦「ア、彼れが何うやら若彦の宣傳使らしい。大將は朝早くから彼の通り、箒を以て園丁の役を勤めて居るのに、門番の奴グウグウと寝やがつて、ポンついてゐるやがる。ウラナイ教の北山村の本山でも、依然さうだつた。門番は威張るばかりで働かぬものだ。なア竹彦、貴様も波斯の國ではウラナイ教の門番をしてゐた時、依然さうだつたなア」

竹彦「そんなことを今頃を持ち出すものぢやありませんぞ。さうしてウラナイ教なんて、疾の昔に消滅してしまひ、今は吾々は立派な三五教の宣傳使だ。昔の門番を、こんな處で擔ぎ出されると吾々の沽券が下る。そんな過去つたことを云ふの

なら、青山峠の谷間の突發事件を此處で開陳しようか」

魔我彦「シート」

竹彦「シートとはなんだ。人を四足扱ひにしやがつて、シート云うと、死んだ奴が又恨めしや一ナアとやつて来るぞ。縁起を祝ふ神の道だ。四と九とは言はぬやうに慎んだがよからう」

と佇んで若彦の掃除を見乍ら二人が囁いてゐる。其の聲が耳に入り若彦は、箒を手にしながら兩人の姿を眺めて、

若彦「ア、貴方は魔我彦さまに竹彦さま、朝早くから、よくお入來になりました。どうぞ奥へ通つて下さい。一別以來の御話しも悠くり承はりませう」

魔我彦は儼然として、

「私は玉照彦、玉照姫様の御使として、遙々参つたもので御座います」

竹彦「謂はば神様の御使、謹みて御聴きなさるがよろしからう」

と傲然と構へてゐる。若彦は腰を屈め、

「何は免もあれ、奥へ御通り下さいませ」

と先に立つ。二人は離れ座敷に招かれ、茶湯の饗應を受け、暫く打寛いで四方山の話に耽る事となつた。若彦は表に出で部下の役員信者と共に、神殿に朝の拜禮を爲し、一場の説教を了り朝飯を喰つて居る。侍女は膳部を拵へ、離れ座敷の二人の前に持運び、朝飯をすすめて居る。若彦は朝餉を済まし、衣紋を繕ひ、離座敷の二人が前に現はれ、

若彦「これはこれは御兩人様、長らく御待たせ致しました。逢々の御越し、何の御馳走も無く誠に済みませぬ」

魔我彦「三五教の教理は一汁一菜と云ふ御規則で御座る。それにも關はず、イヤもう贅澤な御馳走に預りました。聖地に於ては到底玉照彦様でも、こんな御馳

走は見られたことも御座りませぬ。併し乍ら折角の御志、無にするも如何かと存じ、快く頂戴致しました。アハ、ハ、ハ、」

若彦「吾々も三五教の宣傳使、一汁一菜の御規則はよく守つて居ります。併し乍ら今日は神様の御入來ですから、神様に御馳走を奉つたのです。魔我彦さまや、

竹彦さまに御上げ申したのでは御座らぬ。貴方は神様に上げたものを、氣の毒だ

から御食れましたと仰有つたが、神様の分まで御食りになつたのですか」

と竹篋返しを喰はされ、二人はギヤフンとして圓い目を剥く。

魔我彦「今日吾々の参つたのは大神様の御命令、玉照彦、玉照姫の二柱の神司よ

り、御神慮を傳ふべく出張致しました。貴方は聖地の大神様の大變を知つて居りますか」

若彦「聖地は無事安穩に神業が榮えて居るぢやありませんか」

魔我彦「さてさて貴方は長らく聖地を離れてゐるから解らぬと見えるワイ。貴方の

の御存知の空助と云ふ奴、全然聖地へ入り込み、初稚姫の少女の言ふ事を楯に取り

り、横暴を極め、誰も彼も人心離反し、今に大變動が起らんとして居る。それで

高姫さまも非常に御心配を遊ばして御座るのです」

若彦「さうすると貴方は高姫さまの旨を奉じて來られたのか、或は言依別の教主

様の旨を奉じて御入來になつたのか、それから第一番に聴かして貰ひませう」

竹彦「そんな事は如何でも好いぢやないか」

と言はんとするを魔我彦は周章て押し止め、

魔我彦「コレコレ竹彦さま、お前は約束を守らぬか。お前の言ふべきところでは

ない、謂はば從者ぢやないか」

竹彦「從者か何か知らぬが依然表面は魔我彦と同格の立派な宣傳使だ。餘り偉さうに言つて貰ひますまい。青山峠の絶頂は何うですな」

と顔を覗き込む。

魔我彦「青山に日が隠らば烏羽玉の夜は出なむ。朝日の笑み榮え來て、拷綱の白き腕淡雪の若やる胸を、素手抱き手抱き「まながり」、眞玉手玉手さし巻き、腿長に「いほしなせ」、豊御酒奉らせ。アハ、ハ、ハ、」

と笑ひに紛らす。

竹彦「ヘン、うまい處へ脱線するワイ」

魔我彦「沈黙だ」

若彦「空助が何うしたと言ふのですか」

魔我彦「空助はお前さまを紀州下りまで追ひやつて置き、お前の女房玉能姫をうまく抱き込み、聖地へ連れて行き、言依別の命に密とさせて、それを手柄に威張つて居るのだ。それが爲に聖地の風紀は紊れ、町内で知らぬは亭主ばかり

なり」と云ふ事が突發して居ますよ。お前さんは空助や、言依別を何と思ひますか。肝腎の女房をまるまるされて、それで安閑としてゐるのですかな。高姫さまが大變に憤慨なされて「ア、若彦さんは氣の毒ぢや、何卒一日も早く此事を知らして上げ、私と一緒に力を協して聖地を改革せねばならぬ」と仰有つて、錦の宮に御願ひを遊ばしたところ、玉照彦、玉照姫の神司に大神が御降臨遊ばし、「不届至極の言依別、今日より其職を免じ、高姫に一切萬事を委任する。就ては空助を叩き出し、若彦さんを總務にするのだから早く聖地へ歸つて貰へ」との有り難き御言葉、それ故吾々は遙々と参りました」

若彦「それは御苦勞でした。併し乍ら貴方の仰有る大變とは、そんなものですか。それはホンの小さい問題ぢやありませんか。例令玉能姫がまるまるされたと言つても、吾々さへ黙つて居れば濟むことだ。其の位な事が、何大變であらう。アハ、と、と手も無く笑ふ。魔我彦はキツとなり、

「これは怪しからぬ。自分の女房をまるまるされ乍ら平氣で笑つてゐるとは、無神經にも程度がある。イヤ、貴方は玉能姫以上のナイスが出来たので、これ幸ひと思

つてゐるのでせう」

若彦「私は神界に捧げた身の上、玉能姫を措いて他に女などは一人もナイスだ。

アハ、ハ、ハ、」

と木で鼻を擦つたように笑つて取り合はぬ。

魔我彦「それよりも未だ未だ一大事がある。如意寶珠や、紫の玉や、黄金の玉を

隠した張本人は言依別命だ。可愛相に黒姫さまや、龍國別、鷹依姫其他の連中は、

玉探しに世界中へ出て了つた。さうして言依別の教主は何でも目的があつて、自

分一人で何處かへ隠して了ひよつたのだから、何處までも詮議立をしなくてはな

りませぬ。何を云つても玉能姫を するために、お前さまを斯んな遠國へ、空

助と謀し合せて追ひやるやうな代物だからなア」

若彦「ア、さうですか、私は言依別様が何をなさらうとも、神界に仕へて居る方

だから、少しも異存は申しませぬ、絶対服従ですから」

魔我彦「服従も事に依りますよ。些と冷静に御考へなさい。天下の大事ですから。

教主一人と天下とは換られませぬ」

若彦「彼の賢い抜目の無い玉治別や、國依別が付いて居るのですから、滅多なことはありますまい。もしも左様なことがあれば、屹度知らして来る筈になつて居るのですから」

竹彦「玉治別や國依別は、モウ現世には………」

と言ひかけるのを、魔我彦は「シーツ」と制し止める。

竹彦「又人をシーなんて馬鹿にするない。シーシー死骸、死人、【しぶとい】、知らぬ神に崇り無し。死んだがマシであつたかいなア」

と首を籠棒に振り、長い舌を出してゐる。魔我彦は心も心ならず、

魔我彦「若彦さま、此男は些と逆上してゐますから、何を云ふか解りませぬ。チ

ツとキ印ですから其のつもりで聽いて下さい」

若彦「玉治別と國依別さまの消息は御存知でせうな」

魔我彦「………」

竹彦「此の竹彦は知つても知りませぬ。併し乍ら副守護神が能く知つてゐますよ」
魔我彦は矢庭に兩手を組み、竹彦に向つてウンと一聲、魔我彦は、

副守の奴、除けーッ

と唳鳴り立てゐる。

竹彦「ウ、油斷を致すと谷底へ突落されるぞよ。一旦谷底へ落した上で神が救

けて、誠の御用を致さすぞよ。此世は神の自由であるから、人間のうまい計畫は

成就致さぬぞよ。蛙は口から、われとわが手に白状致さして面の皮を引剥くぞよ

魔我彦「下れ下れ、下り居らう。其方は野天狗であらう」

竹彦「野天狗でも何でも可いわ、谷底ぢや、押も押れもせぬ三五教の宣傳使でも、

矢張押されて谷底へ落ちてアフンと致すことがあるぞよ。今に上が下になり下が

上になるぞよ。神が表に現はれて善と悪とを立別るぞよ」

魔我彦「エー喧しい野天狗だ。下れと云つたら下がらぬか」

竹彦「ウ、若彦殿、氣をつけたがよからうぞよ。悪の誘惑に乗つてはならぬぞ

よ。何程うまいこと申して來ても、神に伺うた上でなければ、聞いてはならぬぞ

よ。マガマガマガ」

魔我彦「モシモシ若彦さま、困つた邪神が憑依したものですなア」

若彦「イヤ邪神でもありませんまい。大方此の守護神の言ふことは、事實に近いやうですよ。國依別、玉治別の宣傳使は、若しや或は「マガタケ」ル彦に谷底へ突き落されたのではありますまいかな」

竹彦「ウ、流石は若彦の宣傳使だ。汝の天眼通、天晴れ天晴れ」

魔我彦は顔蒼白め、ソロソロ遁腰になつて此場を立去らうとする。

若彦「マア魔我彦さま、悠くりなさいませ。天が下には敵も無ければ味方も有りませぬよ。神様が善悪は御審判き下さいますから、吾々は何事が起らうとも惟神

に任して居れば好いのですよ。サア、お茶なつと召上りませ」

と茶を汲んで突き出す。魔我彦は身體ワナワナと戦き出した。

斯る處へ召使のお光と云ふ女、あわただしく走り來り、

お光「只今三人のお客様が見えました。何う致しませう」

若彦「表の奥の間へ御通し申して置け」

魔我彦「モシモシ其の三人の方と云ふのは、何んな御方で御座いますか」

お光「なんでも宣傳使さまのやうです。大變大きな御方が一人混つてゐられます」

魔我彦の面色はサツと變つた。竹彦は身體をブルブルと慄はせ乍ら、又神憑りになつて、

竹彦「それ來た、それ來た、谷ぢや谷ぢや、玉ぢや玉ぢや、クニクニクニモクモクモク」

と唸鳴り出した。若彦は、

若彦「コレお光や、四五人の男を此處へ招んで來てお呉れ」

「ハイ」と答へて、お光は表を指して姿を隠し、暫くありて甲、乙、丙、丁、戊の五人の大男を伴れて來た。

若彦「ヤア五人の男ども、私は表のお客さまに少し用があるから、二人のお客さまを見放さないやうに、大切に保護をして居るのだよ。出入口口に氣をつけて悪魔の侵入せないやうに守つてあげて呉れ。遁げられては一寸都合が悪くからなア」

甲「ハイ何事もチヤンと私の胸に御座います。御心配下さいますな」

若彦「何分宜しう頼む。モシ魔我彦さま、竹彦さま、私は表の客人に一寸會つて來ます。何うぞ悠くりお茶でも上つて遊んで下さいませ」

と五人の男に目配せし、悠々と此場を立つて表屋の方に姿を隠す。

（大正一一・六・一〇 舊五・一五 外山豊二録）

第三章 松上の苦悶（七一五）

原野を遠く見晴らした若彦館の奥の間に招ぜられた三人の男は、空助、玉治別、國依別であつた。

若彦「これはお三人様、打ち揃うてよくも御入來下さいました。今も今とて貴方方の噂を致して居りました。呼ぶより誹れとはよう云つたものですか」

空助「言依別の教主の命に依つて、紀の國へ急遽出張致しました」

空助「言依別の教主は、矢張り相變らず勤めて居られますか」

空助「これは又妙なお尋ね、教主が變つてなるものですか」

若彦「高姫さまは何うなりました」

空助 「高姫さまは相變らず聖地で働いて居られます」

若彦 「ハテナ」と思案に暮れる。

若彦 「玉能姫は如何致しましたか」

空助 「玉能姫様は初稚姫様とお二人、錦の宮の別殿にお仕へになつて居ります。

併し妙な事をお尋ねですな。誰か當館へ来た者がありますか」

若彦 「ハイ、先程魔我彦、竹彦の兩人が参りました」

國依別は是を聞くより俄に眉を吊りあげ、何と無しに不穩な色を顔面に漂はし

た。

國依別 「其の魔我彦は何處に参りましたか」

若彦 「離れの座敷で休息して居られます」

空助 「アハ、これは妙だ。悪い事は出来ぬものだなア」

若彦 「魔我彦が何を致しましたか」

空助 「イエ、人の心位恐ろしいものはありません」

若彦 「何だか、それはそはと兩人は致して居りますので、これには深い様子のある

事と思ひ、どつこにも逃げないやうに五人の荒男をもつて監守さして置きました。一體何んな事をやつたのです」

空助は、青山峠の頂上より谷底へ玉治別、國依別を突き落とし、殺害を企てた事を小聲に耳打ちした。若彦は倒れむ許りに打ち驚き、

若彦「どこ迄も執念深き高姫一派の奸計。何うしても金狐、大蛇、悪鬼の守護神が退かぬと見えますな。何う致しませう。此儘追ひ歸すか、但は歸順させるか二つに一つの方法を執らねばなりませんまい」

空助「まア私に任して下さい」

と腕を組んでやや思案に耽る。暫くありて空助は若彦の耳に口を寄せた。若彦は打ち頷き、此場を立て離れ座敷に進み入り、五人の男に向ひ、

若彦「ア、皆の者御苦勞であつた。各自自分の部屋に歸つて休息して下さい。：

魔我彦さま、竹彦さま、長らくお待たせ致しました。嘸お退屈でせう」

魔我彦「何卒お構ひ下さいませすな。お客さまは何うなりましたか」

若彦「ハイ、ほんの近くの百姓が見えましたので御座います。何れも用をたして

かへ
歸りました。何卒御悠くりとして下さい。併し一つ貴方にお願ひ仕度き事が御座
います」

魔我彦「お願ひとは何事で御座いますか」

若彦「實は熱心な信者が病氣にかかつて此館に籠つて居りますが、何うも怪しい
病氣ですから、一遍貴方の御鎮魂を願ひ度いのです」

魔我彦「神徳の充實した貴方があつしやるのに、何うして私のやうな者がお聞
に合ひませうか」

若彦「あの病人は何うしても貴方の鎮魂を受けなくては癒らないのです。總ても
のは相縁奇縁と云うて、何程神様の御神徳だと云うても、意氣の合ぬものは到底
效能がありません。何卒貴方急ぎませぬから、お休みになつたら鎮魂を施して下
さい」

魔我彦「承知致しました。一つ神様に願つて見ませう」

若彦「早速の御承知、本人も喜ぶ事とせう。併し乍ら、何か物怪が憑いて居ると
見えて、晝は平穩です。夜分になつてから一つお願ひ申しませう」

魔我彦は傲然として、

「ハイ宜敷い」

と大ぴらに首を振つて居る。表の方には空助、玉治別、國依別の三人小聲になり、何事か話に耽つて居る。若彦は二人に向ひ、

若彦「些しく表に用が御座いますれば失禮致します。何卒御悠くりと今日はお休み下さいませ。今晚お世話にならなくてはなりませんせぬから」

と云ひ捨て立ち去る。後に二人は小聲になり、

魔我彦「何うも怪しいぢやないか。何うやら、空助がやつて来て居るやうな気が

してならぬ。まかり間違へば青山峠の陰謀が露見したのだなからうかなア」

竹彦「私も何だか心持が悪くなつて来た。何うぞして此處を逃げ出す工夫はある

まいかなア」

魔我彦「ひよつとしたら二人の奴、谷底で蘇生したかも知れないぞ。それなら大變だ。一つお前神憑りをやつて見て呉れ」

竹彦は言下に手を組み、瞑目した。忽ち身體震動して、

竹彦「ウ、ウ、ウ、此方は八岐の大蛇の眷属であるぞよ。今表に空助、玉治別、國依

別の三人が現はれて、今夜を待つて復讐せむとの企みやつて居るぞよ」

魔我彦「それは大變です、何とかして助かる工夫はありますまいか」

竹彦「ウ、ウ、ウ、もうかうなる以上は、館の周圍は荒男が取り巻き警戒して居る。

力強の空助は表に隠れて居る。もはや袋の鼠、兩人の身體は逃れる見込はあるま

い」

魔我彦「ハテ、困つた事だ。何うしたら良からう」

と顔色を變へてまごつく。

竹彦「ウ、ウ、ウ、周章するには及ばぬ。先づ氣を落ち着けよ。かういふ時こそ刹那心

が必要だ。何れ人を呪はば穴二つ、天に向つて唾したやうなものだ。自業自得だ、

諦めて三人に命をやつたらよからう」

魔我彦は益々狼狽へ、

魔我彦「命惜しさに吾々は信仰もし、宣傳使もやつて居るのです。そんな事があ

つて耐るものですか。かういふ所を助けて下さるのが神様だ。何とかよいお指圖

を願ひます」

竹彦「ウンウン、自業自得だ。仕方がない、今表に折伏の劍を三人が力限り研いで居るぞ。あの業物で、すつぱりとやられたら、二人の身體は見事梨割りになるだらう、ウフ、、」

魔我彦「何卒、吾々二人を此處から救ひ出して下さい。もうこれきり改心を致しますから……」

竹彦「ウンウンウン、先づ周章ずと日が暮る迄待つたらよからう。何程謝罪つた所で、これだけ大勢強い奴が取巻いて居るから何うする事も出来はしない。なまじいに逃げ隠れ致して、名もなき奴に命を取られ恥を曝すよりも、汝が持てる懐劍で刺違へて死んだがよからう。それが最善の方法だ」

魔我彦「この不安状態がどうして今夜迄待てますか。また大切な一つの命を、さう易々と放る譯には行きませぬまい」

竹彦「ウ、、この肉體も可愛さうなものだが、其方も可愛さうだ。併し玉治別、國依別の命を易々と取らうと企んだ張本人は魔我彦だから仕方がない、觀念致せ」

魔我彦「これが何うして観念が出来ませう」

竹彦「ウ、ウ、命が惜いか、吾身を抓つて人の痛さを知れ、貴様が命の惜しいのも、玉、國兩人が命の惜しいのも同じ事だ。併し乍ら、玉、國兩人は常から命が大切だと云うて居る位だから、死ぬのは嫌なに違ひない。それに引かへ貴様は高姫と共に、日々烏の啼くやうに命はいらぬ、お道の爲なら假令どうなつても惜しくないと言つて居るぢやないか。命の無くなるのは貴様の日頃の願望成就ぢや、こんな目出度い事は又とあるまい。アハ、ハ、ハ、」

魔我彦「貴方は何れの神様が存じませぬが、ちと氣に食はぬ事を仰有る。お引取を願ひます」

竹彦「ウ、ウ、さうだらう、氣に食はぬだらう。尤もぢや、口先でこそ命はいらぬと云つて居つても、肝腎要な時になると、娑婆に未練の残るのは人間として、普通一般の當然の執着心だ。その執着心を取らなければ、誠の神業は成就致さぬぞ」

魔我彦「同じ事なら肉體を持つて御用を致し度う御座います。ア、【しま】つた

事をした。何うしたらよからうかなア。日はだんだんと暮れて来る。愚圖々々して居れば何んな目に遇はされるか知れやしない、翼でもあれば、たつて歸るのだからだ。

竹彦「ウ、アハ、アハ、それ程命が惜しければ此方の申す様に致すか」

魔我彦「命の助かる事なら何んな事でも致します。何うぞ早く仰有つて下さいませ」

竹彦「ウンウンウン、汝等兩人は庭先のこの松の頂上に登り、天津祝詞を一生懸命に奏上致せ。さうすれば天上より紫の雲をもつて汝の身體を迎へ取り、安全地帯に送つてやらう。何うぢや嬉しいか」

魔我彦「ハイ、助かる事なれば結構です。そんなら何時から登りませう」

竹彦「時遅れては一大事、半時の猶豫もならぬ。松の木を目蒐けて登つてゆけ。竹彦の肉體も共に登るのだぞ。ウンウンウン」

と云ひながら靈は元に歸つた。魔我彦は四邊キヨロキヨロ見廻し、人無きを幸ひ庭先の大木を命的に猿の如くかけ登つた。竹彦も續いて頂上に登りついた。二

人は一生懸命に天津祝詞を聲の限り奏上した。此聲に驚いて若彦を初め、空助、玉、國其他の一同は松上の二人の姿を見て、「アハ、ハ、ハ」と笑ひどよめいて居る。二人は一生懸命汗みどろになつて惟神靈幸倍坐世を奏上して居る。空助は態と大きな聲で、

空助「サア、是から曲津彦と竹取別の兩人を料理して酒の肴に一杯やらうかい」と雷の如く呶鳴りつけた。魔我彦は是を聞き戦慄し、次第々々に慄ひ聲になり、遂には息も出なくなつて仕舞つた。竹彦は「ウ、ウ」と又もや松上にて神憑りを始めた。

魔我彦「貴方の御命令通り此處迄避難しましたが、あの通り空助以下の連中が樹下を取り巻いて居ります。どうぞ早く雲をもつて迎ひに来て下さい」

竹彦「ウンウンウン、斯の如く濃厚な紫の雲、汝の身體を取圍んで居るのが目に入らぬか。活眼を開いて四邊を熟視せよ」

魔我彦「何うしても我々の目には見えませぬ」

竹彦「ウンウンウン、見えなくつても雲は雲だ。竹彦の肉體と手を繋いで天に向

つて飛びあがれ。さうすれば摘み上げて此館より脱出せしめ、安全地帯に救うてやらう。男は決斷力が肝要だ。サア早く早く」

と促され、魔我彦は無我夢中になつて竹彦の手をとり、一イ二ウ三ツと聲を揃へて一二尺飛び上つた途端に、松上より眼下の荒砂を敷きつめた庭に眞逆様に墜落し、蛙をぶつつけたやうにビリビリと手足を慄はせ、人事不省に陥つた。若彦、空助、玉、國其他の者は此光景に驚き、忽ち樹下に人山を築き、水よ水よと右往左往に慌て廻る。お光は手桶を提げ慌しく走り來る。空助は直ちに水を含み、兩人の面部に息吹の狭霧を吹きかけ、漸くにして二人は唸りながら生氣に復し、四邊をキヨロキヨロ見廻し、玉治別、國依別の姿を見て「キヤツ」と叫び、又もや人事不省に陥つて仕舞つた。玉治別は魔我彦を、國依別は竹彦をひつ抱へ、奥の間深く運び入れ、夜具を敷いて鄭重に寝させ、神前に向つて天津祝詞を奏上し、更めて鎮魂を施した。漸くにして二人は息を吹きかへす。

玉治別「魔我彦さま、何うでした。随分御心配なさつたでせう」

魔我彦「ハイ、誠に申譯のない事を致しました。何うぞ命だけは御猶豫を願ひま

す」

玉治別「人を助ける宣傳使がどうしてお前の命が欲しからう。お蔭で大變な修業をさして貰ひました。併し此後にはあんな危険な事は止めて貰ひたいものだ。天の眞浦の宣傳使が、駒彦、秋彦に宇津山郷の斷崖から雪中へ落されたよりも餘程難でしたよ」

魔我彦は眞赤な顔をして俯向く。

國依別「竹彦さま、氣が付きましたか」

竹彦「ハイ、氣が付きました。悪い事は出来ませぬワイ。餘り成功を急いだものですから何分貴方は高姫さまの御神業の妨害をなさる悪人だと信じきつて、あゝ云ふ無謀な事を致しました。併し乍ら魔我彦の精神は存じませぬが、決して竹彦はそんな悪人ではありません。八岐の大蛇の邪靈が私に憑いてあんな事をさせたのですよ。何卒私を恨まぬやうに願ひます」

空助「随分不減口を叩く男だな。併し乍らお前も是で悪は出来ないと言ふ事は分つたであらう」

魔我彦「私も肉體がやつたのではありませぬ。八岐の大蛇の眷族が憑つたのですから、どうぞ神直日大直日に見直し聞き直しを願ひます」

空助「大體お前達は高姫の脱線の熱心に惚込んで居るから、そんな不善的な事を平氣でやつて、立派な御神業が勤まると思つて居るのだ」

魔我彦「何事も日の出神さまの御命令通りだと思つて、高姫さまの意志を一寸忖度して居る處へ守護神がやつて来て、靈肉一致、二人を谷底へ突落し、殺さうとしたのです。併し乍ら魔我彦の肉體は何も知りませぬ」

空助「玉治別、國依別の宣傳使は青山峠の絶頂から、あの深い谷間へつき落され、すんでの事で五體を粉碎するやうな目に遇はされても、お前達兩人に對し鶺鴒の毛の露程も恨んで居ないのは實に感服の至りだ。お前達も此兩宣傳使の心を汲みとつて、少し改心したらどうだ。さうして改心を證明する爲に、今迄の高姫一派の計略を此處ですつかり自白したがよからう」

魔我彦「そればかりは自白出来ませぬ、高姫さまから假令死んでも云うてはならないと口留めされ、私も萬劫未代、舌を抜かれても言はないと固く約したので

すから」

空助「假令善にもせよ、悪にもせよ、まだ良心に輝きがあると見えて、約束を守ると云ふ心がけは見上げたものだ。俺達も是以上は最早追及せぬ。玉治別さま、國依別さまこの兩人を赦しておやりでせうなア」

玉治別「赦すも許さぬもありませぬ。何事も神様の御經綸、我々に油斷は大敵だと云ふ實地の教育を與へて下さつたのですから、其お役に使はれなかつた御兩人に對し、御苦勞様と感謝こそすれ、寸毫も不足に思つたり恨んだりは致しませぬ」

國依別「私も玉治別と同感です。魔我彦さま、竹彦さま、安心して下さい。當つて碎けよと云ふ事がある。此上は層一層親密にして、神界の御用を勤めようぢやありませぬか」

空助は立つて歌を歌ひ、【しら】けた此場の回復を圖つた。

大和河内を踏み越えて 漸々此處に紀の國の

青山峠の谷間に 言依別の御言もて

勇み進んで来て見れば 音に名高き十津川の

激潭飛沫の谷の水 衣類を脱ぎて眞裸體

ざんぶとばかり飛び込みて 御襖を修する折からに

樹々の青葉も追々に 黒ずみ來り天津日の

影は漸く隠るひて 闇を彩る折からに

頭上をかすめて落ち來る 二つの影は忽ちに

青淵目がけて顛落し 人事不省に「なる」瀧の

邊に二人を抱きあげ よくよく見ればこは如何に

玉治別や國依別の 神の命の宣傳使

青山峠の斷崖より つき落されて此さまと

聞いたる時の驚きは 流石に豪氣の空助も

胸に浪をば打たせつつ 闇を辿りて漸々に

二人を伴ひ平岩の 麓に漸く近寄つて

其夜を明かし兩人に 様子を聞けば魔我彦や

竹彦二人の悪戯と

聞いて再び胸躍り

深き仔細のある事と

此處に三人はとるものも

取敢ずして若彦が

館に訪ね来て見れば

思ひがけなき兩人が

離れ座敷でひそびそと

深き企みを語り合ふ

善惡邪正の其報い

忽ち現はれ北の空

雲を拂つて照り渡る

北極星の動きなき

若彦さまが雄心に

再び動く三人連れ

魔我彦竹彦兩人は

虚實の程は知らねども

兔も角前非を心から

悔いしが如く見えにける

嗚呼頼もしや頼もしや

仕組の絲に操られ

心にかかりし村雲も

愈晴らす今日の宵

あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして

鷹鳥姫が迷ひをば

晴らさせ給へ魔我彦や

竹彦一派の迷信を

朝日の豊榮昇ること

照し明して三五の

道の誠を四方の國

國の内外の島々に

月日の如く明かに

照させたまへ天津神

國津神達八百萬

百の御伴の神達の

御前に頸根つきぬきて

遙に祈り奉る

慎み祈り奉る

と歌ひ終つて兩人に向ひ、

空助「サア、魔我彦さま、竹彦さま、此空助と共に聖地へ歸りませう。若彦、玉

治別、國依別は是より伊勢路に渡り近江に出で、三國ヶ嶽を探險して聖地へ歸つ

て下さい。聖地には又もや高姫の陰謀が劃策されてあるから、空助は是より兩人

を伴ひ、すぐ歸國致さう

と云ふより早く忙しげに此館を立ち出た。魔我彦、竹彦は何となく心落着かぬ面

持にて、悄悄後に従ひ聖地をさして歸り行く。

第四章 長高説〔七一六〕

空助は魔我彦、竹彦二人と共に竊に聖地に歸り、表戸を閉し暫らく外出せず、聖地の様子を窺つて居た。玉治別、若彦、國依別の三宣傳使も密に聖地に歸り、國依別が館に深く忍び、高姫一派の陰謀を偵察しつつあつた。神ならぬ身の高姫は此事は夢にも知らず、鬼の來ぬ間の洗濯するは今此時と、私かに聖地の役員信徒の宅に布令を廻し、緊急事件突發せりと觸れ込んで、錦の宮の八尋殿に集めた。此日は風烈しく急雨盆を覆へす如く、雷鳴さへも天の東西南北に卷舌を使つてゴロツキ出した。斯かる烈しき風雷雨電にも屈せず、緊急事件と聞いて爺も婆も猫も杓子も、脛腰の立つ者は満場立錐の餘地なきまでに寄り集まつた。此時高姫は烏帽子、狩衣嚴めしく神殿に進み、言依別の教主、尻でも喰へと言ふ鼻息にて

齋主を勤め、型の如く祭典を濟ませ、アトラスの様な曼陀羅の面を高座の上に曝し、満座の一同に向ひ、鬼の首を籠で掻き斬つた様に得意氣に壇上に肩を揺り、腮を上下にしやくり乍ら、高姫「皆さま、今日は斯くの如き結構なお日和にも拘らず、残らず御參集下さいまして、日の出神の生宮も満足に存じます。言依別の教主は先日より少しく病氣の態にて引き籠られ、又空助の總務殿は何れへかお出でになり、此三五教の本山は首の無い人間の様だ、二進も三進も動きが取れないと、大勢様の中には御心配遊ばしたお方があつた様ですが、日の出神の御神徳は偉いものです。教主が出勤せなくても、空助其他の幹部宣傳使が居なくても、御神力に依つて、斯くの如く一人も残らず參集して下さつたと言ふのは、未だ天道様は此高姫を捨て給はざる證で御座いませう。空助總務の召集でも言依別の教主の召集でも、此八尋殿の建設以來、是だけ立錐の餘地なき迄お集まりになつた事は御座いませぬ。それだから神力が強いが、學力が強いが、神力と學力との力競べを致さうと神様が仰有るのです。論より證據、實地を見て御改心なさるが一等です。時に緊急事件と申し

まするのは外でも御座らぬ。我々日の出神の生宮、而も變性男子の系統の肉體、及び錚々たる幹部の御連中を差措き、「たか」の知れたお節の成り上りの玉能姫や、空助の娘お初の如き者に、ハイカラの教主が大切なる御神業をソツと命令し、吾々始め幹部の御歴々にスツパ又ケを喰はすと言ふ事は、如何に御神業とは言へ、吾々一同を侮辱したる仕打ちでは御座りませぬか。幹部役員は申すも更なり此處にお集まりの方々は何れも熱心なる三五教の信者様計りで御座りませう、神様のお仕組の御用を各々に致し度いばかりで、地位財産を捨てて此處へ來乍ら、譯の分らぬ空助一派の者に蹂躪されて、指を啣へてアフィンとして見て居ると言ふ事がありませうか。斯う見渡す所、大分立派な男さまも居られますが、貴方等は鞆丸を提げて居られますか。實に心外千萬ではありますまいかな」

加米彦は満座の中より又ツと立ち上り、

「高姫さまに質問があります、何事も神界の御經綸は我々人間の容喙すべき所ではありませんまい。如何に日の出神の生宮ぢやと仰有つても、神様が高姫さまの命令に服従せよとは、何處の筆先にも書いてはありませぬ。日の出神呼ばはりは廢

めて貰ひ度い。貴女こそ聖地及び神界の御經綸を混亂顛覆させる魔神の容器でせう。

高姫は高座より地團駄を踏み、目を釣りあげ、

誰かと思へば汝は秋山彦の門番加米彦ではないか。世界の大門開きを致す此高姫の申す事、「たか」が知れた一軒の家の門番が容喙すべき限りでない。すつ込つで居なされ。」

と一口に叩きつけ様とする。加米彦は負ず氣になり、高姫の立てる壇上に現はれて一同を見渡し、

「皆さま、私は今高姫さまの仰せられた如く、秋山彦の門番を致して居りました。加米彦で御座いますが、然し乍ら高姫さまも大門の番人ぢやと只今自白されたではありませぬか。門番の分際として大奥の事が如何して分りませう。それに就いても私は秋山彦の館、即ち神素盞鳴大神、國武彦命様の御隠れ館の門番を致して居つた者、其時に冠島、沓島の鍵を應答なく盗んで行つて玉を呑み込んだ人があると言ふ事は、私が今申し上げずとも、皆さんは既に已に御承知の事と存じます。」

斯様なる權謀術數到らざるなき生宮さまの言葉が、如何して眞劍に眞面目に信ぜられませうか。皆様冷靜によく御考へを願ひます」

座中より「尤も尤も」

「贊成々々」

「ヒヤヒヤ」

「ノウノウ」の聲交々起つて來る。

高姫は烈火の如く、

高姫「今「ノウノウ」と言つたお方は此日の出神の前に出て來て下さい。吾黨の士と考へます。サア早く此處へお越しなされ」

加米彦「恐らく一人もありますまい、私の説に對し「ノウノウ」と言つたお方は贊成の意味を間違つて言はれたのでせう。皆さま、失禮な申し分で御座いますが、中には老人や子供衆も居られますから、一寸説明を致します。「ヒヤヒヤ」と言へば私の説に贊成したと言ふ事、「ノウノウ」と言へば贊成せないと云ふ事です。如何です。尚一度宣り直して貰ひませう。さうして不贊成のお方は「ノウノウ」と言つて下さい」

場の四隅よりは「ヒヤヒヤ」の聲計りである。殊更大きな聲で「ノウノウ、然

し高姫の説にはノウノウだと付け加へた。高姫は口角泡を吹き乍ら、
「皆さま、今となつて分らぬと言つても餘りぢやありませんか、大切な御寶を
隠されて、よう平氣で居られますな。第一言依別のドハイカラの教主は、空助の
様な奴にチヨロカカされ、系統の生宮の高姫を疎外し、さうして其寶をば何處か
へ隠して仕舞つた。皆さまはそんな章魚の揚壺を喰はされた様な目に遇ひ乍ら、
平氣で御座るとは無神經にも程があるぢやありませんか。何程言依別の教主が偉
くても、空助の力が強くても、神界の事が學や智慧で分りますか。昔からの根本
の因縁、大先祖は如何なる事を致して居つたか、如何なる因縁で此世へ生れて來
たか、日の出神の誠のお活動は如何なものか、龍宮の乙姫様の御正體は如何かと
言ふ明瞭な答へが出来ますか。モウ是からは錦の宮を始め此八尋殿は、及ばず乍
ら此高姫が總監致します。玉能姫や初稚姫の女を選んで、大切な御用をさせると
言ふ譯の分からぬ教主に、隨喜湯仰して居る方々の氣が知れませぬ。チツと皆さ
ん、耳の穴を掃除して日の出神の託宣を聞き、活眼を開いて實地の行ひをよくお
調べなされ。根本の要を掴んだ日の出神の生宮を差措いて、枝の神の憑つた肉體

に何が分りますか。ここは一つ……誰の事でも無い、皆お前さん等の一身上に關する大問題、否國家の大問題です」

加米彦「只今高姫さまのお言葉に就いて異議のある方は起立を願ひます」

一同は残らず起立し「異議あり異議あり」と叫んだ。

加米彦「皆さまの御精神は分りました。私の申した事に御賛成のお方は何卒尚一度起立を願ひます」

高姫は隼の如き目を睜り、各人の行動を監視して居る。壇下の信者は高姫に顔を睨まれ、起立もせず坐りもせず、中腰で居るものも澤山あつた。

加米彦「皆さまに伺ひますが、教主が神界の御命令に據つて、玉能姫さま、初稚姫さまに御用を仰せ付けられたのが悪いとすれば、まだまだ横暴極まる悪い事が此處に一つある様に思ひます」

聴衆の中より「有る有る、澤山にある」と呶鳴る者がある。

加米彦「その職に非ざる身を以て、神勅も伺はず、教主の承諾も得ず、部下の役員を任免黜陟すると言ふ事は、少しく横暴ではありますまいか。黒姫様、鷹依姫

様、龍國別様、テーリスタン、カーリンスを聖地より追出したのは、果して何人の所爲だと思ひますか」

此時高姫は肩を斜に聳やかし乍ら、

高姫「加米彦、そりや何を言ひなさる。系統の生宮、日の出神が命令をなさつて、

黒姫以下を海外諸國へ玉探しにお遣り遊ばしたのだ。何程言依別や初稚姫が偉い

と言つても、日の出神には叶ひますまい。學や智慧で定めた規則が何になるか。

そんな屁理屈は神界には通りませぬぞや」

加米彦「これ高姫さま、お前さまは二つ目には日の出神だと仰有るが、そんな立

派な神様なら何故寶玉を隠されて、それを知らずに居りましたか。その分らぬ

様な日の出神なら我々は信賴する文けの價値がありません」

一同は「ヒヤヒヤ」と叫ぶ。中には「加米彦さま、確り頼みます」と彌次る者

もあつた。

高姫「誰が何と言つても日の出神に間違ひはない。そんな小さい事に齷齪して居

る様な日の出神なれば、如何して此三千世界の御用が勤まりますか。物が分らぬ

にも程がある。假令此高姫一人になつたとて此事仕遂げねば措きませぬぞ」

加米彦「高姫さま、一人になつてもと今言はれましたな。此通り澤山の方々が見えて居つても、只一人も貴女の説に賛成する者が無いのを見れば、既に已に一人になつて居るのではありませんか」

場の四隅より「妙々」「賛成々々」「しつかり頼む」「孤城落日」「等の彌次り聲が聞えて來た。

高姫「盲目千人、目明一人の世の中とはよくも言つた者だ。神様の御心中をお察し申す。あゝあ、斯んな分らぬ身魂の曇つた人民計りを、根の國、底の國の苦しみから助けてやらうと思召す大神様や、日の出神様の廣大無邊のお心が【おいとしい】」

と涙を拭ふ。

加米彦「高姫さま、貴女の誠心は我々も認めて居りますが、然し乍ら根本的に大誤解があるのを我々は遺憾に存じます。貴女の肉體は變性男子の系統だから曲津神が抱込んで、國治立大神のおでましを妨害し、再び悪魔の世界にしようとして

居るので、ちつとは省みなさつたが宜しからう、我々の様な肉體に憑つた處で惡魔の目的は達しない。斷つても斷れぬ系統の肉體を應用して日の出神だと誤魔化すのですから御用心なさらぬと、遂には貴女の身の破滅は言ふに及ばず、大神様の御經綸を妨害し天下に大害毒を流す様になりますから、此處は一つ冷靜にお考へを願ひたい。寄ると觸ると幹部を始め數多の信者は、此事計りに頭を悩めて居りますが、然し貴女が變性男子の系統でもあり、斷つても斷れぬお方ぢやと言ふので皆遠慮して居るのです。此加米彦なればこそ、職を賭して斯かる苦言を申し上げるのです。決して貴女を排斥しようとか、除け者にしようとの悪い心は少しもありません。第一貴女のお身の上を案じ、大神様の御經綸を完全に成就して頂き、世界の人民もミロクの神政を謳歌し、一時も早く松の世をつくり上げて度いと熱心から御忠告を申し上げるのです。何卒よくお考へを願ひます」

高姫「秋山彦の門番、加米彦、そりや何を言ふか。ヤツとの事で宣傳使の末席に加へられたと思つて、ようツベコベと其んな屁理屈が言へたものだ。系統を抱き込んで目的を立てると言ふ事は、それは言依別命の事だ。此高姫は正真正銘の變

性男子よりも早い神様の御降臨、云はば變性男子よりも高姫の方が先輩と云つても異論はありますまい。打割つて言へば、變性男子よりも此日の出神の生宮が教祖とならねばならぬ者だ。變性男子の肉體は最早昇天されたのだから、後は高姫が教祖の御用をするのが神界の經綸上當然の歸結であります。然し乍ら一步を譲つて變性女子の言依別を教主にしてやつて置いてあるのは、皆此高姫が黙つて居るからだ。然し最早斯うなつては勘忍袋の緒がきれて來た。日の出神が加米彦の宣傳使を今日限り免職させ、空助の總務役を解き、言依別命を放逐し、玉治別、國依別の没分曉漢も今日限り免職させるから、今後ノソノソ歸つて來ても皆さまは相手になつてはなりませんぞ』

加米彦 『アハ、ハ、ハ、何程高姫さまが地團駄踏んで嘸鳴らつしやつても、少しも我々に於ては痛痒を感じませぬ。お前に任命されたのではない。言依別神様に任ぜられたのだから、要らぬ御心配をして下さいませぬ』

高姫 『お前等の知つた事ぢや無い。善一筋の誠正直を立て通す妾の仕込んだ魔我彦、竹彦兩人こそ、本當に立派な宣傳使だ。是から誰が何と言つても魔我彦を總

務にし、竹彦を副總務に神が致すから左様心得なされ。嫌なお方は退いて下され。

此錦の宮は高姫が誰が何と言つても總監致すのだから」

此時佐田彦、波留彦の兩人は壇上に驅上り、

佐田彦「吾々は言依別命様より或特別の使命を帯び、御神寶の御用を勤めた者で

あります。何と言つても高姫さまは其隠し場所が分らなくては駄目ですよ。大勢

の者が如何しても貴女に畏服するのは、貴方が天眼力で玉の所在を言ひ當なくて

は日の出神も通りませぬ」

高姫は目を瞋らせ、

高姫「エ、又しても門掃の成上りがツベコベと何を言ふのだ。玉の所在が分ら

ぬ様な事で、斯んな啖呵がきれますか。屹度時節が來たなれば現して見せて上げ

よう」

佐田彦「日の出神も時節には叶ひませぬかな」

波留彦「吾々の心の裡にチヤンと仕舞ひ込んであるのだが、常平生から人の心が

見え透くと仰有る日の出神さまに、此胸の中を一寸透視して貰ひませうか」

と襟を兩方に開け、胸板を出して稍反身になり、握り拳を固めてウンウンと毆つて見せた。

高姫「ツベコベと神に向つて理屈を言ふ間は駄目だ。誰が何と言つても魔我彦、竹彦位立派な者はありません。妾の言ふことが氣に喰はぬ人はトツトと尻から上げて歸つて下さい。お筆先に此大本は大勢は要らぬ。誠の者が三人さへあれば立派に御用が勤めあがると、變性男子のお筆にチヤンと出て居る。今が立替立直しの時期ぢや、サアサア早う各自に覺悟を成さいます。此處は大勢は要りませぬ。大勢あるとゴテついて、肝腎の御用の邪魔になる。日の出神の生宮が天晴れ神政成就さして見せるから、其時には又集まつて御座れ。神は我子、他人の子の隔ては致さぬから、其時になつたら、「高姫様始め魔我彦、竹彦の宣傳使、エライ取違ひを致して居りましたから、何卒御勘辨下さりませ」と逆トンボリになつてお詫に來なされ。氣好う赦して上げるから、今は御神業の邪魔になるからトツトと歸つて下され。歸るのが嫌なら高姫の言ふ事を聞いて、改心をなさるが宜からう」

斯かる所へ空助は魔我彦、竹彦兩人を従へ、ノソリノソリと人を分けてやつて

来た。群集は三人の姿を見て思はず雨霰と拍手した。空助一行は一同に目禮し乍ら高座に上り、

空助「ア、是は是は高姫様、御演説御苦勞で御座いました。嘸お疲れでせう。貴女の御信任厚き魔我彦、竹彦の立派な宣傳使が見えました。是から貴女に代つて演説なさるさうです。私も大變に兩人さんのお説には感服致しました」

高姫は百萬の援軍を得たる如き得意面を曝し、肩を聳やかし稍仰向き乍ら、高姫「空助殿、ア、それは御苦勞であつた。よう其處迄改心が出来て結構だ。是

から何事も高姫の申す事を聞きなさるか、イヤ改心をなさるか」

空助「改心の徹底迄いつたものは、最早改心する餘地がありません。貴女のように改心から後戻りをして慢心が出来ると、又改心する機會がありませんが、吾々の如き者は、融通の利かぬ困つた者です。貴女のように慢心しては改心し、改心しては慢心し、慢心改心、改心慢心と自由自在の藝當は、到底吾々の様な朴訥な人間では不可能事です、アツハ、ハ、ハ、と豪傑笑ひをする。群集は手を拍つて笑ふ。

高姫「ア、魔我彦、竹彦、好い處へ歸つて御座つた。皆さまに合點の往く様に此處で改心の話を開かして下さい。さうすれば此高姫の日頃教育した力も現はるなり、お前さまの善一筋の一分一厘歪はぬ日本魂の生粹が證明されるのだから、サア早うチャツと皆さまに大々的訓戒を與へて下さい。これこれ加米彦、佐田彦、波留彦、餘り澤山に高座に居ると窮屈でいかぬ。暫らく下へおりて、魔我彦や、竹彦の大宣傳使の御説教を聞くのだよ。さうすれば、チツトはお前さまの我も折れて宜からう」

と得意満面に溢れ肩を揺りイソイソと「いきつ」て居る。魔我彦は大勢に向ひ、皆さま、私は高姫様の神様に御熱心なる御態度に心の底から感銘致しまして、如何かして高姫様の思惑を立てさし度いと思ひ、御心中を忖度致しまして紀伊の國に罷り出で、實の處は若彦を巧く誑かし聖地へ連れ歸り、空助さま、言依別の教主を或難題を塗りつけ放逐しやうと企みつつ、大臺ヶ原の峰續き青山峠までスタスタやつて往つた所、玉治別、國依別の兩宣傳使が谷の風景を眺めて、休息して居られました。そこで高姫様の一番お邪魔になるのは言依別命、それについて

命みことの信任しんにん厚あつき玉治たまはる別わけ、國依くに別よりの兩人りやうにんを、何なんとかして葬はつむり去さらうと思おもひ進すすんで行いつた所ところ、折をりよくも日ひの暮前くれまへ兩人りやうにんに出會でつくわし、二人ふたりの隙すきを覗うかがひ千仞せんじんの谷間たにまへ突落つきおとし、高たか姫様ひめさまの邪魔じやまものを除のぞかむものと考かんがへて居をりました。萬々まんまん一都合いちつがふよく行ゆけば、あとに殘のこつた言依ことより別命位わけのみことへらは最早物もはやものの數かずでもないと、忽たちまち惡心あくしんを起おこし、思おもひきつて谷底たにぞこへ突つき込こみました。兩人りやうにんは五體ごたいが滅茶めちや々々めちやになつて斃死くたばつただらうと思おもつて居あましたが、「あに」計はからむや妹圖いもつとはからむや、若彦わかひこの館やかたに於おいて空助もくすけ様始はじめ玉たま、國兩宣傳くにりやうせん使んしに出會でくわした時ときのその苦くるしさ怖こはさ、屹度復讎きつとかたきを討うたれるに相違さうゐないと思おもつて心配しんぱいを致いたし、生いきた心地ここちも無なくガタガタ慄ふるへ乍ながら、矢庭やにはに庭先にはさきの松まつの樹きに驅上かけのぼり、神かむ憑がりの言げんを信しんじ雲くもに乗のつて逃にげ出ださうと思おもひ、過あやまつて二人ふたり共樹上ともじゆじやうより大地だいちに向むかつて眞逆まつさか様に墜落つあらくし、人事不省じんじふせいに陥おちいつて居をる所ところを、玉たま、國くにの兩宣傳使りやうせんてんしの手厚てあつき御保ごほ護ごを受け、さうして鵜うの毛けの露つゆほども怨うらみ給たまはず、却かへつて神様かみさまから結構けつこうな教訓けうくんを受うけたと喜よろこんで下くださつた時ときの吾々われわれの心こころ、到底高姫たうていたかひめさまの教をしへられる事こととは天地雲泥てんちうんでいの違ちがひで御座ございました。そこで私わたくしは何故なぜ此この樣やうな善ぜんのお方かたを惡わるく思おもつたか知しらぬと、懺悔ざんげの念ねんに堪たへず考かんがへ込こんで居をりましたが、矢張やつぱり言依ことより別わけの教主けうしゆの教理けうりを聞きいて御ご

座るお蔭で、斯んな立派な人格になられたのであらうと深く感じました。又私があの様な悪心を起したのも、矢張高姫さまの感化力がさせた事だとホトホト恐ろしくなりました。如何しても人間は師匠を選ばねばなりません。水は方圓の器に随ふとか申しまして、教はる師匠、交はる友によつて善にもなり、悪にもなるものと堅く信じます。私は皆さまに今日迄の取違を此處にお詫致します」

高姫「コレコレ魔我彦、誰がそんな亂暴な事をせいと言ひましたか、それは大方言依別の靈が憑つたのだらう」

竹彦「イ、エ、言依別さまの身魂は餘り尊く清らかで、我々の様な小さい曇つた鏡にはおうつりに成りませぬ。全く高姫さまや、黒姫さまの生靈が憑りましてな」

聴衆は手を拍つてドヨメキ渡る。空助は又もや口を開き、

空助「皆さま、私は言依別の教主より内命を奉じ、十津川の谷間へ急行せよとの仰せにより行つて見れば、谷川に似合はぬ大瀧の下に立派な青い淵がありました。そこで水行して居ると上から二人の男が突然降り來り、ザンブとばかり淵へ落ち込んだ。日の暮紛れに何人か分らねども見逃す譯にも行かぬ、直に淵へとび込んだ」

で救ひ上げ色々いろいと介抱かいぼうした所ところ、二人ふたりの男をとこは漸やうやく息いきを吹ふき返かへしました。よくよく見みれば、玉治別たまはるわけ、國依別くによりわけの宣傳使せんでんしで御座ございました。それより兩人りやうにんに向むかひ如何どうして斯こんな所ところへ落ち込こんだのですかと尋たづねて見みましたが、御兩人ごりやうにんは他人たにんに瑕きず瑾ずをつけないと言いふ誠心まごころから、現在此げんざいこのまがひこ魔我彦まがひこ、竹彦たけひこにつき落おされた事ことを一いち言ごんも發はつせず隠かくして居をられました。さうして二人ふたりに對たいして毛頭まうとう怨うらみを抱いだいて居をられないのには私わたくしも感かん服ぶく致いたしました。是これと言いふのも全まったく瑞みつの御靈みたまの大精神だいせいしんを體得たいとくして居をられるからだ、流石さすがの空助もくすけも感涙かんるゑに咽むせび、それより三人さんにんは道みちを急いそいで若彦わかひこの館やかたに行いつて見みれば、魔我彦まがひこ、竹彦たけひこの兩人りやうにんが何事なにことか善よからぬ虚言きよげんを構かまへ若彦わかひこを唆そそのかし大陰謀だいいんぼうを企たくまむと居ある所ところでありました。然しかし乍ながら流石さすがの惡人あくにんも誠まことの心こころに感かんじ斯かくの如ごとく改心かいしんを致いたして、自分じぶんの罪状ざいじやうを逐ちく一いち皆みなさまの前まへに曝さらけ出し眞心まごころを示しめして居をられます。之これでも言依別ことよりわけ様の教をしへが惡あくと言いはれませうか。高姫たかひめさまの教をしへは果はたして完全くわんぜんなもので御座ございますか。』

と釘くぎをさされて高姫たかひめはグツとつまり、壇上だんじやうを蹴散けちらす如ごとき勢いきほひで肩かたを斜はすかに首くびを左さ右みぎに振ふり乍ながら、己おのが館やかたへ足早あしはやに歸かへり行ゆく。

斯^かかる所^{ところ}へ言^{こと}依^{より}別^{わけ}の教^{けう}主^{しゆ}は莞^{くわん}爾^じとして現^{あら}はれ、一場^{いちぢやう}の演^{えん}説^{ぜつ}を試^{こころ}みた。玉^{たま}治^{はる}別^{わけ}、
國^{くに}依^{より}別^{わけ}、若^{わか}彦^{ひこ}の三^{さん}人^{にん}は此^{この}場^ばに悠^{いう}然^{ぜん}として現^{あら}はれ來^{きた}り、一^{いち}同^{どう}に會^あ釋^{しゃく}し、神^{しん}殿^{でん}に向^{むか}ひ
天^{あま}津^つ祝^{のり}詞^とを奏^{そう}上^{じやう}し終^をつて一^{いち}同^{どう}解^{かい}散^{さん}したり。今^{こん}後^ごの高^{たか}姫^{ひめ}は如^い何^かなる行^{かう}動^{どう}を執^とるなら
むか。

(大正一一・六・一〇 舊五・一五 北村隆光録)

第二篇 恩^{おん}愛^{あい}の涙^{なみだ}

第五章 親^{おや}子^こ奇^き遇^{ぐう}〔七一七〕

あななひけつ
三五教の宣傳使

あきひここまひこりやうにん
秋彦駒彦兩人は

ことよりわけ
言依別の御言もて

あめまうら
天の眞浦の宣傳使

そのしんりよく
其心力を試さむと

ひと
人の尾峠の山麓に

すがた
姿を「やつし」て雪の空

ここ
茲に三人は宇都山の

たけし
武志の宮の社務所に

しばやす
暫し休らひ神司

まつたかひこ
松鷹彦に巡り會ひ

あきひここまひこりやうにん
秋彦駒彦兩人は

あめまうら
天の眞浦を深雪降る

きしうへ
岸の上より突落し

ひがし
東を指して進み行く

かみめぐみ
神の恵に近江路や

ひえいざんおろし
比叡山風を浴び乍ら

おほつふしみ
大津伏見を乗り越えて

こぶね
小舟を用意ひ淀の川

かははば
川幅さへも枚方の

うつら
浦に漸々舟止め

なには
浪速の里を右に見て

さかひきしわださのふけい
堺岸和田佐野深日

き
紀の川渡り和歌山を

いつしか過ぎて日高川

やうやう川邊に着きにけり。

日は漸やっやくに暮くれて來きた。旬日じゆんじつの雨あめに川かはは濁水だくすゐ漲みなぎり、渡舟わたしぶねを出だす由よしもない。二人ふたりは已やむを得えず後あとへ引返ひきかへし、日高山ひだかやまの山奥やまおくに瀧たきありと聞きき、暫しばし川水かはみづの減ひく迄まで荒行あらかやうをなさむと、月つきの光ひかりを力ちからに、山奥やまおく深ふかく進すすみ入いる。瀧たきの邊ほとりには小ちひさき祠ほくらがあつて、龍神りうじんが祀まつられてある。此社このやしろの周邊まはりには不思議ふしぎにも立派りっぱな柿かきの實みが、枝えだもたわわにぶら下さがつて居ゐる。人も取とらねば烏からすも取とらない。龍神りうじんの最もつとも寵愛ちやうあいの柿かきと稱となへられて居をる。二人ふたりは夜中よなかに人ひとの足跡あしあとに研とぎすまされた路みちを辿たどり、漸やっやく瀧たきの傍そばに着ついた。手て早く衣類いるぬを脱ぬぎ棄すて、瀧水たきみづに體からだを清きよめ、祝詞のりとを奏上そうじやうし終をはつて、社やしろの前まへに端坐たんざし、鎮魂ちんこんの姿勢しせいを執とつた。たわむ許ばかりの柿かきの枝えだは折柄をりからの強風きやうふうに煽あふられて二人ふたりの體からだを撫なでて居ゐる。二人ふたりは美味うまさうな匂におひに、鎮魂ちんこんを終をはり、てんでにむしつて飽あくまで食くつた。忽たちまち社殿しゃでんは鳴動めいどうし始はじめた。其聲そのこゑは時々じじこくこく刻く々に強きやうだい大だいとなり地響ぢひびきがし出だした。秋彦あきひこ「ヤアどうやら地震ぢしんらしいぞ」駒彦こまひこ「ナア二、地震ぢしんではない。餘あまり烈はげしき鳴動めいどうで地響ぢひびきがして居ゐるのだ。それに就ついても我々われわれが此柿このかきを取とつて食くふが早はやいか、此社殿このしゃでんが鳴動めいどうし始はじめたぢやないか。神かみ様さまは惜をしんで御座ござるのではあるまいかなア」

秋彦「ナニこれ丈澤山の柿、五つや十食つた所で、吾々でさへも惜まないのだから、況して神様は人間が喜んで食ふのを、御立腹なさる道理がない。人間が食ふ爲に出来て居るのだ。そんな事は有るまい」

社殿はますます鳴動烈しくなり、何とも知れぬ厭らしき聲で唼鳴りつけられる様な気がして、知らず知らずに二人は怖氣づき、「惟神靈幸倍坐世」と稱へ乍ら、元來し路を倒けつ轉びつ逃げて行く。夜は漸く明け放れた。谷川の清き水に衣を洗ふ白髪異様の婆がある。

秋彦「駒彦さま、向ふを見よ。出よつたぜ」

駒彦「ヤア本當に、怪體な奴が居るぢやないか。何か洗濯をして居るやうだ。此山奥に人家も無いのに、あんな年の老つた老婆が洗濯して居るとは、チツと合點が行かぬ、此奴ア何者かの化物かもしれぬぞ。用心せなくてはなるまい」

秋彦「谷と谷とに挟まつた一筋路の所に居るのだから、どうしても通らぬ譯にも行かず、思ひ切つて行つて見ようかなア」

駒彦「何れ行かぬばならぬ道程だが、マア一寸考へて行く事にせう。強く行くか、

弱く行くか、それから一つ定めて行かうぢやないか」

秋彦「兔も角臨機應變、其時の都合にしよう」

と薄氣味悪く、歩みもはかばかしからず、厭相に一歩々々進んで行く。見れば婆の頭の白髪から鬘甲の様な角が前の方へニユーツと曲つて二本、高低なしに行儀よく八の字を逆様に生えて居る。

秋彦「オイ駒彦、此奴ア弱く行けば付け込まれる。強く行けば怒つてかぶりつくかも知れない。兔も角滑稽で婆アの腮を解いて通る事にしようかい。それに就ては秋彦、駒彦では面白くない。元の馬公、鹿公に、名だけ還元して掛合つて見よう」

駒彦「それが宜からう」

と小聲に言ひ乍ら、婆の間近に近寄つて来た。婆は鬢と見えて、二人の足音に氣が付かぬものの如く、一生懸命に血の付いた衣を洗うて居る。

秋彦「モシモシお婆アさま……コレお婆アさま」

と後の一聲に力をこめて高く呶鳴つた。婆アさんは一生懸命に見向きもせず、洗

うて居る。

秋彦「ハハア此奴ア聾だ。併し随分厭らしい婆だ。彼處を渡らねば向うへ行く事は

出来ず困つた事だなア。暫く後へ引返し、婆アが洗濯を濟まして歸るまで待つ

ことにせうかい」

駒彦「イヤもう一步も後へ歸る事は出来ない。あれ丈鳴動しられ、厭らしい聲で

唼鳴られては、堪つたものぢやないからな」

秋彦「それだと云うて進む譯にも行かず、進退谷まるぢやないか」

駒彦「そこが宣傳使だ。神様のお力で突破するのだ。鬼婆に喰はれた所で構はぬ

ぢやないか」

秋彦「こんな奴に食はれて堪るものか。お道の爲に生命を棄てるのは苦しうない

が、鬼婆の餌食になつちや宣傳使も駄目だ。聾を幸ひ、ソツと背後から往つて、

婆を突つこかし、其間に驅歩で進まうぢやないか」

駒彦「オウさうだ。たかが知れた婆アの一人、此方は二人の荒男だ。併し乍ら騙

討は面白くない。婆アに斷つて通らして貰はう。萬一通さぬと言ひよつたら、其

ときこそ我々は死物狂ひだ

と言ひ乍ら、婆アの狭い谷川に塞がつて居る側近く寄り、俯いて居る腰を恐さうに押し乍ら、

駒彦「コレコレお婆アさま、此處を通して下さい」

と揺つて見た。婆アさまは驚いて二人の顔を打ちまもり、

婆「ヤアお前はそんな風をして、山賊を働いて居るのか。此婆はお前の見かけの

通り何一つ持つて居ないぞ」

駒彦「オイ婆ア、お前は耳が聞えぬのか」

と耳の邊へ口を寄せ、力一杯呶鳴りつけた。婆アさんはビツクリして、

婆「エ、やかましいがな。聾か何ぞの様に、そんな大きな聲で耳のはたで云ふも

のぢやない。鼓膜が破れて了うぢやないか」

駒彦「鬼婆ア、お前耳が聞えるのか」

婆「聞えるとも、耳の無いものならイザ知らず、此通り二つの耳があるぢやない

か。聞えぬ耳なら、誰がアタ邪魔になる、顔の両側にひつつけて置くものかい。

譯わけの分わからぬ泥棒どろぼうぢやなアア」

秋彦あきひこ「是これは怪けしからぬ。我々われわれを泥棒どろぼうとは何なんの事ことだ」

婆ばば「それでも蓑笠みのかさを着きたり金剛杖こんごうづゑを突ついとる奴やつは皆みんな泥棒どろぼうだよ。此間このあひだもバラモン教けう

の宣傳使せんでんしぢやとか云いつて、老爺ぢいと婆ばばアと娘むすめと三人連さんにんづれの所ところへ、二人ふたりの奴やつが泊とまり込こ

み、夜よるの夜中よなかを見濟みすまして、此婆このばばアや爺おやぢどのを柱はしらにひつ括くくり、一人ひとりの娘むすめを調裁坊てうさいぼう

に致いたし、年寄としよりの蓄ためた金かねをスツクリふんだくり、終局しまひのはてにや娘むすめを鶉殺なぶりころしにして歸かへ

りやがった。大方おほかたお前まへも其奴等そいつらの同類どうるゑだらう。あんまり胸糞むねくそが悪わるいので、お前達まへたち

二人ふたりがコソコソ話ばなしをやつて居をつたが聞きかぬ振ふりをして居をつたのだ。モウ斯こうなる

上うへは讎敵かたきの片割かたわれだ。皺腕しわつでの續つづく限り格闘かくとうして喉笛のどぶえの一つひとつも喰くひ切きらねば置おかぬ。

サアどうだ」

秋彦あきひこ「これはこれは怪けしからぬ事ことを仰有おつしやる。併しかしお前まへさまは頭あたまに角つのを生はして居あ

るからは、人ひとを取り喰くらふ日高山ひだかやまの鬼婆おにばばだらう」

婆ばば「きまつた事ことだ。鬼婆おにばばだから角つのが生はえとるのぢや。サア其處そこへ平太へたれ。此婆このばばが

荒料理あはれうりをして娘むすめの仇かたきを討うつてやらう」

駒彦「コラ婆、何を吐しやがるのだ。俺は三五教の馬公と云ふ宣傳使だぞ。泥棒
なんて……馬鹿にするな。さうして貴様の娘なればヤツパリ鬼娘だらう。日頃人
を喰ふ酬いで吾子を取られたのだらう。鬼子母神と云ふ奴は、千人の子が有る癖
に、人の子を奪つて喰ひよつた奴だが、或時に神様から、千人の中の一人の子を
隠されて、朝から晩まで泣き通し、それから……わしは千人も子がある中にタツタ
一人失つても是れ丈悲しいのだ、況して人間は三人や五人、多うて十人位の子を
一人取られたら悲しからうと云つて、改心しよつて立派な佛になつたと云ふ事だ
が、貴様も子を取られて悲しい事がわかれば、是れから人間の子であらうが、親
であらうが、決して取り喰うてはならぬぞ」
婆「ホ、ホ、ホ、わしを鬼婆と云ふのか、そしてお前は三五教の宣傳使ぢやなア、
宣傳使なら、鬼婆か普通の婆アか分りさうなものぢやないか」
駒彦「それでも頭あたまに角つのの生はえてる奴やつは鬼おにぢやないか。俺おれは斯こう見みえても、元もとは馬
さんと云つて、紀きの國くにの生うまれ、様やうす子こあつて都みやこへ出いで、立派りつぱな宅うちに召使めしつかはれ、追々
出世しゅつせし、今いまは押おしも押おされもせぬ宣傳使様せんでんしさまぢや。どうして見損みそこなひを
するものかい。

そんな有耶無耶の事を言つて、俺を誤魔化さうと思つても駄目だぞ」

婆「ナニツ、お前は紀の國の生れ……都へ奉公に行つて居つたと……それは妙な

事を聞くものだ。さうしてお前の名は馬ぢやないか」

駒彦「さうぢや、馬と云つたのぢや。それが如何したと云ふのだい」

婆「一寸此方に心當りがあるから、婆の宅まで来て貰へまいかな」

秋彦「オイオイ駒彦、しつかりせよ。計略に懸るぞよ」

婆「疑ひなさるな。爺いと婆アと二人暮した。一人の兄は幼い時に天狗にさらは

れて、何處かへ連れて行かれたきり今に歸つて來ず、一人の妹娘は泥棒に二三日

前生命を奪られ、爺婆二人が面白からぬ月日を送つて居るのだ。小さい宅だけ

ど、滅多に食はうとも、吞まうとも云はぬ。尋ねたい事があるから來て下され」

駒彦は雙手を組み首を傾け、婆アの顔を熟々と眺めて居る。

駒彦「オイ婆ア、其角は何時から生えたのかい」

婆「オホ、、、あまり泥棒が出て來よるので、用心の爲に鹿の角を頭にひつ付

けて鬼に見せて居るのだ。それ此通り……」

と無雑作に二本の角を引【むし】つて見せる。

秋彦「アハ、ハ、ハ、ヤア是れで一寸は安心だ。さうするとヤツパリ鬼婆ではなかつたらしいな。コレコレ婆アさま、お前のお宅は何處だ」

婆「そこへニコツと突き出て居る大きな岩を、クルツと廻ると、炭焼小屋の様な家がある。そこが妾の住家だ。此村は七八軒の所だが、近所へ行くと云つても一里位行かなならぬのだから不便なものだ。サアどうぞ婆の宅まで来て下さい」

駒彦「何は兔もあれ、お婆アさま、従いて参りませう」

婆はニコニコし乍ら先に立ち歸つて行く。駒彦は何か心に當るものの如く首を頻りに左右にかたげ乍ら従いて行く。あとより秋彦は不審相に二人の姿を看守りつつ、二三間遅れて、厭相に進んで行く。山の鼻に又ツと突出た岩の麓を廻はると、七八間向うにかなり大きな草葺の家が建つて居る。婆アさまは駒彦に向ひ、婆「あれが妾の家だ。どうぞ今晚はゆつくり泊つて往て下されや」

秋彦は「なんだ、合點がゆかぬ事だなア」と呟きつつ、不安の念に驅られ、手を組んで細路に佇立して居る。婆アさまは半破れた戸をガラリと開き、

婆「サアサアお若い衆、這入つて下さい」

駒彦「ハイ有難う」

と後を振り返り見れば、四五間あとに秋彦は手を組み思案らしく佇んで居る。

駒彦「オイ秋彦、早う来ぬか。何して居るのだ」

秋彦「俺は外から警固して居るから、貴様用心して中に這入れ。釣天井でも有つ

て「バサン」バサンとやられちや大變だから、よく氣を付けて這入れ。俺はサア

事だと思つたら、直に飛び込んで讎敵を討つてやるから……マア豫備として、俺

は外に待つて居る」

駒彦「そんなら宜しう頼む」

と鬨を跨げ屋内に姿を隠した。爺いさまは目も疎いと見え、ヨボヨボし乍ら奥の

間から現はれ、

爺「アー婆か、よう歸つて呉れた。どうも寂しくて困つて居つた。あまり歸りが

遅いので、又もや泥棒に出會したのではなからうかと、氣が氣でなかつた。併し

お前の背後に誰か従いて来て居るぢやないか。ウツカリした者を引張つて來ると、

またこのあひだ
又此間の様な目に會はされるぞ。性懲りもない、道行く人間を掴まへて、善根だ
の、宿をしてあげようのと云ふものだから、あんな事が起るのだ。モウ今日は、
お前が何と云つても私が承知をせぬ。……どこの方が知らぬがトツトと歸つて下
され」

婆「爺さま、一寸此人は合點のいかぬ事があるので連れて歸つたのぢや。妾だつ
てモウ懲りてるから、滅多な奴を連れて歸りはせぬ。此人は馬とか云ふ男ださう
な、倅の名も馬だから、何とはなしに戀しくなつて連れて歸つたのぢや。ヒヨツ
としたら、子供の時に天狗に浚はれた馬ぢやなからうかと、心の故か思はれてな
らないから……」

爺「さう聞くと何だか戀しい様な氣がする。コレコレ馬さまとやら、足をしもう
て上つて下さい」

駒彦「ハイ有難う御座います。私も一人者で御座います。何だか此お婆アさまが
戀しくなつて参りました」

と云ひ云ひ足をしもうて座敷にあがる。秋彦はコハゴ八乍ら門口までやつて来て、

様子やつすを考かんがへて居ゐる。

爺おやぢ「お前は馬うまさまと云いふさうだが、一體いったい何處どこの生うまれだ」

駒彦こまひこ「ハイ私わたしは餘あまり小ちひさい時ときで、しつかりは記き憶おくしませぬが、何なんでも日高川ひだかがはの畔ほとりだつた様やうに幽かすかに覺おぼえて居をります。併しかし乍ながらそれも夢ゆめだか現うつだか分わからないのです。天狗てんぐにさらはれて山城やましろの國くにの紫野むらさきのの大木たいぼくの上うへに引掛ひっかけられて居をつたのを、その酋長しゅじやうが認みとめて助たすけて下くだされ、それから其處そこの家いへの子ことなつて育そだつて來きた者もので御座ございます」

爺おやぢ「わしは常楠つねくすと云いふ者ものだ。さうして婆ばばアはお久ひさと云いふ者ものだが、兩親りやうしんの名なは覺おぼえて居をるか」

駒彦こまひこ「何分子なにぶん子供の事ことで分わかりませぬが、御主人ごしゆじん様さまのお言葉ことばには、私わたしの守まもり袋ぶくろに、常つねとか久ひさとか云いふ印しるしがあり、私わたしの名なは馬楠うまくすと書かいてあつたさうで、主人しゆじんは馬公馬公うまこううまこうと仰おつしや有あつたのだと聞きいて居をります」

爺おやぢ「ナニ、常つねに久ひさ、馬楠うまくすと書かいてあつたか。そんならお前は私わたしの倅せがれぢや。ようマア無事ぶじで居をつて下くださつた」

と兩人は取付いて泣きくづれる。

駒彦「あゝ何だかさう聞くと、御兩親の様に思ひますが、しかし私の體には一つの特徴があります。それは御存じですか」

爺「特徴と云ふのは、お前は小さい時から鞆丸が人よりは優れて大きかつた。鞆丸ヘルニヤとか云ふ病氣ださうで、大變に吾々兩親は心配をして居つたのだ。お前、鞆丸はどうだな」

駒彦「ハイ仰せの如く人一倍大きいのです。松姫館で大金だと言はれて引張られた時には随分困りました。そこまで話が合へば全くあなたは御兩親に間違ありません。あゝよう無事で居て下さつた」

と駒彦もホロリと涙を流す。お久は、

お久「せめて二三日前にお前が歸つて呉れたなら、妹のお輕もあんな目に會うのではなかつたぢやらうに……あゝ残念な事をした。お前の行方を探したさ、若いうちに夫婦が交る交る紀の國一面を歩いて見たが、どうしても行方が知れず、斯う年が寄つては歩く事も出来ぬので、人さへ見れば吾家に泊つて貰ひ、何かの手

懸りもがなと、善根宿をして居つたのだ。さうした所がエライ泥棒を泊めて、妹の生命を取られて了うたのぢや。あゝ可哀相に……妹が生て居つたら戀しい兄に會はれたと云うて、どれ程喜ぶ事であらう。アアア、ア」と婆アは泣き沈む。常楠爺イも、駒彦も共に涙に暮れ、鼻を啜つて居る。秋彦はこれを聞くより走り入り、秋彦「ヤア駒彦、お芽出度う。お前が何時も兩親に會ひたい會ひたいと云つて居つたが、思はぬ所で親子の對面が出来た。これも全く大神様のお恵みだ。お前はかりか、俺も嬉しい。ア、神様有難う御座います」と涙聲になつて、兩手を合せ、ちぎれちぎれに咽び乍ら、感謝の祝詞を奏上する。屋根には熊野鳥の群七八羽、松魚木に止まつて聲を囁らして悲しげに「カワイカワイ」と啼き立てる。天井に鼠の鳴き聲「チウチウチウ孝行々々」と聞え來たる。

(大正一一・六・一〇 舊五・一五 松村眞澄録)

第六章 神異（七一八）

胸むねの思おもひも秋彦あきひこや
親子おやこ不思議ふしぎの對面たいめんに
一夜ひとよ々々ひとよと日ひを送おくる。
心こころも勇いさむ駒彦こまひこは
互たがひに心こころも解とけ合あひつ

ここへ來きてから三日みつ目の朝あさ、一人ひとりの男をとこ、門もんの戸とをガラリと開あけ、ノソノソと入いり來きたり、

男をとこ「常楠つねくすの爺ぢいさま、お前まへの内に旅人たびびとが泊とまつては居をりませぬかな」

常楠つねくす「ア、誰たれかと思おもへば助公すけこうか、何用なにようあつて朝早あさはやうからお出いでになつたのだ」

助すけ「別に用ようと云いつてはないのだが、よくお前まへの宅うちに旅人たびびとが泊とまるから、事ことに依よつたらお尋たづねしたい事ことがあり、御願おねがひもしたいと思おもつて尋たづねに來きたのだよ。二三日にさんにちまへ前から二人ふたりのお客きやくが來きて居ある筈はずだが……」

常楠「お前の云ふ通り宣傳使が二人泊つて御座るのぢや、どんな用があるのだい」
助「ア、一寸した事が……、一先づ内へ歸つて、着物でも着替て、改めて来る事にせう。こんな風では失禮だからな」
と云ふより早く踵を返し立ち去らうとする。常楠は無理に呼び止め、
常楠「ア、コレコレ、お前の内へ歸らうと云つても随分遠い道程だ。そんなむつかしい方だないから、御尋ねする事があれば、其儘尋ねて歸つたがよからう」
助「別に頼む事はないが、一つ訊問すべき譯があるのだ。此間の晩にここへ泊つて居る二人の男が、龍神の宮の柿を盗んで食つたと云ふ事だ。酋長さまのお耳に神様からチャンと御知らせがあつて調査に来たのだから、爺いさま、其二人を取逃さぬ様にして置きなさい。萬々一取逃しでもしようものなら、二人の代りにお前達夫婦が生命を取られねばなるまい。つい其付近迄酋長さまが數多の手下を引きつれ召捕に見えて居るのだ。つまり俺の來たのは、實の所を言へば偵察に來たのだよ。モウつい此處へ見えるだらうから……俺は歸つて酋長に……不在ではなかつた……とか、不在だつたとか云ふ積りだから、そこはお前の心に何々した

がよからう。餘り可哀相だからなア。グズグズして居るとモウつい見えるかも知れぬ。……ア、此處は裏口があり、木の茂みもあり、風景の佳い所だなア」と今の内に逃げよと云はぬ許りの口吻を漏らし、スタスタと歸つて行く。

常楠は驚いて奥に入り、

常楠「お久に馬、一寸ここへ来て呉れ、大變な事が起つて來た。秋彦さまに馬は

龍神の宮様の柿をむしつて食やせぬかな」

駒彦「宮の前に神様を拜んで居ると、美味さうな柿が風に揺られて、顔の【ふち

へ觸つて來たものだから、二人が取つて食ひました。随分味の佳い柿でしたよ。

なア秋彦、美味かつたなア」

お久「それは又何とした不調法をして呉れたのだ。そんな事をしようものなら此

村は荒れて荒れて難儀をせなくてはならぬ。それで酋長さまが厳しく御禁制にな

つて居るのぢや、何時でもあの柿を取つた者があると直に、酋長の耳の側へ龍神

さまが告げに行かつしやるので、皆荒れが恐さに柿をとつた人間を早速人身御供

に上げる事になつて居るのだが……アア折角親子對面して嬉しいと思へば、

又憂目を見るのか、お輕には四五日前に別れ、又兄の馬に死別れるとは、何と
た因果な吾々夫婦であらう」

と泣き伏しける。

常楠「この場に及んで、泣いても悔んでも、最早後へは戻らない。何事も前生の
因縁ぢやと諦めて、吾々老夫婦が身代りになつて行かう。サア早く、馬に秋彦の
宣傳使様、あなたはまだ行先が長い、是れから世の中の爲に盡さねばならぬか
ら、どうぞ裏口から一時も早く逃出して下され。二人を逃がした罪は老人夫婦が
引受けるから……アア折角久し振りで悴に會うたと思へば、モウ別れねばな
らぬか」

と流石氣丈な常楠も男泣きに泣き立てる。

駒彦「御兩親様、御心配には及びませぬ。柿の五つや十取つたと云つて、村中荒
れると云ふ様な分らずやの神なれば、「てつき」り邪神でせう。善惡の立替をな
さる……我々は神々を背中を負うて歩いて居る宣傳使だから、一つ其龍神を往生
さして、此村の害を除く事にしませう。決して決して御心配下さいませぬ」

秋彦「吾々はよい研究材料を得たのだ。ヤア面白うなつて来た。日高川が川止めになつたのも全く神様の御撮理であつたらしい。其お蔭で龍神を言向け和し、此附近の土地を安樂にしてやる様にするのは、吾々宣傳使の好んで爲さねばならぬ神業だ。サア駒彦さん、行きませうか」

常楠「コレコレ兩人、お前達は年が若いから、そんな無茶な事を言ふが、昔から八岐の大蛇の一の眷屬ぢやと云うて、大變な強い龍神さまが、あの瀧には鎮まつて御座るのだから、必ず必ずそんな處へ行つてはなりません。サア早く此裏口から逃げて歸つて下され。あとは老人夫婦が身代りになるから………アア是れが吾子の見納めか」

と又泣き沈む。お久も目を腫らし涙に暮れて顔さへえあげず、疊に喰ひ付いて、肩で息をして居る。

秋彦「吾々二人が老人夫婦を見棄てて立去る譯にはどうしてもゆかない。どうだ一層の事、一人づつ背に負ぶつて、此山傳ひに安全地帯まで逃げる事にしようか。なア駒彦、それより上分別はあるまい」

駒彦「吾々は敵を見て退去するのは、何ともなしに心が濟まぬ。斯う云ふ時にこそ言靈の威力を以て如何なる強敵も言向け和すのが吾々の職責ではないか」

秋彦「あゝそれもさうだ。そんなら捕手の來るまで此處に待つことにしよう」

斯く話す折しも門の外俄に騒がしく、數多の人の足音刻々に近寄り來る。酋長

の木山彦は十數人の從者を伴ひ物をも言はず表戸を引開け、ドヤドヤと入來り、

木山彦「ヤア常楠夫婦、汝が宅には龍神の宮の柿を盗み食つたる二人の宣傳使が

匿まひありと聞く。サア速に兩人を此場に引摺り出し、手渡しせよ」

と嚴かに言ひ渡し、家の周圍に手下を閒配つて逃がすまじと嚴重に構へて居る。

常楠夫婦は答ふる言葉もなく「ハイ」と言つた限り、俯むいて涙の目をしばたた

いて居る。奥の一間より秋彦、駒彦の兩人は躍り出で、

秋彦「ヤア木山彦の酋長とやら、お役目御苦勞で御座る。如何にも吾々は龍神の

宮の柿を腹一杯取つて喰つた者で御座る、如何すると仰有るのですか」

木山彦「昔から龍神の宮の柿を取喰ふ者ある時は、龍神の祟りに依つて、日高山

一帯の地方は大洪水、大風、大地震の天災地變が起つて來るのだ。一昨夜も吾耳

許に龍神現はれ、駒彦、秋彦と云ふ二人の男、柿を取喰ひ、今常楠の家に逗留し居ると御知らせになつた。可哀相だが汝等二人を、今晚は人身御供にあげ、お詫を致さねばならぬ。これも此村の昔からの掟だから、觀念して吾々の申す通り、神妙に人身御供にあがるがよからう」
と聲も曇らせ乍ら、稍俯むき同情の思ひに暮れて居る。駒彦、秋彦は木山彦の心を察し、

駒彦「ハイ有難う。どうぞ私を人身御供にやつて下さい。今度は悪業をなす龍神をスツカリ改心させ、柿の木を根元より掘起し、龍神の宮を叩き壊し、向後の害を除きませう。サアサアどうぞ早く吾々兩人を引張つて往つて下さい」
木山彦「早速の御承知、吾々満足に思ふ。が併し宮を潰し木を伐るなどとの暴言は止めて貰はねばならぬ」

常楠涙の顔を上げ、

常楠「モシ酋長さま、實の所此男は三才の時に天狗に攫はれて、行方の分らなかつた馬楠で御座います。二三日以前にフトした事から、親子巡り會ひ、喜ぶ間も

なく斯んな悲しい事になりました。妹のお輕は賊に殺され、二人の子供は老夫婦を後に残して、冥土の旅立を致さねばならぬ破目になつたのも、私の深き前生の罪がめぐつて來たので御座いませう。御推量下さいませ。』
と涙を拭ひ俯く。お久は身を慄はせ泣く計りであつた。木山彦も悲歎の涙に暮れ乍ら、

木山彦「ア、彼の馬楠と云ふ子は此人だつたのか、實にお歎きの程お察し申します。併し乍らお前の子も天狗に浚はれたが、假令三日でも、親子の對面が出来て別れるのだからまだしもだ。吾々は恰度お前の倅と同じ様な年輩で鹿と云ふ子があつた。それが何者に浚はれたか今に行方は知れず、比叡山を立出てそれより大和、河内、紀の國と所在を探し、漸う漸う此處で觀念の臍を固め、最早死んだものと諦め、村人に選まれて酋長になつたのだが、お前が倅に面會した喜びを思ふに付けて、私も何だか失うた子供の事を思ひ出し悲しうなつて來た。ア、仕方がない。何事も運命だ。サア二人の方、氣の毒乍らチャンと用意が出来て有る。此唐櫃に這入つて下さい。』

秋彦は木山彦の言葉、鋭く耳に入り腕を組み呆然として居る。常楠夫婦は聲を

限りに泣き叫ぶ。木山彦は涙を隠し、聲を荒らげ、

木山彦「時遅れては一大事サア早く早く」

と迫き立てる。駒彦、秋彦は直に唐櫃の中に飛び込まうとするを、木山彦は押し止

め、

木山彦「ア、お二人さま、一寸待つて下さい。ここに白装束が持つて来てある。

お前さまの着物をスツクリ脱ぎ捨て、此れと着換て往て貰ひたい」

二人は「あゝ久し振りで新しき御仕着せを頂戴致します。……サア是れから千

騎一騎の活動だ」と心に喜び乍ら唐櫃の中に這入つて了つた。木山彦は「助

公々々」と呼び立てる。言下に助公始め十數人の男はバラバラと集まり來り、唐

櫃の戸を固く締め、七五三繩を以て縛り付け、大勢に擔がせ、此家を立出でんと

する時、老夫婦は慌て門口へ送り出で、其儘そこに昏倒して了つた。木山彦は二

三の男を後に残り、老夫婦の看護をさせ、漸く息を吹き返さしめた。酋長は老人

夫婦を勞り慰め、悠々として家路に歸つた。

一方二臺の唐櫃は龍神の宮指して、人夫の唄の聲と共に遠ざかり行く。老人夫婦は互にしがみつき悲歎の涙遣る瀬なく、身を悶え居る時しも、押入れの中よりムクムクと現はれ出たる駒彦、秋彦の二人、老夫婦の背を撫で、

駒彦「モシモシ馬で御座います。……秋彦で御座います。御安心下さい。コレ此通り無事に居ります」

と聞いて夫婦は二度ビツクリ、夢か現か幻かと二人の顔を見まもり、暫しは言葉もえ出さず呆れて居る。稍あつて常楠は、

常楠「ハテ不思議な事もあるものだなア。如何して此處へお前達は歸つて來たのか。又もや追手が迫つて來はせぬか。サア早く何とかせねばなるまい」と嬉しさ恐さに身をもがく。

駒彦「御兩親さま、御案じ下さいませぬ。只今大神様へお願い致しました所、高倉、

旭の明神現はれ、身代りになつて行つて呉れられました。モウ大丈夫です。併し乍らここに居つては一大事、サア今の内に我々四人、手に手を取りて日高川を渡り、熊野方面指して参りませう。必ず御心配は要りませぬ。吾々は神様と二人連

れ、滅多な事はないから、一時も早く此處を立去る事に致しませう」

老夫婦は雀躍りし、一も二もなく二人の言葉に賛意を表し、匆々此家に火をかけ、急いで日高川の岸邊を指して進み行く。

木山彦は二三の従者と共に我館に立歸り、ものをも言はず奥の一閒に入りて、雙手を組み溜息をつき、思案に暮れて居る。此場に茶を汲んで現はれた妻の木山姫は、夫の普通ならぬ顔に不審を起し、恐る恐る兩手を突き、

木山姫「今日に限つて心配さうなあなたの御顔、何か又大事が突發致しましたか」と尋ねる。木山彦は妻の言葉の耳に入らざるが如く、默然として俯むき、兩眼よりは紅涙滴々として滴るのであつた。木山姫は合點行かず、側近く寄り添ひ、

木山彦「モシ吾夫様、何か御心配な事が出来ましたか」と云ふ聲に始めて氣がつき、

木山彦「ア、木山姫か」

木山姫「今日に限つてハツキリせぬあなたの御顔、どうぞ包み隠さず仰有つて下

さりませせ」

木山彦「アア人間位果敢ないものは無い。私も三人の子供があつたが二人迄、村の者が龍神の宮の柿を取り、何處かへ遁走したので、其身代りに二人の娘は奪られ、一人の倅は何者に攫はれたか、幼少の時より行方知れず、斯うして二人が日高の庄の酋長と仰がれ、老の餘生を送つては居るものの、思へば思へば寂しい事だ」

と又俯向く。

木山姫「今日に限つた事では御座いませぬ。どうぞ過去つた事は思ひ出さずに、

ハンナリとして暮して下さいませ。妾も女の身乍ら既に諦めて居ります」

木山彦「若しも紛失致した倅の鹿公が此世に居つたら、お前は如何思ふか」

木山姫「お尋ねまでもなく、そんな嬉しい事は御座いませぬ。して又倅の行方が

貴方にお分りになつたのですか」

木山彦「イヤ分つたでもなし、分らぬでもなし。……アア實に残念な事ぢや。

會はぬがマシであつたワイ」

木山姫「エ、何と仰せられます。會はぬがマシ……とは心得ぬお言葉。あなたは倅にお會ひになつたのでせう。なぜ如何とかして連れて歸つては下されませぬ」

木山彦「連れて歸りたいは山々なれど、儘にならぬは浮世の慣ひだ。あの常楠の老夫婦も一人の娘を賊に殺され、永らく分らなかつた倅に遇うたと思へば、龍神の宮の人身御供にあげられ、言ふに謂はれぬ悲歎の涙に暮れて居た。ア、可哀相だ。他人の事かと思へば吾身の事だ。日頃心にかけて慕うて居つた倅の鹿公も……ア、モウ言ふまい言ふまい」

と又もや俯向き吐息をつく。

木山姫「それはそれは常楠の老夫婦も可愛相な事をしましたなア。併し倅の鹿にお會ひになつた様な貴方のお言葉、それは一體如何なつたので御座います」

木山彦「モウ仕方がない。驚いて呉れな實は鹿公に會うて來た。名乗もならず、暗々と常楠の倅と共に人身御供にやつて了うた」

と耐ばり切つたる悲しさの堤も切れて、大聲に男泣きに泣き立てた。木山姫も八

ツと驚き共に涙に正體なく身を揺つて泣き倒れる。斯る所へ息急き切つて走つて来た小頭の助公は、
助公「申上げます。唯今龍神の宮へ二人の人身御供を持つて参りますと、神殿俄に鳴動致し、中より白髪異様の恐ろしき神が現はれ、唐櫃の戸を叩き破りました途端に、二人の宣傳使は躍り出で、白髪異様の神を相手に組んづ崩れつ大格闘をやつて居りましたが、遂には宣傳使の力が勝れて居つたと見え、神さまは二つに引き裂かれて、谷川へドツと許りに投げ込まれ、川水は忽ち血の川となつて了ひました。吾々共は大地に平太張り恐々此活劇を見て居りました所、二人の宣傳使は吾々に向ひ……最早龍神の宮の悪神は退治致したれば、今後は決して人身御供などを請求する氣遣ひはない。又今後は柿の實は汝等勝手に取つて食つて差支ない……と仰せられ、且私を特に近くお召しなされ……一時も早く此事を木山彦の酋長に傳達せよ……との嚴命で御座りました。ハツと驚き承知の旨を答へますると、二人の宣傳使は谷川傳ひに猿の如く何れへか姿を隠されました、最早今後は人身御供の憂へも御座りませぬから、御安心下さりませ」

と詳細しやうさいに物語ものがたるを聞きいた木山彦きやまひこは立たち上あり、

木山彦きやまひこ「ナニ龍神りうじんの宮みやの神様かみさまを退治たいぢ致いたしたと……さうして其その宣傳使せんでんしの行方ゆくへは分わからぬか」

助公すけこう「ハイ餘あまり御足おあしが早はやいので、追おつ付ついておたづね申まをす事ことも出で来きずどこへ出いてなつたか皆目かひもく見當けんたうが付つきませぬ。已やむを得えず歸路きろに就つけば常楠つねくすの家いへはドンドンと燃もえて居をります。あゝ可愛相かあいさうに老人としより夫婦ふうふは助たすけてやりたいと思おもひ、探さがして見みても影かげも形かたちもなく、大方おほかた自みずか火ひを放はなちて、夫婦ふうふが焼やけ死じにでもしたので御座ございませう。實じつに可愛相かあいさうな事ことを致いたしました」

木山彦きやまひこ「それは御苦勞ごくろうであつた。さぞ村人むらびとも喜よろこぶ事ことであらう。併しかし乍ながら二人ふたりの宣せん傳使でんしは何なにか落おとして行ゆかれなかつたか」

と問とはれて助公すけこうは、

助公すけこう「ハイ斯様かやうな物ものが落おちて居をりました」

と守袋まもりぶくろを懷ふところから取とり出だし手てに渡わたせば、木山彦きやまひこは、

木山彦きやまひこ「コリヤ木山姫きやまひめ、此このまもりぶくろ守袋まへおほはお前まへ覺おぼえがないか」

と木山姫の前に突出せば、木山姫は、

木山姫「一寸見せて下さいませ」

と手に取り上げ、裏表を打かへし眺めて、

木山姫「あゝ確かに覚えが御座います。餘り古びて居りますので、ハツキリは分

りませぬが守袋の底に十の字を印して置きました、未だにウツスリと残つ

て居ります。これは全く倅の守袋に間違は御座いませぬ」

木山彦「それならば確かに倅に間違ひない。兔の様な尖った耳で時時耳を動かせ

る所、鼻の先の尖った所はお前に生寫、ア、偉い者だなア。よう倅助かつて呉れ

た。常楠の倅もそれでは無事だったか。あゝ有難い、全く熊野の神様の御守護だ。

サア女房、吾々も此館を暫く明けて熊野へ夫婦連れ、御禮参りをしようではない

か。又神様の御引合せで倅に遇へるかも知れぬ、善は急げだ、早く用意をせよ」

木山姫「先づ先づジツクリと氣を落ち着けて下さりませ。急いで事は仕損ずる

と云ふ諺もありますから……」

木山彦は周章で、

「お前まへ厭いやなら来こなくてもよい、サア助公すけこう、随伴ともの用意よういだ」

助公すけこう「ハイ畏かしこまりました、直様すくさま用意よういに取掛とりかりませう」

木山姫きやまひめ「左様さやうなれば妾わたしも一緒いっしょにお伴とも指さして下くださいませ。併しかし留守るすは如何どうしたら宜よろ

しいか」

木山彦きやまひこ「留守るすも何なにも要いつたものか。家財かざいよりも何なによりも、大切たいせつな寶たからは吾子わがこよりな

いのだ。子こに會あへさへすれば、財産ざいさんも何なにも要いるものか。如何どうなると構かまはぬ。サア

早はやく往ゆかう」

助公すけこうは家いへの戸締とじまり萬端ばんたんに氣きを付つけ、夫婦ふうふの後あとに隨したがひ、熊野くまのを指さして出いでて行ゆく。

（大正一・一・六・一一 舊五・一六 松村眞澄録）

（昭和一〇・六・五 舊五・五 王仁校正）

第七章 知らぬが佛ほとけ（七一九）

秋彦、駒彦の宣傳使は、常楠、お久の老夫婦と共に、木山の里を立出で漸う栗栖川の畔、栗栖の森に着いた。老人の事とて疲勞を感じ、此處に駒彦の父常楠は、俄に胸腹部の激痛を感じ、發熱甚しく、身動きもならぬやうになつて了つた。お久を始め秋彦、駒彦の兩人は、如何にもして常楠の病氣を恢復せしめむと、栗栖の宮の半破れたる社務所に立寄り、いろいろと介抱に手を盡したが、病は追々重るばかりで、命旦夕に迫つて來た。

二人の宣傳使は栗栖川の上流に妙藥ありと聞き、手配して山深く藥草を求むべく進み入つた。後にお久は夫の看病に餘念なく、心力を盡して老の身の勞苦も打忘れ、看護に努めた。人里離れし淋しき此栗栖の宮の森は人聲もなく、時々鳥の聲、百舌鳥の囁きが聞ゆるばかり、凧は時を仕切つて吹いて來る。さすが暖國の冬も、今日に限つて殊更嚴寒を感じ、身に寒疣を現はすばかりであつた。

夜は深々と更け渡り、月は皓々と中天に輝き、憐れな老夫婦の境遇を憐れ氣に見下ろし給ひつつあるものの如く、時々月の面を掠めて淡い雲が來往してゐる。其度毎にパツと明くなつたり、又パツと薄暗くなり、空には薄茶色の雲、白雲に

混つて脚速く右往左往に彷徨して居る。

此時覆面した二人の大男、何事かヒソビソと囁き乍ら、此森に向つて進み來り、社務所の中に老夫婦のあるをも知らず、縁側に腰打かけ、ヒソビソ話に耽つて居たが、遂には興に乗つて聲高に囀り始めた。

甲「オイ虻公、此頃は泥棒商賣も薩張り冬枯れで、懷も寒いことだないか。なんぞ好い鳥がやつて來さうなものだな。木山の里で爺と婆アの家泊り込み、奪つて來た金子は大方使ひ果し、最早二進も三進も行かなくなつて了つたぢやないか。

此處で一つ大きな仕事をせぬことには、持ちもせぬ乾兒を養ふことも出來ず、乾兒の嬢や子供までが薩張乾上つて了ふ。何とか好い思案は出ないだらうかなア」

虻公「オイ蜂公、貴様は金子が手に入ると、大風に灰撒くやうに、直にバラバラと撒き散らしやがるものだから困つて了ふワ。貴様は乾兒も少し、一人生活ぢやないか。俺のやうに有りもせぬ乾兒の十人も持ち、近所の空平が七八人の家族を抱へてゐては到底小さい働きではやりきれない。木山の里で奪つた金子も百兩ばかりあつたが、貴様は山分けにして五十兩持つて歸つたのだから、餘程使ひでが

なければならぬ。俺達とは責任が大變違ふのだから……」

蜂公「何と云つても五十兩は五十兩だ。家内が少いと云つて五十兩が百兩に使へ

る道理も無し、又家内や乾兒が多いと云つても、五十兩は依然五十兩だ。滅多に

二十兩になる氣遣ひは無い。そんな吝なことを云ふない」

虻公「其癖貴様は可愛相に彼の娘を　して、兩親の前で【ばら】したぢやない

か。ヨウま彼んな鬼のやうな事が出来たものだ」

蜂公「ヘン俺が鬼なら貴様も鬼だ」

虻公「鬼にも善惡があつて、貴様のは特別製の角【鬼】だ、所謂雄だ。俺のは雌

だから角の無い【鬼】だからなア」

蜂公「定つたことだ。鬼なら鬼で、何處迄も徹底的に鬼たるの本分を盡さねばな

るまい、貴様のやうに少し金子が出来ると、佛の道とか、金の道とかに逆轉しや

うとする様なことで、何うして大きな仕事が出来るものか」

と話してゐる。社務所の中より苦悶の聲、兩人の耳を刺した。

虻公「ヤア何だか妙な聲がするぢやないか」

蜂公「ほんに怪體な聲が聞えて來た。全で狼の唸り聲のやうだ。一體何物だらう。一つ調べて見たら何うだ」

虻公「おけおけ、君子は危きに近付かずだ。幽霊かも知れないぞ」

蜂公「君子が聞いて呆れるワ。貴様のやうな悪黨が、何處の盲が見たつて君子と思ふ奴があるか。お輕の幽霊が貴様達が此處へ來ると思つて、待つてゐやがるのかも知れぬぞ。何だか俺は首筋元がゾクゾクして來た。外は寒い風が吹くなり、中には嫌らし聲が聞えるなり、遣り切れなくなつたぢやないか」

虻公「そんなチヨ口臭いことを云つて居ると、貴様と俺の名ぢやないが虻蜂取らずになつて了ふぞ。ひよつとしたら旅人が澤山金子を持つて寝てゐやがるかも知れぬぞ、山吹色の奴がウンウンと唸つてゐるのだらう。一つ勇氣を出して踏ん込み、ウンの正體を見届けやうぢやないか。ひよつとしたら吾々の運の開け口かも知れぬぞ」

蜂公「うつかり遣り損ふとウンが下つて尻から出るウンにならぬやうにせよ。貴様は何時も狼狽者だから尻の局はついた事はない。年が年中手を出しては糞垂れ

る奴ぢやから、アハ、ハ、ハ、ハ、

と笑ふ。お久は此笑ひ聲を聞いて、待ちに待つたる二人の宣傳使の歸つたのだと

早合點し、中より戸を開いて、

お久「ア、待ち兼ねました、お二人の方、早く這入つて下さい。嘸寒かつたでせ

う」

二人一度に、

「ヤア誰かと思へば貴方は此家の御主人か。兔も角それでは一服さして貰ひませ

う」

と内に入る。微な明りに映つた蛇、蜂二人の顔。お久は之を眺めて、

お久「アツ、お前等は此間我が家に泊り込み、娘の生命を奪り、有金を「すつか

り」浚へて逃げ居つた泥棒ぢやないか。サア、斯うなる以上は我が子の仇敵、モ

ウ承知を致さぬ。覺悟せい」

と懐劍を逆手に持つて形相凄じく、上段に構へこんだ。蛇、蜂の二人は大口を開

けて、「アハ、ハ、ハ、ハ」と高笑ひする。

お久ひさ「盗人ぬすびと猛々たけだけしいとは其方そのほうのこと。此この婆ばばが死物しにものぐる狂くるひの働はたらき、覺悟かくごを致いたせ、最も早はや死しんでも惜をしうない年寄としよりの生命いのちだ」
と斬きつてかかる。二人ふたりは長刀とすをスラリと引拔ひきぬき、

「サア、來こい」

と腰こしを据すゑ、寄よらば斬きらむと控ひかへて居ゐる。お久ひさも二人ふたりの荒武あらむしや者の身構みがまへにつけ入いる隙すきもなく、瞬またたきもせず隙すきあらば斬きりかからんと狙ねらつて居ゐる。二人ふたりはジリジリと拔刀ぬきみを兩手りやうてに、腹はらの邊あたりに柄つかを握にぎり乍ながら詰つめ寄よつて來くる。

常楠つねくすは發熱はつねつ甚はなはしく夢中むちうになつて「ウンウン」と唸うなつて居ゐる。斯かかる處ところへ秋彦あきひこ、駒彦こまひこの兩人りやうにんは、步あしを速はやめて歸かへり來きたり、駒彦こまひこ先まづ中なかへ這入はいつて見みれば此この状ありさま態たい。

駒彦こまひこ「ヤア某それがしは三五教あななひけうの宣傳せんでん使し駒彦こまひこと申まをすものだ。汝きさまは泥棒どろぼうと見受みうけるが、老人としよりばかりの家とこにやつて來きて、何なにを奪とらうと云いつたつて奪とるものは有あるまい。要いらざることを致いたすより、早はやく此場このばを立去たちさつたがよからうぞ。グツグツ致いたして居をると、汝きさまの利益ためにならぬぞ」

お久ひさは始はじめて此聲このこゑに氣きがつき、短刀たんたうを振ふりかざし乍ながら、

お久「倅の駒彦か、ようマア危ない處へ歸つて下さつた。……秋彦さま、何うぞ加勢して下さい。此奴が私の娘を殺し、金子を盗つて逃げた悪人で御座いますよ」と聞いて二人は忽ち兩手を組み、満身の靈力を籠めてウンと一聲、靈縛をかけた。二人は身構へした儘、身體強直し木像の如くになつて了ひ、眼ばかりギョロつかせて居る。

駒彦「アハ、マア一寸斯うして置いて、悠くりお父さまに薬を上げ御恢復の上、此の面白い木像を慰みに御目にかけることにせう。秋彦さま、靈縛の弛まないやうに氣をつけて下さい。私はこれより父の看護を致しますから。……お母さま、危険いところで御座いましたな」

お久は稍安堵して短刀を鞘に納め、ドツカと坐し、

お久「アーお前の歸るのがモウ一息遅かつたら、爺も婆も又もや此奴のために生命を奪らるるところだつた」

と嬉しさ餘つて聲さへ曇つてゐる。起死回生の妙薬忽ち效驗顯はれ、常楠は俄に元氣恢復し、起き上つて二人の泥棒の姿を見、

常楠「ア、御かげで病氣が餘程よくなつたと思へば、又しても此間出て来た大悪
黨奴、刀を抜いて執念深くも吾々夫婦を付け狙うて居るのか。儲も儲も度し難き
代物だ。こんな奴は必定根の國、底の國の成敗を受けねばならぬ奴だ。想へば想
へば可愛相になつて来た、娘の仇とは言ひ乍ら何うした物のか、此奴の精神が氣
の毒になつて、日頃の恨みも、腹立ちも何處かへ往つて了つた。オイ泥棒、お前
も好い加減に改心をしたら何うだ。未來の「ほど」が恐ろしいぞよ」
泥棒は目をキヨロキヨロ回轉させるばかり、唇を微に動かしたきり一言も發し
得ず、固まつた儘苦悶して居る。

駒彦「お父さま、是等兩人は妹を殺した奴で御座いますか。本當に仕方のない悪
人ですな。併し乍ら吾々宣傳使の神力を以てしては、此様なものの五人や十人は、
小指の先にも當りませぬが、貴方の仰せの通り罪を憎んで人を憎まず、誠の道に
歸順すれば救けてやりませうかなア…オイ泥棒、貴様等はまだ此上悪事をやる考
へか、但は今日限り薩張改心を致すか何うだ。口利く文は靈縛を解いてやるから、
直に返答致せ」

虻公は漸く重たさうに口を開いて、

「ハイ、カ…イ…シ…ン…イ…タ…シ…マ…ス」

と千切れ千切れに機械的にヤツと答へた。

駒彦「ウン、よし、それに間違ひはないなア。モウ一人の奴は何うだ。貴様も改心するか」

蜂公は機械のやうに幾度となく、頭を縦に曲線的に振つてゐる。

駒彦「ウン、よし、改心するに違ひはないな。そんなら秋彦さま、靈縛を解いてやつて下さい、萬一暴れ出したら其時又靈縛をかけるまでの事だから…」

秋彦「承知しました」

と秋彦は両手を組合せ、天の數歌を一回唱へ、「許す」と一言、言靈を發射するや兩人の身體は自由自在の舊に復した。二人は夕立の如き涙をボロボロと落しながら、両手を合せ床に頭を摺つけ、懺悔の念に堪へざるものの如く啜り泣きさへして居る。

常楠は兩人の姿をツクツクと眺め、

常楠「コレ二人の泥棒、お前も生れ付いてからの悪人ではあるまい。人間と云ふものは育ちが大切だ。大抵泥棒になつたりする奴は、若い時に親に離れるか、或は繼母育ちか、繼父の家庭に育つたものが多い様だが、お前の親は何うなつたのだ。子の可愛くない親は世界にない筈だが、何うぞして家の倅も一人前に育て上げ、世間から偉い奴だと賞めて貰ひたいのは親心、今に兩親が生てゐるならば、御心配をしてゐるであらう。今より綺麗薩張と心を入れ換へ善の道に立歸りなされや。私もお前さん等に大事の娘を殺されたが、お前にも兩親があるだらう。娘の仇だと云つて、仇を討てば私は氣分がサラリとしゃうが、お前の兩親が聞いたら嘸歎かつしやることだらう。之を思へばお前さまに娘の仇として、一太刀報いることも出来ぬやうになつて來た。何卒今日限り生命が失くなつたと思つて誠の心になつて下され。これが老先短き年寄の頼みだ。お前の親の代りに意見をすのだから、何卒忘れぬやうにしてお呉れ」

蛇公「ハイ有難う御座います。翻然として今迄の夢が醒めました。私には親があつたさうで御座いますが、未だに分りませぬ。印南の里の森に菰に包まれ、生れ

た直き直き捨てられて居つたのを、情深い村人が救ひ上げて、子の無いのを幸ひに私を子として育てて下さつたのですが、私が六才の時に大恩ある育ての両親は、俄の病で國替をなされまして、それから私は取りつく島もなく、乞食の群に入り漸く成人して女房を持ちましたが、子供の時より悪い事をやつて來た癖は今に直らず、悪い事は一つも致したことはありません。貴方の只今の御教訓は生みの親の慈悲の御言葉のやうに感じまして、心の底より有難涙が溢れます。もう今日限り悪いことは致しませぬ」

常楠「ア、さうかさうか、よう言うて下さつた。それで私も安心した。さうしてお前は捨兒されたと云はつしやつたが、何か其時の印は無かつたか」
蛇公「ハイ私は蛇公と申して居りますが、私の肌には添へてあつた守り刀に、「常」と云ふ字が書いてあつたさうで御座います。今は擦れて字も見えなくなりましたが、之を證據に生みの親を探ねんと、斯んな悪人に似合はず、始終肌身に離さず持つて居ります。何うぞして一度此世でお父さまやお母さまに會ひたいもので御座います。何しろ生れ落ちると捨兒になるやうな不運なもので御座いますから、

到底たうてい此この世よでは會あふことは出で来きますまい」

と身みの果は敢かなさを思おもひ浮うかべて、泥どろ棒ぼうに似に合あはずワツと許ばり其その場ばに泣なき倒たふれた。

常つね楠くすは首くびを傾かたむけて吐とい息きを洩もらして居をる。暫しばらくあつて、

常つね楠くす「其その守まもり刀がたなを一ちよつと寸み見みせて下くださらぬか」

蛇あぶ公こ「サア、何どうぞ御ご覽らん下くださいませ」

と懷ふとこより取とり出いだし押お戴いたいて手て渡わたしする。常つね楠くすは手てに取とり上あげ、【ため】つ、【すかめ】

つ鞆さやを拂はらつてツクツク眺ながめ、

常つね楠くす「擬まがふ方かたなき我わが家やの紋もん所ところ、に十じふが記しるしてある。此この刀かたなは私わしの大たい切せつな、若わかい時とき

からの守まもり刀がたなであつた。斯こうなれば女にようぼう房まへの前まへで白はく状じやうするが、實じつの所ところは女にようぼう房まへの目めを忍しの

び、下げ女ぢよのお龍たつに子こを妊はらませ、已やむを得えず自じ分ぶんの知しり合あひにお龍たつを預あづかつて貰もらひ、生う

み落おしたのが男をとこの子こ、女にようぼう房まへの恪りん氣きを恐おそれて我わが家やへ連つれ歸かへる譯わけにも行ゆかず、何ど處こ

の誰た人れかの情なさけで育そだつであらうと、後のちの印しるしに此この守まもり刀がたなを付つけ、「常つね」と云いふ印しるしを

して置おきました。ア、それならお前まへは私わしの子こであつたか。悪わるいことは出で来きぬもの

だ。お前まへが此この様やうな悪あく人にんになつたのも、みんな私わしが天てん則そくに背そむいたからだ。コレ倅せがれ、

赦して呉れ。何事もみんな私が悪いのだから……」

此物語に一同ハツと呆れて、常楠と虻公の顔を見較べるのみであつた。虻公は常楠に縋りつき、

虻公「ア、貴方は父上様で御座いましたか。存ぜぬこととて御無禮を致し、可愛い妹まで彼んな目に會はして、誠に申譯が御座いませぬ。何うぞ重々の罪は御赦し下さいませ」

駒彦「そんなら私の兄弟であつたか。これと云ふのも全く神様の御引合せだ。有り難し、辱なし」

と兩手を合せ、感謝の涙に沈む。

お久は又もや腕を組み思案に暮れてゐる。此態を見て常楠は、

常楠「コレ女房、恠へて呉れ。お前は今の話を聞いて大變氣嫌を悪うしたやうだが、これも私の罪だ。あつて過ぎたことは何と云つても仕方が無い。これ此通りだ、赦してお呉れ」

と兩手を合せ、お久の前に頭を下げ謝らんとするを、お久は押し止め、

お久ひさ「コレコレ親父おやぢさま、勿體もつたいない、何を言いはつしやるのだ。妾わたしこそ貴方あなたにお詫わびをせねばならぬことが御座ございます。妾わたしが白状はくじやうすれば嘸さぞ貴方あなたは愛想あいさうを御盡おつかしなさるでせうが、妾わたしも罪亡つみほろぼしに此處ここで懺悔ざんげを致いたします。人ひとさまの前まへ又また夫をつとや吾わが子この前まへで、年としが寄よつて昔むかしの恥はぢは言いひたくはなけれど、天道てんだうは正直しやうぢき、何時いつまで隠かくして居をつても罪つみは亡ほろびませぬから、一應いちおう聞きいて下ください」

と涙なみだぐみつつ夫をつとの顔かほを打看守うちまもる。

常楠つねくす「なアに夫婦ふうふの仲なかに遠慮えんりよは要いるものか。何なんでも構かまはぬ、皆みな云いつて呉くれ。其方そのほう

が互たがひに心こころが解とけ合あつて、何程なにほど愉快ゆかいだか分わかつたものぢやない」

お久ひさ「妾わたしは今迄いままでかく隠かくして居をりましたが、貴方あなたの家うちへ嫁とつぐ前まへに若氣わかげの【いたづら】から、親おやの許ゆるさぬ男をとこを持もち一人ひとりの子こを生うみ落おとし、爺ぢいさまのやうに熊野くまのの森もりへ捨すて兒こを致いたしました。それもクリクリとした立派りっぱな可愛かあいい男をとこの子こであつた。お爺ぢいさまの捨すて兒こに會あはれたのを見みるにつけ、私わたしの捨すてた彼あの兒こは如何どうなつたであらうと思おもへば、立つても居ゐても居ゐられなくなりまして。……ア、捨すてた兒こよ、無殘むざんな母ははと恨うらめて下くださるな。事情じじやうがあつてお前まへを捨すてたのだから……」

と又もや泣き倒れる。蜂公は怪訝な顔をして、

蜂公「ヤア今承はれば、お婆アさまは熊野の森に捨兒をなさつたと云ふことだ。

それは何年前で御座いますか」

婆は涙を拭ひ乍ら、

お久「ハイもう彼是四十年にもなるだらう。今居れば恰度お前さま位に立派な男

になつて居る筈ぢや。ア、妾も其子が此世に生きて居るのなら、此世の名残りに

一度見て死にたいものだ。そればかりが冥途の迷ひだ。若い時は氣が強くて何と

も思はなかつたが、年が寄ると捨兒の事を心に思はぬ間はありませぬ。さうして

お前さま、其の捨兒の事に就て御聞き及びの事はありませぬか」

蜂公「ハイ別に何とも聞いては居りませぬが、私は熊野の森に捨てられて居つた

のを、或山賊の親分が見つけて、私を大臺ヶ原の山砦に伴れ歸り、立派に成人さ

せて呉れました。私が十八才になつた時、三五教の宣傳使がやつて来て、岩窟退

治を致した時に生命から其處を脱け出し、それから諸方に彷徨ひ、女房を持

ち相變らず泥棒をやつて居りました。最前から貴方の御話を聞くにつけ、何だか

貴方あなたが母上ははうへのやうに思おもはれてなりませぬ〇

お久ひさは、

お久ひさ「其時そのときに何か印しるしは無なかつたかな〇

蜂公はちこう「ハイ、私わたくしは水兒みづこの時ときに捨すてられたので何も存ぞんじませぬが、他ひとの話はなしを聞きけば守まもり刀がたなが付ついて居をつたさうです。併しかし其守そのまもり刀がたなも大臺おほだいヶ原がはらの岩窟がんくつの騷動さうだうの時ときに取とり落おとしました。それには蜂はちの印しるしが入はいつて居をつたさうで、私わたくしを蜂々はちはちと呼よぶやうになつたと聞きいて居をります〇

お久ひさは飛とびつく許ばかりに驚おどろいて、

お久ひさ「ア、それ聞きけば【てつきり】我わが子こに間違まちがひありませぬ。何なんとした嬉うれしい事ことが一度いちどに出でて來きたものだらう。コレコレ親父おやぢどの、此子このこは貴方あなたに嫁とつぐ迄までの子こでありますから、何どうぞ赦ゆるして下さい。今迄いままで包つつんで居をつた罪つみも何どうぞ今日けふ限かぎり赦ゆるすと仰おつしや有あつて下さい。御願おねがひで御座ござります〇

と夫をつとに向むかつて手てを合あはし頼たのみ入いる。

常楠つねくす「そんなことは相身あひみたがひ互ただ。罪人つみびと同志どうしの寄合よりあひだから、モウこれ限かぎり今迄いままでの事こと

は川へ流し、改めて二人の子が分つた喜びの御禮を此處で神様に奏上し、明日は早く此處を立去つて熊野へ御禮に参りませう」

一同は涙混りに秋彦の導師の許に、感謝祈願を覺束無げに奏上し了つた。東の空は茜さし、金色の燦然たる太陽は、晃々と海の彼方より昇らせ給ふ。

(大正一一・六・一一 舊五・一六 外山豊二録)

第八章 纏れ髪〔七二〇〕

木山彦の一行は漸くにして熊野の瀧の麓に衣類を脱ぎすて、夫婦は此處に何事か祈願を凝らし七日七夜を送つた。従者の助公は木山彦の命に依り直ちに歸郷し、木山彦の不在を守る事となりぬ。

此處に夫婦は一心不亂になつて、今一度吾子の鹿公に會はせ給へと祈つて居る。三七二十一日の水行を了へた夜半頃、何處ともなく山奥の谷を響かせ馬の蹄の音

勇ましく、此方に向つて中空を驅來る異様の神人、七八人此場に現はれ、夫婦に向ひ、

「汝は日高の庄の酋長にて木山彦夫婦なるべし。汝が熱誠なる祈願を聞き届け、一人子の鹿公に遇はしてやらう程に、夫婦共前非を悔い、今迄なし來りし天則違反の罪を吾前に自白せよ」

と言葉厳しく言ひ渡し、鏡の如き目を光らし、白馬に跨つた儘兩人の顔を睥睨して居る。扈從の神と見えて六七人は稍小さき馬に跨り各手槍を携へて居る。夫婦は戦慄き恐れ「ハイ」と許りに平伏したり。

木山彦「私は壯年の頃或一人の女と夫婦の約束を結び、子迄成したる仲を無慘にも振り捨てて、今の女房を持ちました。悪い事と申せば私一代に是により外に覚えは御座いませぬ。其報いにや、二人の娘は人身御供に取られ、一人の倅は繼母が來たので何時の間にか、幼少の頃吾家を飛び出して行方は更に分らず、年は追々寄つて來る、世の中の寂寥を感じ、面白からぬ憂き年月を送る折しも其倅に邂逅ひ、半時の間も待たず言葉一つ云ひ交さず、又もや龍神の宮の犠牲に取られて仕

舞まひましたのも、全まく神かみ様の冥めい罰ばつが當あたつたので御ご座ざいませう。何どう卒そ其その子こに遇あはし
て下くださるやうと、夫ふう婦ふの者ものが願ねがひに參まゐつたので御ご座ざいます。今いまでは女によう房ぼうも年としを
取とり、繼ま子まこが歸かへつたとても餘あまり辛つらくは當あたりますまいから、も一いち度ど遇あひ度たう御ご座ざい
ます。承うけたまはれば、我わが子こは宣せんでん傳しとなつて龍りう神しんの宮みやの惡わる神がみを平たひらげ、世せ界かいを遍へん歴れきして
居をるさうで御ご座ざいます。何なに卒そ々な今いま迄までの深ふかき罪つみをお赦ゆるし下くださいまして、哀あはれな老らう

夫ふう婦ふに今いま一いち度ど面めん會くわいをさして下くださいませ
と涙なみだぐむ。異い様やうの神しん人じんは言こと葉は爽さわかに、

如何いかにも汝なんぢの申まをす通とほり寸すん分ぶんの間ま違ちがひはない。汝なんぢの女によう房ぼう木き山やま姫ひめも隨ず分ぶん繼ま子まこに辛きつ
當あたつたものぢや。併しかし乍ながら最も早はや今こん日にちは餘よ程ほど心こころも柔やはらぎ居をれば、親おや子この再さい會くわいを許ゆるして
遣つかはす。必かならず必かならず神かみ信しん仰かうを怠おこたるな
木き山やま姫ひめはハツと平ひれ伏ふし、涙なみだと共に去いし昔むかしの懺ざん悔げ話はなしを語かたり出だしたり。

今日けふ迄まで夫をつとにも隠かくして居をりましたが、神かみ様さまは何なにも彼かもよよく御ご存ぞんじで御ご座ざいますか
ら、包つつみ隠かくさず一いち伍ぶ一し什じふを神かみ様さまの御おん前まへ、夫をつとの前まへに白はく状じやう致いたします。妾わたくしは若わか氣げの「い
たづら」から一ひとり人ひとの男をとこを拵こしらへ腹はらが膨ふくれ、遂つひには親おやの許ゆるさぬ子こを設まうけ、種たねと云いふ男をとこ

に産子を渡し其儘姿を隠し、今の夫に娶られたもので御座います。ア、其子は今何うして居りませうか、もし此世に成人して居ますなら、神様のお慈悲で一目遇はして頂きたう御座います」

と涙と共に頼み入る。木山彦は妻の物語を聞いて今更の如く呆れ居る許りなりき。馬上の神人はニコニコしながら、

「汝の遇ひ度しと思ふ子は、今に遇はしてやらう。必ず信仰を怠るな」と言葉終ると共に、一同の神の姿は掻き消す如く消え失せにけり。

斯る所へ常楠夫婦を始め秋彦、駒彦、蛇公、蜂公の六人連は、此瀧に身を清めむと夜中に闇を冒して出で来り、忽ち眞裸となり瀧水に身を清め、天津祝詞を奏上した。木山彦は夜陰の事とて一行の何人なるか氣が付かなかつた。唯熱心なる信仰者とのみ思ひつめ、夫婦は一生懸命に祈願の祝詞を夜の明くる迄、大地に平伏して奏上して居た。

夜は漸々に明け離れ、一同の顔はハツキリとして來た。

木山彦「オ、其方は常楠夫婦では御座らぬか、ヤア、秋彦、駒彦の宣傳使殿、こ

れはこれはよい所でお目に懸りました。突然ながら、秋彦の宣傳使は私の倅で御座る。ようまア無事で居て呉れた。龍神の宮の神を征服すると云ふ神力を備へて居るとは實に偉いものだ」

と涙をホロリと零す。秋彦は藪から棒の此言葉を少しも訝かる色なく、

秋彦「ア、貴方が父上で御座いましたか、ようまあ達者で居て下さいました」

と人目も構はず木山彦に抱きつき、嬉し涙に掻き暮れて居る。

常楠「此間から合點の往かぬ事のみ突發して、彼方からも此方からも親子の對面

ばかり、吾々夫婦は三人の子を發見致しました。之も全く大神様のお引き合せ、

酋長殿も大切なお息子に御面會遊ばして、こんな大慶な事は御座いませぬ」

と涙を流し祝意を表する。秋彦、駒彦、虻公、蜂公四人は無言の儘手を合せ、瀧

水に向つて「熊野大神様、有り難く御禮申上げます」と心の中で祈願を籠めて居

る。

此時何處ともなく麗はしき雲起りて四邊を包み、忽然として現はれた一柱の女神、言葉淑やかに宣り給ふやう、

「秋彦、駒彦兩人が至誠に免じ、神界より親子の對面を許したのであるぞよ。今改めて汝等に告げむ。駒彦は常楠、お久の二人の中より生れた子である。又秋彦は木山彦とお久との間に生れた子である。次に虻公は常楠と木山姫との中に生れた子である。次に蜂公は木山彦とお久との中に生れた子である。何れも皆天則違反の「いたづら」より生れ出でし御子なれば、神界の罪に依りて今日迄親子互に顔を知らず、親は子を探ね、子は親を探ねつつあつた。されど汝等が信仰の力に依つて各罪を赦され親子の對面をなす事を得たのである。夢々疑ふ事勿れ。我は天教山より下り來れる木花姫命なるぞ」

と宣り終へ給ひて、微妙の音樂に送られ崇高なる御姿は煙の如く消え給ふ。

四邊を包みし麗はしき雲はさつと晴れて、さしもに高き那智の瀧の落つる音、滔々と轟き渡り、瀧の飛沫に各日光映じ、得も云はれぬ麗はしき光景となつた。

一同は神恩を感謝し、茲に水も漏らさぬ親子の縁を喜びつつ、若彦館を指して進み往く。

惟神靈幸倍坐世。

(付記)

木山彦きやまひこ お久ひさ……秋彦あきひこ(鹿しか) 遁兒とんじ、六才ろくさい、繼母まはは

常楠つねくす(種たね) お久ひさ……駒彦こまひこ(馬うま) 失兒しつじ、三才さんさい、天狗てんぐ

常楠つねくす 木山姫きやまひめ(おたつ) ……蛇あぶ、捨子すてご、水兒みづご、一才いっさい

木山彦きやまひこ お久ひさ……蜂はち、水兒みづご、一才いっさい

(大正一一・六・一一 舊五・一六 加藤明子録)

第三篇 有耶無耶うやむや

第九章 高姫騷たかひめさわぎ(七二二)

若彦の門を潜つて入り来る一人の美人があつた。門番の秋公、七五三公の兩人は此姿を見て、

秋公「モシモシ、何處のお女中か知りませぬが、何の御用で御座るか、門番の私に一應御用の趣を聞かして下さいませ」

女「少しく様子あつて……免も角主人に會ひ度う御座いますから」

七五三公「名も分らぬ女を通す事は罷り成りませぬ」

女「お前は此處の門番ではないか、妾が如何なる者か分らぬ様な事で、門番が勤まりますか」

と「たしなめ」乍ら、足早に奥深く進み入つた。

七五三公「ア、薩張駄目だ、女と言ふ奴は押し尻の強いものだ。然し彼奴は何處ともなしに氣品の高い女であつたが一體何だらうかなア」

秋公「ひよつとしたら大將の「レコ」かも知れぬぞ」
と小指を出して見せる。

七五三公「當家の大將に限つてそんな者があつて堪らうかい。玉能姫様と言ふ立

派はな奥おく様さまがあるのだが、今いまは再ふたたび度さん山ふもとの麓いくたの生もり田もりの森もりに、三あなな五ひけう教やかたの館たを建たてて熱ねつ心しんに活くわつ動どうして居をられると言いふ事ことだ。御ご夫ふう婦ふは遙はる々ばる國くにを隔へだてて忠ちゆう實じつに御ご神しん業げふを爲なさる

と言いつて、大たい變へんな評へう判ばんだから、そんな事ことがあつて堪たまるものか

秋あき公こう「さうだと言いつて思し案あんの外ほかと言いふ事ことがある。ひよつとしたら玉たま能の姫ひめさまが御お入い來でになつたのぢやあるまいかな

七し五め三こう公こう「馬ば鹿かを言いへ、玉たま能の姫ひめさまがどうして一ひとり人ひとりお入い來でになるものか。少すくなくとも一ひとり人ひとりや二ふたり人ふたりのお供ともは、屹きつ度とつ従ついて居をらねばならぬ筈はずだ

秋あき彦ひこ「そこが……微しの行びと言いふ事ことがある。きつと大たい將しやうが戀こひしくなつて、御ご微び行かうと出で掛かけられたのだらう

と門もん番ばんは美び人じんの噂うはさに有うち頂やう天てんになつて居ゐる。

美び人じんは奥おく深ふかく進すすみ入いり玄げん關くわん先さきに立たち、小こ聲こゑになつて、

女をんな「若わか彦ひこ様さまは御ご在ざい宅たくで御ご座ざいますか

と訪おとなな「玄げん關くわん番ばんの久きう助すけは此この聲こゑに走はしり出いで、

久きう助すけ「ハイ、若わか彦ひこの御ご主しゆ人じんは今いま奥おくに居ゐられます。誰ど方なたで御ご座ざいますか、御お名なを聞き

かして下さいませ」

女「少しく名は申し上げられぬ仔細が御座います。お會ひ申しさへすれば分りま
すから、何卒「女が一人お訪ねに参つた」と傳へて下さいませ」

久助「私は姓名を承はずにお取次を致しますと、大變に叱られますから、何
卒名を言つて下さい、さうでなければお取次は絶対に出来ませぬ」

女「左様なれば妾から進んでお目に掛るべく通りませう」

久助「是は怪しからぬ事を仰有る。此處は私の關所、さう無暗に通る事は罷りな
りませぬ」

女「左様なれば取次いで下さいませ」

久助「見れば貴女は相當の人格者と見えるが、私の言ふ事が分りませぬか。玄關
番は玄關番としての職責を守らねばなりませんから、何程通して上げ度くとも、
姓名の分らない方は化物だか何だか知れませぬ。氣の毒乍ら何卒お歸り下さいま
せ」

美人は稍聲を高め、

女をんな「コレ久助きうすけ、お前はまだ聖地せいちに上のぼつた事もなく、生田いくたの森もりへ来た事ことも無いので分わからぬのも無理むりはないが、名なを名告ならずとも玄關番げんくわんばんをして居ゐる位くらゐなら、大抵たいてい分わかりさうなものだ。何なんと言いつても妾わたしは通とほるのだから邪魔じやまをして下くださるな」

と何處どこやらに強味つよみのある言いひ振ぶり。

久助きうすけは首くびを傾かたむけ、

久助きうすけ「ハテナ、貴女あなたは奥様おくさまでは御座ございませぬか。ア、いやいや奥様おくさまではあるまい。尊たふとき玉能姫様たまのひめさまは結構けつこうな御神業ごしんげふを遊あそばして、今いまでは女房にようぼうとは言いひ乍ながら、格式かくしきがズツと上うへになられ、當家たうけの御主人様ごしゅじんさまも容易よういにお側そばへ寄よれないと言いふ事ことだ。そんな立派りっぱな方かたが供ともを連つれずに、輕々かるがるしく一人御入來遊ひとりおいであそばす道理だうりがない。ア、此奴こいつは、てつきり魔性まじやうのものだ。……こりやこりや女をんな、絶對ぜつたいに通とほる事ことは罷まかりならぬぞ」

と大聲おほこゑに唎鳴どなりつけてゐる。若彦わかひこは久助きうすけの大聲おほこゑに何事なにことの起おこりしかと、座ざを起たつて此場このばに現あらはれ來きたり、美人びじんの姿すがたを見みて打うち驚おどろき、

「ア、お前は玉たま……」

と言いひかけて俄にはかに口くちを「つぐ」み、居直ゐなほつて、

「何れの女中か存じませぬが、何卒奥へお通り下さいませ」

女「ハイ、有り難う御座います。御神務御多忙の中を御邪魔に上りまして、誠に

御迷惑様で御座いませう。左様なればお言葉に従ひ、奥に通して頂きませう」

若彦「サア私に従いて御入来なさいませ。コレ久助、お前は此處にしつかりと玄

關番をして居るのだよ、一足も奥へ来てはいけないから」

と言ひ捨てて兩人は奥の間に姿を隠した。後見送つた久助は首を稍左方に傾け舌

を斜に噛み出し、妙な目付をして合點の往かぬ面持にて天井を眺めて居る。若彦

は奥の間に女と二人靜かに座を占め、

若彦「貴方は玉能姫殿では御座らぬか。大切な御神業に奉仕しながら、何故案内

も無く一人で此處へお入来になりましたか。私は神様へ誓つた以上、貴女と此館

で面會する事は思ひも寄りませぬ」

玉能姫「お言葉は御尤もで御座いますが、之には深い仔細があつて参りました。

貴方の御存じの通り、言依別様より大切な神業を命ぜられ、次で生田の森の館の

主人となりましたが、それに就いて高姫さまの部下に仕へて居る人達が、「三個

の神寶は、屹度妾と貴方とが申を合せ當館に隠してあるに相違ないから、若彦の生命をとつてでも、其神寶の所在を白状させねばならぬ」と言つて、大變な陰謀を企てて居りますから、妾もそれを聞いて心落ち着かず、何にも御存じの無い貴方に御迷惑を掛けては、妻たる妾の責任が濟むまいと思つて、長途の旅を只一人忍んで御報告に参りました」

若彦「左様で御座つたか。それは御親切に有難う御座います。然し乍ら何事も神様に任した私、假令高姫が如何なる企みを以て参りませうとも、神様のお力に依つて切り抜ける覺悟で御座います。何卒御安心の上、休息なされたら一時も早くお歸り下さいませ。萬一此事が他に洩れましてはお互の迷惑」若彦、玉能姫は立派な者だと思つて居たのに、矢張人目を忍んで夫婦が會合して居る」と言はれてはなりませんから、教主のお許しある迄は絶対に御目には掛る事は出来ませぬ。その代り私も何處までも獨身で道を守つて居りますから、御安心下さいませ」

玉能姫「貴方に限つて左様な氣遣ひは要りますものか。互に心の裡は信用し合つた仲ですから、決して決して左様な「さも」しい心は起しませぬ。御承知で御座

いませうが何れ遠からぬ中、高姫さまか、又は部下の方々が食物を以て見えませうから、決してお食りになつてはなりません。是だけは特にお願ひ致して置きませぬ」

若彦「ハイ、有り難う御座います、何から何まで御注意下さいまして御親切の段、何時迄も忘却致しませぬ」

玉能姫は嬉し氣に若彦の言葉を聞いて笑顔を作り、嬉し涙を滲ませて居る。

斯かる處へ玄關に當つて争ひの聲おいおい高くなつて来る。二人は何事ならんと耳を澄ませ聞き入れれば、高姫の痾聲として、

「此處へ玉能姫が來たであらう」

久助の聲「イヤイヤ決して決して女らしい者は一人も來ませぬ。此館は御主人の

命令に依つて當分の間、女は禁制で御座る」

高姫の聲「何と言つて隠してもチヤンと門番に聞いて來たのだ。女が一人此處へ

這入つて來た筈だ、上も下も心を合せ、しやうも無い女を引き摺り込み、體主靈

従のあり丈けを盡し、表面は誠らしく見せて居る若彦の企みであらう。彼奴は青

彦と言つて、妾が育ててやつた男だ。エー、通すも通さぬもあるか、言はば弟子の館に師匠が來たのだ。邪魔致すな」

と唝鳴り立て、久助の止むるを振り拂ひ、三四人の男を玄關に待たせ置き、疊を足にて強く威喝させ乍ら若彦の居間に進み來り、

高姫「オホ、若彦さま、悪い處へカシヤ婆が參りまして誠に御迷惑様、折角意茶つかうと思ひなさつた處を、風流氣の無い皺苦茶婆が這入つて來て、折角の興を醒ました。お前さまは羊頭を掲げて狗肉を賣る山師の様な宣傳使ぢや。玉能姫殿、此高姫の眼力に違はず、表面は立派な事を……へん……仰有つて言依別の教主を誤魔化して御座つたが、今日の醜態は何で御座りますか。貴方の御身分で一人の伴も連れずに、大切な神業を遊ばす夫の側へ忍んで來るとは、實に立派な貴方の行ひ、高姫も實に感心致しました。本當に凄いい腕前、爪の垢でも煎じて頂き度う御座いますワ。オホ、」

若彦「これはこれは高姫様、遠方の所ようこそいらせられました」

高姫「よう來たのでは無い、悪く來たのですよ。お前さまも氣持良く樂しまうと

思つて居た處へ、皺苦茶婆アがやつて来て、折角の樂しみを滅茶々にされて胸
が悪いでせう。月に村雲、花には嵐、世の中は思ふ様には往きますまいがな。西
は妹山、東は背山、中を隔つる高姫川、本當に悪い奴が出て參りました。コレコ
レ玉能姫さま、恥かし相に赭い顔して何ぢやいな。阿婆擦女の癖に、殊勝らしう
見せようと思つて、そんな芝居をしても、他のお方は誤魔化されませうが、此高
姫に限つて其手は喰ひませぬぞエ。「その手でお釋迦の顔撫でた」と言ふのはお
前さまの事だ。ア、ア怖い怖い、こりや一通りの狸ではあるまい。愚圖々々して
居ると高姫の鞆丸……オツトドツコイ……膽玉まで抜かれますワイ」
玉能姫「これはこれは高姫様、遠方の處御苦勞様で御座いました。今承はれば貴
方は色々和我々夫婦の事に就いて、誤解をして居らつしやいますが、決して左様
な考へを以て來たのでは御座いませぬ」
高姫「そんな事は今々の信者に仰有る事だ。蹴爪の生えた高姫には、根つから通
用致しませぬワイなア」

と小面憎氣に顔をしゃくつて見せる。玉能姫は返す言葉も無く迷惑相に俯向いて

居る。

高姫「コレ、玉能姫さま、イヤお節さま、悪い事は出来ずまいがな。誠水晶の生粹の日本魂ぢやと教主が見込んで、大切な御神業を言ひ付けられた貴女の精神が、さうグラ付く様な事では如何になりますか。妾は是から貴女の夫婦會合を實地に目撃した證據人だから、三五教一般に報告致しまして信者大會を開き、お前さまの御用を取上げて仕舞はねば、折角大神様の三千年の御苦勞も水の泡になりません。サア如何ぢや、返答をしなされ。三つの玉は何處へ隠してある。それを聞かねば、お前さまの様なグラグラする瓢箪鯰には秘密は守れませぬ。サア玉能姫さま、若彦さま、夫婦共謀してドハイカラの言依別を誤魔化して居つたが、最早化けの現はれ時、何と言つても高姫が承知しませぬぞ工。一般に報告されるのが苦しければ……魚心あれば水心ありとやら……此高姫も血もあれば涙もある。決してお前さま達の御迷惑を見て、心地よいとは滅多に思ひませぬ。サア玉能姫さま、お前さまはチツと妾の言ひ様が強うて腹も立つであらうが、そこは神直日大直日に見直し聞き直して、御神寶の所在を妾にソツと言つて下さい。さうすればお前

さま等夫婦のアラも分らず、妾も亦誠の御神業が出来て結構だから

玉能姫「妾は一度教主様から玉はお預り致しましたが、不思議な方が現はれて遠

い國へ持つて行かれましたから、實際の事は何處に隠されてあるか、妾風情が分

つて堪りますか。又假令知つて居りまして、三十萬年の間は口外は出来ない事

になつて居りますから、それ許りは如何仰有つても申し上げられませぬ。何卒貴

女の天眼通と日の出神の御守護とで、玉の所在を御発見なさるが宜しう御座いま

せう

高姫「エー、ツベコベと小理屈を言ふ方ぢやなア。そんな事を勿體ない、日の出

神に御苦勞を掛けたり、天眼通を使うて堪りますか。お前さまが只一言「斯う斯

うぢや」と言ひさへすれば良いぢやないか

若彦「現在夫の私にさへも仰有らぬのですから、何程お尋ねになつても駄目です

よ

高姫「エー、お前までが横槍を入れるものぢやない。夫婦が腹を合して隠して居

るのであらう。そんな事はチャーンと分つて居るのだ

若彦は稍語氣を荒らげ、

若彦「知つて居るのなら何故貴女勝手に探しなさらぬか。貴女の仰有る事は矛盾撞着脱線だらけぢやありませんか」

高姫「脱線とはお前の事だ。教主の御命令がある迄夫婦顔を合さぬと誓ひ乍ら、今日の脱線振りは何の事だ。矛盾撞着はお前等夫婦の事ぢやないか。餘り人の事を「けなす」と屑が出ますぞ。オホ、、、」

と嘲る様に笑ふ。

玉能姫「若彦様、妾は之でお暇致します。高姫様、何卒御ゆるりと遊ばしませ。左様なら」

と立ち上らうとするを、高姫はグツと肩を押へ、

高姫「コレコレ、逃げ様と云つたつて逃しはせぬぞえ。金輪奈落の底迄、神寶の所在を白状させねば措きませぬぞ」

玉能姫「何と仰有つても是許りは申し上げられませぬ」

高姫「何と、マア、夫婦がよく腹を合したものだ。本當に羨ましい程、仲の良い

高姫「何と、マア、夫婦がよく腹を合したものだ。本當に羨ましい程、仲の良い

高姫「何と、マア、夫婦がよく腹を合したものだ。本當に羨ましい程、仲の良い

高姫「何と、マア、夫婦がよく腹を合したものだ。本當に羨ましい程、仲の良い

高姫「何と、マア、夫婦がよく腹を合したものだ。本當に羨ましい程、仲の良い

高姫「何と、マア、夫婦がよく腹を合したものだ。本當に羨ましい程、仲の良い

御夫婦様ぢや。オホ、、、

玉能姫「何卒高姫様、其處放して下さいませ。妾は生田の森へ歸らねばなりません

ぬから、一時の間も神業を疎略に出来ませぬ」

高姫「オホ、、、一時の間も疎略に出来ない御神業を振り棄てて、夫の側へな

れば幾日も幾日もかかつて、遙々紀の國迄お越し遊ばすのだから、實に立派なも

のだ」

玉能姫「それでも退引きならぬ御用が出来ましたので、多忙の中を神様にお願ひ

申して参つたので御座います」

高姫「その用とは何事で御座るか、サア、それを聞かして貰はう。妾に聞かせぬ

様な御用なら何れ碌な事ではあるまい。お前達若夫婦は寄つて如何な企みをして

居るか分つたものぢやない。サアもう斯うなつては私も勘忍袋の緒が切れた。何

と云うても舌を抜いても言はして見せる」

と癩聲に呶鳴り立てて居る。

此時玄關に騒々しき人の足音が聞えて來た。暫らくすると秋彦、駒彦、木山彦

夫婦外四人兄弟、慌しく奥の間の聲を聞きつけて此場に現はれ来り、八人一度に手をついて若彦の前に平伏した。

若彦「ヤア、其方は駒彦、秋彦の宣傳使では御座らぬか、何用あつてお越しなされた」

駒彦「ハイ、熊野の大神様へお禮の爲めに参拜致しました」

高姫はカラカラと打笑ひ、

高姫「アハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ようもようも揃つたものだ。何かお前達は謀し合

はせ大陰謀を企てて居た所、アタ間の悪い、憎まれ者の高姫がやつて来て居るの

で肝を潰し、熊野の大神様へお禮詣りをしたとは、子供騙しの様な逃口上、立派

な聖地には大神様が御座るぢやないか。それにも拘はらず熊野へお禮詣りとは方

角違ひにも程がある。何事も嘘言で固めた事は直剥げるものだ。オホ、ハ、ハ、あ

の、マア皆さんの首尾悪相な顔わいな。梟鳥が夜食に外れてアフンとした様な其

様子、寫眞にでも撮つて置いたら、よい記念になりませうぞい」

と言葉尻をピンと撥ねた様に捨臺詞を使つて居る。駒彦一行は何が何やら合點往

かず途方に暮れ、默然として看守つて居る。

若彦「皆様、後でゆつくりとお話を承はりませう。何卒御神前へおいで遊ばして、

お禮を濟まして来て下さいませ。……オイ久助、御神殿へ此方々を御案内申せ」

久助「は玄關より若彦の聲を聞きつけ走り來り、

久助「サア、皆様、大廣間へ御案内致しませう」

高姫「コレコレ惡人共、イヤ同じ穴の狐衆、暫くお待ちなされ。若彦と腹を合は

せ、御神殿へお禮と云ひ立て、巧く此場を逃げて行く御所存であらう。そんなア

ダトイ事を成さつても、世界の見え透く日の出神の生宮はチャンと知つて居りま

すぞえ。何故男らしう此場で斯様々々の次第と白状なさらぬのだ。今日三五教に

於て、誠の神力の備はつた神の生宮は此高姫で御座る。高姫の申す事を聞くか、

若彦の言葉を聞くか。サア事の大小、輕重を考へた上、速かに返答なされ。返答

次第に依つて此高姫にも量見が御座るぞや」

秋彦、駒彦は口を揃へて、

秋、駒「私は第一に言依別の教主、其次には玉能姫様、其次には若彦さまの崇敬

者しやですよ。何程なにほど高姫たかひめ様が御神力ごしんりきが強いつよと言いつて、自家じかく廣告かうこくを爲なさつても、根ねつか
ら我々われわれの耳みみには這入はいりませぬ。サア皆みなさま、御神殿ごしんでんへ參拜さんばい致いたませう〇
と此場このばを立たつて行ゆかうとする。高姫たかひめは夜叉やしやの如ごとく立腹りつぷくし、秋彦あきひこ、駒彦こまひこの襟髪えりがみを兩もろ
手てにひん握にぎり、力ちからをこめて後うしろへドツと引ひき倒たふした。常楠つねくす、木山彦きやまひこは餘あまりの亂暴らんばうに
ムツと腹はらを立たて、
常楠つねくす 何處どこの何人なにびとか知しらぬが、罪つみも無ない我々われわれの倅せがれを打擲ちやうちやくするとは言語道斷ごんごだうだん、年としは
寄よつても昔執むかしとつた杵柄きねづかの腕うでの冴さえは今いまに變かはりは致いたさぬ。さア高姫たかひめとやら、思おもひ知し
れよ〇

とグツと襟首えりくびを掴つかみて常楠つねくすが強力がうりきに任まかせて、猫ねこを抓つまんだ様やうに館やかたの外そとに放ほうり出だした。
高姫たかひめはそれきり如何どうなつたか暫しばらく姿すがたを見みせなかつた。一同いちどうは神殿しんでんに向むかひ感謝かんしゃの祝のり
詞とを奏上そうじやうして高姫たかひめの無事ぶじを祈いのりけるこそ殊勝しゆじやうなれ。

(大正一一・六・一一 舊五・一六 北村隆光録)

第一〇章 家宅侵入〔七二二〕

晴れては曇る秋冬の

空高姫は改心の

眞如の月を曇らせて

心の海に荒波の

立騒ぎては又曇る

慢心改心行き交る

心の色も定めなき

執着心のムラムラと

又もや頭を擡げつつ

金輪奈落どこまでも

三つの神寶の所在をば

探さにや置かぬと焦だちて

四人の従者を伴ひつ

山の尾涉りやうやうと

南の果に紀の國の

道の熊野も恙なく

【あてど】も那智の瀧水に 胸を打たれてシホシホと

若彦館に立向ひ

胸の炎の燃ゆるまに

無理難題を吹きかけて

若彦夫婦其他の

信徒達を悩ませつ

常楠爺さまの腕力に

館の外に放り出され

無念の齒切り噛み締めて

後振り返りふりかへり

館を睨みスゴスゴと

四人の男と諸共に

心さかしき山路を

登りつ降りつ浪速江の

よしもあしきも白妙の

衣を纏ひ引返す

再度山の山麓に

新に建ちし神館

初稚姫の守りてし

生田の森に歸り行く。

高姫 ♪ ア、此處が意地クネの悪い空助の元の館だ。玉能姫は今迄聖地に羽振りを
きかして、ピカピカと螢の様にチツと許り光つて居つたが、到頭慢心強く、欲心
が深いものだから、空助の奴にウマウマと計略にかけられ、結構な聖地を飛び出
し……お前は如何しても生田の森に因縁があるから、御苦勞だが再度山麓の神館
の守護をして呉れ……なんて巧い辭令にチヨ口まかされ、こんな所へ左遷せられ

て、有頂點になつて喜んで居る様なお目出度い奴だ。誑す狐が騙されたとは此事だ。實に氣の毒なものだワイ。悪人には悪人が寄ると見えて、若彦館に集まつて來よつた連中のあの面と云つたら、泥坊でもしさうな奴ばかりぢやつた。……是れからお前達も充分に氣を付けて、誰が何と云つても、日の出神の命令に反く事は出来ないぞえ。貫公、武公、しつかりなされや」

貫州「委細承知致しました。併し是れから日の出神様は聖地へ御歸り遊ばすので御座いますか、但は他の方面へ御出張になりますか、一寸伺つて下さいませな」

高姫「何と云ふお前は頭腦の悪い事だ。日の出神様に伺つて呉れとは、そりや何を言ふのだ。日の出神様と高姫と別々に考へて居るのだな。それがテンから間違だ。高姫は即ち日の出神、日の出神は即ち高姫だ。靈肉一致、誠生粹の大和魂の高姫だ」

貫州「それでも貴女、何時も日の出神の生宮と仰有るぢや御座いませぬか。宮と云ふものは物も言はず動きもせぬものだが、あなたの宮はどこへでもよく動きますな」

高姫「エー分らぬ男だなア。どこへでも思つた所へ行きよるから、【イキ】宮と云ふのだ。お前は、靈肉一致の此水火が分らぬから仕方がない。餘程偉い男だと思込んで遙々紀の國まで連れて行つたのだが、此日の出神が若彦館からつまみ出されて腰を打ち、苦んで居るのに、一口の應對もようせず、蒸し返しも致さず、蕨蕪の化物の様にビリビリ慄うて泣き聲を出し……モシモシ高姫さま、一體如何なるので御座いませう……なぞと、アタ甲斐性のない、あまり阿呆らしうて、愛想が盡きました。アア何奴も此奴もマサ力の時になつたれば弱いものだ。ここへ来て居る四人連は高姫様の爲になれば何時でも死にますの、生命を差上げますのと、よう言はれたものぢや。それ丈の勇氣が有るのなら、なぜ生命を的に、若彦や其他の亂暴者を打懲さなんだのぢや。内覇張りの外【すぼり】とはお前の事ぢやぞえ。是れからチツと腹帯を締め、心を入れ直して貰はぬと、肝腎要の御神業に奉仕する事は出来ませぬぞえ。是れから心を入れ替へて何でも日の出神の云ふ事を聞きますか。サア返答を改めて聞かして下さい。今迄の様なヨタリスクはモウ喰ひませぬから、駄目ですよ」

貫州くわんしゅう「ハイ今日けふ限り心こころを改あらためて、どんな事ことでも貴女あなたの言ことは絶対服従ぜつたいふくじゆうを致いたします」

高姫たかひめ「假令たとへ妾わしがお前まへに死しねいと云いつても、死しにますかな」

貫州くわんしゅう「ハイ一旦いったん約束やくそくをした上うへは、私もわたし一丈二尺いちぢやうにしやくの禪ふんどしを締しめた男をとこだ。決けつして間違まちがひは

御座ございませぬワイ」

高姫たかひめ「ア、それでヤツと安心あんしんをした。コレコレ武公たけこう、清公きよこう、鶴公つるこう、お前等まへらは如何どう

だな」

武公たけこう「ハイ私もわたし略同意見ほぼどういけんで御座ございます。事ことと品しなに依よれば生命いのちでも差上さしあげます」

高姫たかひめ「略同意見ほぼどういけんとはソラ何事なにことぢや。優柔不いうじゆうふだん斷瓢鯨へうねんしゆぎ主義しゆぎの言依別命ことよりわけのみことの御靈みたまにまだ感かん

染せんされて居をると見みえるワイ。そんな筒井式つつあしきの連中れんちゆうは、今日けふ限り絶縁ぜつえんしますから、

トツトと歸かへつて下ください」

武公たけこう「さうだと云いつて、一つひとつよりない生命いのちを、さう無暗むやみに貴女あなたに上あげられますか。

私はわたし大神様おほかみさまに差上さしあげた生命いのち、さう貴女あなたの自由じゆうにはなりません。絶対服従ぜつたいふくじゆうと云いつて

もヤツパリ制せい限げん的てき絶ぜつ對たい服ふく從じゆうですから………なア貫州くわんしゅう、貴様きさまの絶ぜつ對たい服ふく從じゆうは先まづこ

らだらう」

貫州「……………」

鶴公「オイ貫州、貴様は高姫さまに絶対服従し、源平の戦ひぢやないが、長門の

壇の浦迄行く積りか知らぬが、俺等三人が高姫様に破門された時は如何する考へ

だ。我々四人は何處までも行動を共にすると誓つてある事を忘れはせまいなア」

貫州「そりや決して忘れては居らぬ。互に忘れてはならぬぞと云ふ約束はしたが、

まだ細目は定つて居ないのだから、そこは自由意志に任して貰はなくちや可けな

いよ。其代りに忘れなと云ふ約束は、どこまでも守つて忘れないから、安心して

呉れ」

鶴公「何を吐しやがるのだい。實行が肝腎だ。忘れる忘れぬは畢竟末の問題だ。

俺達三人は是れから……高姫さまに暇を頂いたのだから、貴様と絶縁をする。其

代りに月夜許りぢやないからな。暗の晩には用心なさりませ」

貫州「さう團子理屈を捏ね廻したり、脅喝されては堪らぬぢやないか。チツと淡

泊な精神になつて、俺の言ふ事を善意に解して貰はぬと困るぢやないか」

武公「何と云つても我々は執着心の強い高姫さま仕込だから、淡泊になれよと云

つたつてなれるものかい。鳶とんびにカアカアと鳴なけ、鶴つるにコケコツコウと唄うたへと云いふ
様な注文ちゅうもんだ〃

高姫たかひめ「コレコレお前達まへたちは大變たいへんな御神業ごしんげふを前まへに扣ひかへ乍ながら、妾わしが一口ひとくち云いつたと云いうて、
其言葉尻そのことばじりを掴つかまへて何をなにゴテゴテ云いふのだ。お前達まへたちの心こころを鞭撻べんたつする爲ために酷きつい事ことを
云いうたのだ。此高姫このたかひめだとしてコレ丈味方だけみかたが無なくなり……オツト……ドツコイ無形むけい
の味方みかたが澤山たくさんあるわいな。此場合このばあひに一人ひとりでも大切たいせつだ。誰たれが破門はもんしたい事ことがあるも
のか。そこは推量すゐりやうせなくてはならぬぢやないか。なア鶴公つるこう、清公きよこう、皆みなさま、さう
ぢやないか〃
と、たらず様やうに云いふ。

鶴公つるこう「貴女あなたからさう碎くだけて出でて下くだされば、我々われわれも別に額口ひたひくちに癩筋かんすぢを立て、糊付のりつけ
物の様やうに鯨張しやちいばりたい事ことは御座ございます。何でも承うけたまはりますから、どうぞ御用ごようを仰あふ
せ付け下くださいませ〃

高姫たかひめ「あゝそれでヤツと内亂ないらんも無事ぶじに鎮定ちんていしました。又またしてもお前達まへたちは革命氣分かくめいきぶん
を唆そそるやうな事ことを云いふから困こまつて了しまふ。サア是これから日ひの出神でのかみの生宮いきみやの云いふ事ことを聞き

きなされや」

鶴公「ハイハイ承はりませう。何事なりと御遠慮なく仰せ付け下さいませれば、

有難う存じます」

と芝生の上に端坐し、両手をついてワザと丁寧ていねいに挨拶あいさつをする。

高姫「そんなら此館は今戸締りぢやが、錠ぢやうを扨切つても中へ這入つて、調査しらべて

来て下され。玉能姫の奴やつ、どんな事をして居るか知れやしない。箆笥たんすの抽斗ひきだしを一々

點檢てんけんして、祕密書類ひみつしよるゑでもあつたら、抜目ぬけめなく持出して來るのだよ」

鶴公「主人の不在宅るすたくに這入る事は、何となしに心持こころもちがあまりよう御座ございませぬが

なア、そんな事ことすれば、家宅侵入罪かたくしんにぶざいとか無斷家宅搜索むだんかたくそうさくとかになりはしませぬか。

豫審判事の令状れいじやうが無ければ到底執行たうていしつかうする事は出來ませぬだらう」

高姫「お前はそれだから可いかぬのだ。舌したの根ねの乾かわかぬ内に、直すぐに反抗はんかう的態度たいどを執と

るぢやないか。勿論もちろん不在宅るすたくへ這入ることは出來ないが、ここは三五教あななひけうの支社でやしらぢや

ないか、謂いはば吾々の部下ぶかでもあり、居宅きやたくも同然どうぜんだから、そんな遠慮えんりよは要いらぬ。

命令めいれいに服從ふくじゆうしなされ」

鶴公つるこう「オイ貫州くわんしゅう、武公たけこう、清公きよこう、如何どうしようかなア」

貫州くわんしゅう「モシ高姫様たかひめさま、貴女あなた先さきへお這入りはい下さいませ。大將たいしやうより先さきに立つと云ふ事ことは

御無禮ごぶれいで御座ございます。私わたくしは貴女あなたのお出いでになる所ところは、どこまでもお供ともを致いたす従者ともびと

ですから……さうでないと天地てんちの道理だうりが合あひますまい」

高姫たかひめ「エー間に合あぬ男をとこだなア」

と無理むりに戸とを搥ねぢあけようと焦いらつて居ゐる。斯かる所ところへ玉能姫たまのひめは虻公あぶこう、蜂公はちこう兩人りやうにんを伴ともなひ、

スタスタ歸かへり來きたり、

玉能姫たまのひめ「貴女あなたは高姫様たかひめさま、假かりにも妾わたしの不在宅るすたくを、誰たれに斷ことわつてお開あけなさるのだ。

チツと亂暴らんぼうでは御座ございませぬか」

高姫たかひめ「イヤお節せつか、要いらぬ「おセツ」介かいぢや。三五教あななひけうの支社でやしろを自由自在じいうじざいに開あける

のは、日ひの出神でのかみの特權とくけんぢや。玉隱たまかくしの大罪人だいがいにんの分際ぶんざいとして、何なにをゴテゴテ云いふ資しか

格くがあるか。今日けふから此館このやかたは日ひの出神でのかみの假かりの御住居おすまゐ、お前は是これから引返ひきかへし、御ご

苦勞くらうだがマ一遍いつべん紀きの國くにへ行いつて、戀こひしい男をとこと末永すえながう樂たのしんで暮くらしなさい。さうすれ

ばお前まへさまも思惑おもわくが立たち、面おも白しろい月日つきひが送おくれるだらう。此この闕しき一い歩つぽたりとも跨またげる

事は許しませぬぞや」

玉能姫「何と仰有つても此館は妾の監督権内にあるもの、何程日の出神様でも、

指一本觸へる事は許しませぬぞ」

と優しき女に似ず、稍言葉に力を入れて極めつけた。

高姫「あのマアおむつかしい顔ワイナ。ホ、ホ、ホ、若彦に會うて、甘つたるい

言葉を聞かされて居なさつた時の顔と、今の顔とはまるで地藏と閻魔の様に變つ

て居る、あゝそりや無理もない。憎うて憎うてならぬ邪魔者の高姫と、可愛て可

愛てならぬ若彦とだから、無理もありますまい。思ひ内に在れば色外に露はると

やら、結局お前は正直なからだ」

と肩を揺り腮をしやくる憎らしさ。

玉能姫「何と仰有つても、高姫様を此館へ入れてはならぬと嚴命を受けて居りま

すから……」

高姫「何と言ひなさる。嚴命を受けたとは、そりや誰から受けたのだ。そんな權

利を持つて居る奴は三五教には一人もない筈だ。大方僭越至極な行動を敢てする

言依別か空助の指圖だらう。サア此一言を聞いた上は、どこまでも白い黒いを別けねば置かぬ。……誰が言うたのだ。有態に白状を致されよ」と威丈高になる。

玉能姫「オホ、高姫様の恐ろしいお顔、モ少し淑やかに低い聲で仰有つて下さいまして、玉能姫の耳はよく通じますのに……妾は日の出神から嚴命を受けました」

高姫「日の出神とは妾の事ぢや。妾が何時そんな命令を致しましたか」

玉能姫「ハイ何時も厳しく仰せられます。自分の守つて居る館は、假令教主でも、如何なる長上の方でも、生神様でも、黙つて入れてはならぬ。絶対に其處を守り、他の者は寄せ付けるでないと、貴女は始終仰有つたぢやありませんか。教主も妾の長上なれば貴女もヤツパリ長上の仲間です。又自分以下の役員様、信者と雖も、自分の守護神の許さぬ事は絶対にならないと、貴女の日の出神様の厳しきお警告でせう。妾は日の出神様に絶対服従ですから……」

高姫「それならば何故日の出神に服従せないのだ。お前は日の出神には服従して

も、高姫の云ふ事は聞かぬと云ふ精神だなア。高姫が即ち日の出神、日の出神が即ち高姫、密着不離の關係を知らぬのか。それが分らぬ様な事で、如何して此結構な神館が守れますか」

玉能姫「……………」

高姫「口が開きますまい。無理を通さうと云つても、屁理屈や無理は日の出神の前では三文の價値も有りますまいがなア。オツホ、」

玉能姫「何と仰有つても、妾は這入つて貰ふ事は出来ませぬから……………」

高姫「何と剛腹な女だなア。理屈は抜にして、同じ道に居る吾々、チツとは融通を利かしたらどうだな」

玉能姫「融通を利かす様な行方は、變性女子の言依別の行方だ、日の出神は一言云うたら、どこまでも間違へられぬのだと仰有つたでせう。それだから何處まで

も其御神勅を遵奉致しまして、お氣の毒乍ら今回はお断り申しませう」

蛇公「コレコレ高姫さまとやら、貴女は館の主人がこれ程事を解て仰有るのに、なぜ分りませぬか」

高姫「エー喧しいワイ。新米者の癖に……泥棒面をさげやがつて……玉能姫に従いて来る様な奴に碌な奴は一人も居りやせぬ。二人が二人乍ら、どつかで泥棒でも働いて居った様な面付をして居る」

蜂公「是れは怪しからぬ。何時私がお前さまの物を竊盗しましたか。お前さまこそ、人の不在宅を竊盗しようと思つて豫備行爲をやつて居った所、玉能姫様に見つけられたぢやないか。泥棒の上手な奴は、滅多に夜間這入るものぢやない。日天様のカンカンお照り遊ばした時、公然と不在宅へ大勢連れで、近所の人にワザと用がある様な顔して這入るのが奥の手だ。お前さまも随分鍛練したものだなア。實に感心致しますワイ。永らく泥棒をやつて居った蜂……オツトドツコイお方と見えて、中々肝玉が据わつて居るワイ」

高姫「的切りお前は泥棒商賣をやつて居った奴に違ひない。さうでなければそんな秘訣が分る筈がない。玉隠しの玉能姫に従く様な奴だから、ようしたものだ。類は友を呼ぶと云つて玉盗人の家來だから、キット泥棒しとつたに違なからう。日の出神の目で睨んだら間違はあるまいがな」

蜂公はちこう「ハイ、どうも若い時ときから何々なになにを商賣しやうばいにやつて居をつたものだから、何れいつそんな臭氣におひがするかも知れぬが、今日けふは清淨潔白せいじやうけつぱく、水晶魂すゐしやうだまの眞人間まにんげんだから、あまり昔むかしの事を言いつて、過越苦勞すぎこしくらうをせぬ様やうにして下ください」

高姫たかひめ「ハ、ハ、ハ、ヤツパリ泥棒どろぼう上りぢやな。泥棒どろぼうと聞きく以上いじやうは、折角せつかくの水すゐ晶魂しやうだまが泥どろに汚けがされては大神様おほかみさまに申譯まをしわけがない。サア貫州くわんしう、武公たけこう、清公きよこう、鶴公つるこう、妾わしに従ついて來きなさい、グツグツして居をると、お前まへ達たちも折角せつかく身魂みたまの垢あかが除とれかけた所ところ、又逆轉またぎやくてんして泥どろまぶれになると險難けんなんだから……、サアサア早はやく妾わしに従ついてお出いでなさるが宜よからう。コレコレお節せつ、お前まへは良いい家來けらいが出來できました。後あとでゆつくりと、三人さんにん三みつ眼まなこになつて、此世このよを紊みだす御相談ごさうだんでもなさるが性しやうに合あうて居をりませうぞい。オホ、ハ、ハ、」

と嘲あざけり笑わらひ乍ながら、早はやくも此場このばを見棄みすて森もりの彼方あなたへ姿すがたを隠かくす。四人よにんは心無こころなげに従ついて行く。高姫たかひめは生田いくたの濱邊はまべに着ついた。四五艘しごさうの舟ふねの中なかに玉能丸たまのまると書かいた船ふねを見みつけ、

高姫たかひめ「ハハア、此奴こいつは何なんでも寶たからを隠かくしに行ゆきよつた時ときに使用つかつた船ふねらしい。他人ひと

の船に乗つて行けば泥棒になるが、此奴ア同じ三五教の所有の船だ。そして又隠しよつた船に乗つて探しに行くのは縁起がよい。コレコレ貫州外三人、早く船の用意をなさつたがよからう」

かかる所へ二三人の船頭現はれ來り、
船頭「コラコラ何處の奴か知らぬが、俺達の監督して居る船を、自由にどうする

のだ」

高姫「コレはお前達の船かな」

船頭「俺の船ではないが、監督を頼まれて居るのだ。生田の森の玉能姫様の所有

船だ。毎月一遍づつ此船に乗つて島へ行かつしやるのだよ」

高姫「大略何日程往復にかかつて、玉能姫様は歸つて來られるかな」

船頭「早い時は日歸りの事もあり、風波が悪いと三日もかかられる事があります

ワイ」

高姫「さうするとお前さんの考へでは、どこらあたり迄往く様に思ふかな」

船頭「マアさうだな、家島邊りだらう。俺達も風波の良い日は家島へ往復するが、

恰度一日のよい航程だから、何でも家島邊に結構な神様があつてそこへお參詣なさるのだらう」

高姫「同伴者は何時も何人位あるのかな」

船頭「あの人は綺麗な別嬪の癖に、自分一人で艫を漕いで、此荒波を渡つて行く

のだから、吾々船頭仲間も偉い女だ、神様の様な人と云つて呆れて居るのだ」

高姫は舌を巻いて、

高姫「なんと偉い奴だなア。併し寶の隠し場所は何でも其邊に違ない。あゝ好事を聞いた。あゝこれで前途が明かなくなつた様な氣がする。船頭さま、お前一

つ御苦勞だが家島までやつて呉れぬか。此船に乗つて……」

船頭「なんと仰有りましたも行きませぬ。お前は三五教の宣傳使でせう。笠の印

にチヤンと現はれて居る。三五教の宣傳使が來たら、何と言つても渡す事はなら

ぬと、今聖地へ往つて偉い者になつて御座る空助さまや、玉能姫さまから頼まれ

て居るのだから、何程金をくれても出す事は出來ませぬワイ」

高姫「何と云つても、行つて呉れませぬか」

高姫「何と云つても、行つて呉れませぬか」

船頭「船頭仲間にもヤツパリ一種の道德律がありますから、そんな、約束を破らうものなら、龍神さまに如何な罰を被るか分つたものぢやない。船頭は誰も彼れも貧乏人ばかりだが、併し乍ら金錢の爲に動く奴は一人も無い。そんな事は何程頼んでも駄目だ。オイ源州、金州、早く取締の宅まで往かう。グツグツして居ると又叱責を言はれるからなア」

金州「オウさうだ。急いで行かう。……オイオイ女宣傳使、決して此船に指一本觸へてはならぬぞ」

高姫「ア、仕方がない。そんなら妾も歸らうかなア」

と四人に目配せし乍ら、生田の森の方面指して走り行く。三人の船頭はヤツと安心し乍ら此場を立去つた。

高姫「オツホ、どうやら船頭の奴、安心して歸つて行きよつたらしい、サ

アお前達、是れから玉能丸に乗込み、一生懸命に家島に向つて漕ぎ出すのだ」

とクレツと踵を返し、濱邊に駆けつけ手早く綱をほどき、艀を操り櫂を漕ぎ乍ら、黄昏の空を暗に紛れて力限り走り行く。暫くあつて、玉能姫は船頭の報告に依り、

二人の男を引連れ濱邊に来て見れば、玉能丸は既に見えなくなつて居る。玉能姫は、

玉能姫「ア、失敗つた。高姫一派の者、寶の所在を嗅つけ船に乗つて往つたのに違ひない。コラスうしては居られぬ。我船はなくとも後から斷りを言へば良いのだ。サア虻公、蜂公、用意をして下さい。一刻も猶豫はなりません」

虻公「此暗いのに船を出した所で方角も分りませぬ。明日になさつたら如何ですか」

玉能姫「イヤ一刻も猶豫はなりません。サア早く用意をなされ。一刻遅れても一大事だから……」

虻公「私は船を操つた事は、生れてから有りませぬ。蜂公と云つても其通り、如何したらよからうかな」

玉能姫「そんならお前達は、又高姫一派が不在宅へやつて來ると困るから、早く歸つて留守番をして下さい。妾の歸るのが假令一日や二日遅くなつても心配せず、神妙に留守して居て下されや」

虻公あぶこう「貴女あなたは如何どうなされますの」

玉能姫たまのひめ「ア、どうでも宜よろしい。早く歸かへつて下ください」

蜂公はちこう「それでも貴女あなたの御行方おゆくへを承うけたまはつて置きませぬと困こまりますから……」

玉能姫たまのひめ「妾わたしは家島えじまへ行くのだ」

と云いふより早くはや艦網ともづなを解とき、櫓ろを操あやつり、星ほしのキラめく海面かいめんを、矢やを射いる如ごとく迂すへり出した。二人ふたりは是非ぜひなく館やかたへ歸かへり行く。

(大正一一・六・一二 舊五・一七 松村眞澄録)

第一章 難破船なんぱせん (七二三)

心こころの空そらも高姫たかひめが 四人よにんの供ともを伴ともなひて

三つの寶たからの所在ありかをば 探さぐらにや止やまめ闇やみの夜よの

おほつなばら
大海原を打ち渡り

こころ
心の駒の狂ふまに

えじま
家島を指して進み行く

そのもくてき
其目的は玉能丸

たま
玉の行方を探らむと

あやつ
操るすべも白浪の

うへ
上を這つて進み行く

よにん
四人の男は汗脂

たき
瀧の如くに搾りつつ

なみ
浪のまにまに漂ひて

つひ
遂に進路を取り外し

こころ
心も淡路の島影に

かか
かかる折しも暗礁に

ふね
船の頭は衝突し

たちま
忽ち浪に落ち込みて

きうしいつしやう
九死一生の憂目をば

み
見ながら心は何處迄も

しふねんぶか
執念深き高姫が

たからさが
寶探しの物語

しとね
褥の船に横たはり

こころ
心の海に日月の

う
浮かぶまにまに述べ立つる

ずいげつ
瑞月靈界物語

そこ
底ひも知れぬ曲津神

かみ
神の仕組の荒浪を

ときわけかきわけ進み行く

ア、惟神々々

みたまさちはへ
御靈幸倍まませよ。

高姫は首尾よく三人の船頭を【まき】散らし、一行五人意氣揚々として闇の海原を漕ぎ出した。濱邊の明火は漸く遠ざかり眼に映らない迄になつて來た。高姫は鼻蠢かしながら、

高姫「ア、皆の者、御苦勞であつた。モウ斯うなれば大丈夫、滅多に後から追ひかけ來る氣遣ひもあるまい。假令來た所で寶の所在を探つた以上は、そつと此船に積み込み、廻り道をして歸つて來れば好いのだ。さうして其玉は、此高姫の腹の中に呑み込んで置けば、誰が來たとて取られる氣遣ひはない。オホ、、、、待

てば海路の風が吹くとやら、時節は待たねばならぬものだ」

貫州「モシモシ高姫様、貴方は既に已にお寶が手に入つたやうな事を仰有いますな、取らぬ狸の皮算用では御座いますまいか」

高姫「何大丈夫だよ、何と云うても日の出神の生宮が睨んだら間違ひはない。言依別の教主や、空助、玉能姫の連中が嘸や嘸アフンとする事であらう。其時の顔が今見るやうに思はれて可憐いやうな心持がして來た。お天道様の御守護ある證據には、今夜に限つてお月様も現はれず、星ばかりの大空、いつもからあの玉が

欲しい欲しいと思つて居た故か、今日の星の光はまた格別だ。何と云つてもあれ
丈け天道様が「星々」と云つて、澤山に睨んで御座る天下の重寶だから、手に入
れば大したものだ、誰が何と云うても玉を呑んだ以上は聖地へ歸り、高姫内閣を
組織し、お前達を幕僚に任じてやる考へだから、勇んで船を漕いで下されや」
貫州「餘り氣張つたものですから、私のハンドルは知覺精神を喪失し、最早用を
なさないやうになつて仕舞ひました」

高姫「エ、今頃に何と云ふ心細い事を云ふのだい。兔の糞で、長續きがしない
ものは、到底まさかの時に間に合ひませぬぞ。ここは一つ千騎一騎の場合、伸る
か反るかの境目だから、些と腕に撚りでもかけて噪ぎなされ」

鶴公「オイ貫州、お前もさうか、俺も何うやら機關の油が切れたやうだ。腕も何
も「むし」れさうになつて仕舞つた」

清公「俺もさうだ」

高姫「まだこれから長い海路だのに、明石海峡前で「くた」ばつて仕舞つては仕
方が無いぢやないか。ちと確りと性念を据ゑてモ一働きやつて貰はねば、三千世

界の肝腎要の御用は勤め上りませぬぞえ。出世が仕度くば今氣張らねば、後の後悔間に合ひませぬぞ。三千世界に又とない功名を現はさうと思へば、人のよう致さぬ事を致し、人のよう往かぬ所へ往つて來ねば眞の御神徳は頂けませぬ。サア皆さま、先樂しみにもう一氣張りだ」

貫州「斯う腕が抜けるやうに怠くなつて來ては損も得も構うて居れますか。欲にも得にもかへられませぬ今晚の苦しさ、こりや何うしても神様のお氣に入らぬのかも知れませぬ。何とは無しに心の底から恐ろしくなり、大罪を犯すやうな氣がしてなりませぬワイ。一つ暗礁にでも乗り上げやうものなら忽ち寂滅爲樂、土左衛門と早替り、龍宮行きをせなならぬかも知れませぬ。何うでせう、風のままに、浪のまにまに任せ、皆の者が休まして貰つたら、又元氣がついて働けるかも知れませぬ」

高姫「一刻の猶豫もならぬのだから休む事は絶對になりませぬ」

貫州「ア、何程休まずに働かうと思つても、肝腎のハンドルが吾々の命令に服従しないのだから仕方が無い。高姫さま、貴女一つ漕いで御覽、さうしたら吾々

の辛い事が味ははれませう。人を使はうと思へば、人に使はれて見なくては部下の苦痛が分りませぬからなア

高姫「お前は何の爲について來たのだ。生神様に船を漕げと云ふのか、そりや些と了見が違ひはせぬかの。高姫が船が使へるのなれば、誰がこんな祕密の御神業に、お前達を連れて來るものか。船を漕がすために連れて來たのだから、そんなに氣なげをせず、一つ身魂に撚をかけて氣張つて下さい。その代りこの事が成就したら、立派にお禮を申しますから」

鶴公「お禮も何も入りませぬ。我々は手柄したいの、名が残したいの、人に誇りたいのと云ふやうな、そんな小さい心は持ちませぬ。何時も貴女は口癖のやうに、此事が成就したら出世さすとか、お禮を申すとか、萬劫末代名を残してやるとか、神に祀つてやらうとか仰有いますが、第一そのお言葉が氣に喰ひませぬワイ。そんな名譽や欲望に驅られて神様の御用が出來ますものか。我々は手柄がしたさに貴女について來て居るやうに思はれては片腹痛い。何だか自分の良心を侮辱されたやうな氣がしてなりませぬ。何卒これからそんな子供騙しのやうな事は云は

ぬやうにして下さい。「たら」だとか、「けれど」とかの語尾のつく間は駄目で
すよ。そんな疑問詞は根っから葉っから腹の蟲が承認致しませぬ」

高姫「お前はそんな立派な事を口で云うて居るが、心の底はさうぢやあるまい。

名譽心のない奴はこの廣い世界に一人だつて有らう筈がない。赤裸々に腹の底を
叩けば、誰だつて手柄が仕度いと云ふ心の無い者は有るまい。日の出神の生宮だ

つて矢張名譽も欲しい、手柄もしたい、これが偽らざるネットプライスの告白だ。

皆の者共、それに間違ひはあるまいがな、オホ、々、々、」

一同「エ、さうですかいな」

と「のか」ず觸らずのやうな、「あぢ」な味噌を嘗めた時のやうに、せう事なし

に冷淡な返事をして居る。一天俄に墨を流せし如く掻き曇り、星影さへ見えなく

なつた。忽ち吹き來る颯風に山嶽の如き浪立ち狂ひ、玉能丸を毬の如くに翻弄し

始めた。何時の間にか船は淡路島の北岸近く進んで居たと見え、島の火影は幽か

に瞬き始めた。高姫は其火光を目當に船を漕げよと嚴命する。四人は最早兩腕共

萎へて櫓權を操縦する事が出来なくなつて居た。船は忽ち暗礁に乗り上げたと思

え、船底はバリバリ、パチパチパチ、メキメキメキと大音響を立てて木端微塵となり、高姫以下は荒波に吞まれて仕舞つた。

玉能姫は甲斐々々しく襷十文字に綾取り、艫を操りながら高姫が後を追ひ進み来る折しも、俄の颯風に遇ひ淡路島の火影の瞬きを目當に辛うじて磯端に安着し、夜明を待つ事とした。風は歇み雲は散り、忽ち紺碧の空に金覆輪の太陽は、山の端を覗いて海面に清鮮なる光を投げ、鷗の群は嬉々として東西南北に浪の上を翱翔して居る。漁夫の群と見えて四五の小さき帆掛船は遙の彼方に見えつ隠れつ太陽に照されて浮いて居る。

玉能姫は東天に向ひ祝詞を奏上する折しも、傍より呻吟の聲が聞えて来る。怪しみながらよくよく見れば、波に打ち上げられた五人の體、人事不省の態にて「ウンウン」と唸り聲のみ僅に發して居る。近より見れば、高姫一行であるに打驚き、色々と介抱をなし鎮魂を修し、魂寄せの神言を唱へ漸う五人を蘇生せしめた。玉能姫は高姫の背を擦り乍ら、玉能姫「確りなさいませ。氣が付きましたか」

と優しき聲にて勞はる。高姫は初めて氣がつきたるが如く、

高姫「ア、何れの方が存じませぬが、危い所をお助け下さいまして有難う御座います。是と云ふのも全く日の出神様が、貴女にお憑り遊ばして助けて下さつたのに違ひありません。ア、外の者は何うなつたか」

玉能姫「高姫様、御心配なされますな、皆妾が御介抱申し上げ、漸う氣がつきました。大變なお疲れと見えて横になつて此處に居られます」

高姫「妾の名を知つて居る方は何れの御人だ」
とよくよく見れば玉能姫である。

高姫「ヤアお前は玉能姫かいナア、ようまア來られました。夜前の荒浪に唯一人船を操つて、この大海原を渡るなどは偉い度胸の女だ。さうしてお前は妾を助けて、高姫の頭を押へる積りだらうが、さうはいけませぬぞえ」

玉能姫「イエイ工滅相な事、どうして左様な野心を持ちませう。どこ迄いても玉能姫は玉能姫、高姫は高姫で御座いますもの」

高姫「何と仰有る。玉能姫は玉能姫と云うたぢやないか。要するにお前は、

私は私と云ふ傲慢不遜なお前の了見、弱味に付け込んで同等の權利を握つたやうな其口吻、どうしても日の出神は腑に落ちませぬ。お前に助けて貰うたと思へば結構なやうなものの、餘り嬉しうも無いやうな氣が致しますワイ。オ、さうぢやさうぢや、日の出神様が玉能姫の肉體を臨時道具にお使ひなさつたのだ。……ア、日の出神様、よう助けて下さいました。玉能姫の如き曇り切つた身魂にお憑り遊ばすのは、竝大抵の事では御座いますまい。御苦勞様お察し申します。……コレ玉能姫、唯今限り日の出神様はこの生宮へ憑り替へ遊ばしたから、決して決して此後は私の眞似をして日の出神の生宮だなんて、そんな野心を起してはなりません。チツト嗜みなされ」

玉能姫「何は兔もあれ、日の出神様のお蔭で大切な生命をお助かり遊ばして、お目出度う御座います」

高姫「そりや貴女、嘘でせう。死ねば良いのに何時迄もガシヤ婆が頑張つて夫婦の仲を邪魔を致す奴、お目出度いと云ふのは口先許り、眞實の心の底は大きにお目出度うありますまい、オホ、、、」

玉能姫「それは何と云ふ事を仰有います。暴言にも程があるぢやありませんか」

高姫「定つた事よ。言依別の教主や空助等と腹を合せ、此生宮に蝟の揚壺を喰は

せ、面目玉を潰させ、高姫を進退維れ谷まる窮地に陥れたお前、どこに私が助か

つたのが目出度いと云ふ道理が御座んすかいな。阿諛諂佞、巧言令色至らざる無

き貴女方には、高姫も心の底よりイヤもう感心仕りました。それだけの悪智慧が

廻らねば大それたあんな大望は出来すまい」

玉能姫「妾が此處へ來なかつたら、貴女は既に生命の無い處ぢやありませんか。

生命を助けられ乍ら、餘りと云へば餘りのお愛想盡かし、妾も實に感心致しまし

た」

高姫「それはお前何と云ふ口へびらたい」事を云ふのかい。天道は人を殺さずと

云つて、日の出神様の生宮、どんな事があつても神様が救ひ上げてお助けなさる

のは必定だ。萬々一此高姫が溺れて死ぬ様な事があつたら、それこそ三千年の變

性男子のお仕組が薩張水の泡になつて仕舞ふぢやないか。此世の中を三角にしよ

うと四角にしようとして餅にしよと團子にしようとして、自由自在に遊ばす大國治立大

神様は、そんな不利益な事を遊ばす筈がない。假令お前が来なくてもあれ御覽なさい。澤山の漁船が浪の上を往來して居るぢやないか。世界に鬼は無いと云ふ。見ず知らずの赤の他人でも人が困つて居れば助けたうなるものぢや。人を助けた時の愉快さと云うたら譬方の無いものだ。お前さまは赤の他人とは云ひ乍ら矢張り曲りなりにも同じ神様のお道の懐にくつついて居る蝨のやうなものだ。蝨の分際として、靈界物語第五卷の總説ぢやないが、廣大無邊の大御心が分つて耐りますかい。暫しの間でも私を助けてやつたと夢見たときの愉快さは、何とも云はれぬ感がしただらう。假令刹那の愉快でも此高姫があつたらこそ、そんな結構な目に遇うたのだ。サアサア早く日の出神の生宮に感謝なさいませ。ア、神様はお恵が深いから、こんな玉隠しの身魂にさへも喜びを與へて下さるか。思へば尊い御神力の強い日の出神様。空助や玉能姫に守護して居る神様は、此高姫に對し一度も束の間も嬉しいと云ふ感を與へて呉れた事はない。その筈だ、何を云うても素盞鳴尊の惡の一番醜い時の分靈が守護して居るのだから、注文するのが此方の不調法だ、才ホ、ホ、ホ、」

とそろそろ元氣づいて來るに従ひ、再び意地くねの悪い事を捏ね出したり。

玉能姫「貴女、船はどうなりました」

高姫「オホ、船が残る位なら誰人が海へ「はま」るものか。お前も思ひの

外智慧の足らぬ事を云ひなさるな。あの船にはエラさうに玉能丸と印が入れてあ

つたが、決してお前の船ぢやありません。三五教の神様の御用船だ。それを僭

越至極にも自分の船のやうに思ひ、玉能丸なんて記した所を見れば、心の中には

既に既に船一艘竊盗して居つたのだ。お前併し乍らこれも神様の深いお仕組かも

知れませぬ。玉能姫の名のついた船が暗礁に衝突かつて木つ端微塵になつたと思

へばオホ、心地よい事だ。この船がお前の前途の箴をなして居るのだ。餘

り慢心をして我を張り通すと又此船のやうに暗礁に乗り上げ、破滅の厄に遇はね

ばなりません。大慈大悲の日の出神が氣をつけて置くから云ふ中に改心をなさ

らぬと、トコトンのどん詰りになつて地團駄踏んでも後の祭、誰も構うては呉れ

ませぬぞエ。コレコレ貫州、皆々好い加減に起きて來ぬかいな、男の癖に何

を弱つて居るのだ」

貫州「いやモウ餘り感心致しまして立つ事が出来ませぬワ。ナア鶴公、お前も感心しただらう」

鶴公「さうともさうとも、四人共揃つて感心した。生命を助けて貰うて置きながら、竹篋返しの能辨には俺達も開いた口が塞がらぬワイ。ナア玉能姫様、貴女の御精神には心から感心致しました。ようマア生命を助けて下さいました。お腹が立ちませうが狂人の云ふ事だと思つて何卒勘辨してやつて下さいませ。海の向ふに須磨の精神病院が御座いますから、其處へお頼み申して監禁して貰ひますから、どうぞそれ迄御辛抱を願ひます。生命の親の玉能姫様、ア、惟神々々」

高姫「コラコラ鶴、貫、何を云ふのだ。生神様に對して狂人とは何と云ふ不心得の事を云ふのだ。そんな事を申すと今日限り師匠でもないぞ、弟子でもない。破門するからさう思へ」

鶴公「捨てる神もあれば拾ふ神もある。世の中はようしたものだ。私は唯今限りお前さまに愛憎が盡きたから、玉能姫様のお弟子にして頂きます。否々生命の親様、孝行な子となりて盡します。高姫さま、長らく御心配をかけさして下さいま

した。私も是で四十二の厄被ひ、家内中綺麗薩張煤拂ひをしたやうな気分になり
ました。」

高姫は面を膨らし目を剥いて睨み付けて居る。

玉能姫「四人のお方、貴方方は何處迄も高姫様の御教養をお受下さいませ。妾は
他人様の弟子を横取りしたと云はれましては迷惑で御座います。断じて弟子でも
なければ親子でもないと思つて下さい。」

鶴公「そりや貴女御無理です。何と仰有つても私の心が高姫様を離れて、貴女に
密着して仕舞つたのだから、何彼の因縁と諦めて下さいませ。お許しなくば貴女
に助けて貰うた此生命、綺麗薩張り身を投げてお返し致しますから。」

玉能姫「貴方方のお心はよく承知致しました。併し妾を助けると思つて断念して
下さい。それよりも一時も早く妾の船に高姫様をお乗せ申して歸りませう。」

一同「ハイさう致しませう。」

と言葉を揃へて頷く。

高姫「お前等は御勝手に乗つて歸りなさい。私は玉能姫に助けられる因縁が無い

のだから。あの通り澤山の船、此處に待つて居れば何處かの船が來う。それに澤山の賃銀を與へれば何處へでも乗せて往つて呉れるから、お節惚けのお前達はどうでも勝手にするがよいワイのう。私は一つの目的を達する迄歸らないから、お前達は玉能姫と一緒に歸りなさい」

鶴公「ア、こんな目に遇つても貴女は矢張り執着心が退かぬと見えますな。家島とか神島とかへ行つて寶を呑んで來る積りでせう」

と聞くより高姫は癩聲を張り上げ、

高姫「構ふな、お前達の知つた事かい」

と嘸鳴りつけた。

此時一艘の漁船矢を射る如くに此場に寄り來り、

船頭「夜前は大變な暴風雨だつたが、茲に一艘の船が毀れたと見えて板片が残つて居る。大方お前等は難船したのだらう。サア私の船に乗つて向ふへ歸らつしやい、賃銀は幾何でもよいから」

高姫「ア、流石は神様だ。お前は偉いものだ。サア私を乗せて下さい。賃銀は幾

何でも上げるから」

船頭「見れば此處に船が一艘着いて居るが、是は誰の船だな」

高姫「あれかいな、あれは此處に居る連中の船だ。最前から乗せて呉れと云つて

頼んで居るのに、根っから乗せてやらうと云はぬのだ。エグイ奴があればあるも

の。……よう来て下さつた。サア乗せて貰はう」

船頭「サアサア乗つて下さい。コレコレお前さま達、なぜこの婆アを乗せてやら

ぬのだ。腹の悪い男だなア」

鶴公「船頭さま、この婆アは一寸氣が違つて居るから何云ふか分りませぬ。最前

からこの船に乗りなさいと云ふのに、自分から乗らないと頑張つて、駄々をこね、

あんな事を云ふのだから仕方が無い。お前さま、要心して須磨の精神病院へでも

送つてやつて下さい。途中海へでも飛び込むと大變だから、綱かなんかで、「が

んじ」搦めに縛つて船の中の荷物で押へて置かぬと耐りませぬぜ」

高姫「こりや鶴、恩知らず奴、何と云ふ事を云ふのだ」

と睨め付け、

高姫たかひめ 「サア船頭せんどうさま、早くはややつて下ください。サア早くはや早くはや早くはや早くはや」

船頭せんどう 「ハイ、左様さやうなら何處どこへでもお供致ともいたしませう」

と、艦ろを取りと、西にしに向つて漕こいで行く。

玉能姫たまのひめは四人よにんの男をとこを吾船わがふねに乗のせ、自らみづか艦ろを操あやつりながら高姫たかひめの船ふねを目蒐めがけて追おうて往ゆく。

(大正一一・六・一二 舊五・一七 加藤明子録)

第一二章 家島探えじまさがし (七二四)

負まぬ氣き強つよき高姫たかひめは

折をりから漕こぎ來る漁夫船れふしぶね

是これ幸さいひと飛とび乘のりて

海うみの底そこより尚なほ深ふかき

執し着ふちやく心しんに驅かられつつ

三みつの寶たからの所在ありかをば

諸越山の果て迄も 探し當てねば措くものか
假令蛇となり鬼となり 屍は野べに曝すとも
海の藻屑となるとても 此一念を晴らさねば
大和魂が立つものか 日の出神の生宮と
自ら謳うた手前ある 愈實地を嗅出して
日の出神の神力を 現はし呉れむと夜叉姿
髪振り亂し海風に 身を梳り荒浪を
乗り切り乗り切り漸くに 高砂沖にと着きにける。

船頭 『もしもしお客さま、右手に見ゆるはあれが有名な高砂の森、それから續いて石の寶殿、曾根の松の名所、如何です、一寸彼處へお寄りになつては』
高姫 『や、妾はそんな事どころぢやない。一時も早く家島迄行かねばならぬのだ。お前、御苦労だが何卒氣張つて一刻でも早く漕つて下さい。それぞれ後から今の五人の悪黨者が追ひ驅て来る。追ひ付かれては大變だからなア』

船頭「儂も力一杯漕いで居るのだが、何と云うても向方は五人だから、交る交る身體を休め以て来るのだから旨いものだ。然し乍ら儂も此界限にては艫では名を賣つたもの、船頭の東助と言へば名高い者ですよ。其代り賃銀は他人の三人前拂うて貰はねばなりません」

高姫「三倍でも五倍でも十倍でも構ふものか。一步でも早く着きさへすれば拂つてやる。然し一步でも後れる様の事があつては矢張三人前ほか拂ひませぬぞや」

東助「有難う、それなら是から一氣張り致しませう。何程上手な者でも此東助に

は叶ひませぬからな」

と捺鉢巻を締め浸黒い膚を出して凧に向ひ汗を流し乍ら、一層烈しく艫を漕出した。

高姫「これこれ、船頭さま、左手に饅頭の様な島が浮いて居るが、あれは何と言ふ島だい」

船頭「あれですか、あれは瀬戸の海の一つ島と言ひ神島とも言ひましてな、それはそれは恐ろしい島ですよ。昔から私の様な船頭でも寄りついた事は無いのです

から
」

高姫 「あの島へ去年の五月の五日に船を漕いで行つた女があるだらう。お前、聞いて居るだらうなア」

東助 「滅相も無い事仰有いますな。常の日でさへも彼の島へ船は着きませぬ。況して五月五日と言へば神島の神様が高砂の森へお渡り遊ばす日だから、船頭は總休みです。此邊一帶は昔から五日の日に限つて船は出させぬ。萬一我慢をして船を出さうものなら、忽ち船は顛覆し生命をとられて仕舞ふのだから、何處の阿呆だつて、そんな日に船を出したり恐ろしい神島などへ渡りますものか」

高姫 「あの島には何か寶物でも隠してある様な噂は聞きはせぬかな」

東助 「澤山の船頭に交際して居ますが、そんな話の氣位も聞いた事はありませぬワ
イ。神様の話を言つても海が荒れると言ふ位だから、もう此話は是きりにして下

さい
」

高姫 「さうかなア、矢張さうすると家島に違ひない。さア早く頼みます」

東助 「承知しました」

と一生懸命、向う風に逆らひつつ漸く家島の岸に着いた。

高姫「あゝ御苦勞だつた。流石は東助さま、よう早う着けて下さつた。お禮は澤山に致しますぞえ、後からの連中が來ても妾が此山へ登つたと言つてはいけませんぞえ。若しも尋ねたら、高姫は神島に上がらしやつたと言つてお呉れ、屹度だよ」

東助「はい、承知致しました」

高姫はパタパタと忙がしげに老樹こもれる山林の中に姿を隠して仕舞つた。東助は只一人舷に腰を掛け松葉煙草をくゆらして居る。

半時ばかり経つと、玉能姫の一行を乗せた小船は矢を射る如く此場に寄り來り、玉能姫「あ、お前さまは高姫さまを乗せて來た船頭さま、まア御苦勞で御座いましたな。高姫さまは此山へお登りでしたか」

東助「え……その……何で……御座います」

と頭をガシガシ掻いて居る。其間に船は岩端に繋がれ五人は上陸した。玉能姫「あなたの乗せた來た女の方は此山へ登られましたか」

東助「はい、登られたか、登られぬか、つい……晝寝をして居つたものですから根っから分りませぬ。貴女等が若し此處へおいでになつてお尋ねになつたら、神島へ行かしたつたでせう」

鶴公「ハ、ハ、ハ、何と齒切れのせぬ、どつちやへも付かずの答だな。一體船頭さま、お前は神島へ寄つたのかい」

東助「滅相も無い、誰があんな所へ寄せ着けますかい」

鶴公「そんなら、如何して高姫さまが神島へ寄つたのだ、實の處は此家島へ着いたのだけれど、神島へだと言つてスコタンを喰はして呉れと頼まれたのだらう。

それに違ひない。お前は船頭に似合はず腹の黒い者だな」

東助「何を言つても金のもの言ふ世の中ですからな。船頭だつて金儲けは矢張大切ですワイ」

鶴公「ハ、ハ、ハ、分つた分つた、てつきり此島だ。玉能姫様、さア早く登りませうか。貴女の大切な寶を掘り出して吞まれて了はれちや大變ですぜ」

玉能姫「それもさうですが、餘り慌るには及びませぬ。探すと言つたつて是だけ

廣い島、さう容易に見當るものぢやありませんわ、まア一服致しませう」

貫州「玉能姫様の仰有る通り慌るには及ばぬぢやないか。高姫は高姫で勝手に探

すだらう、一日や二日歩いたつて探しきれぬものぢやないから。まア、玉能姫様、

先づゆつくりとさして貰ひませう。随分疲勞れましたから」

玉能姫「あ、さう爲さいませ。私は寶の所、寶の所在は存じませぬ。只一度手に

觸れた計り、後は龍神様が何處かへお隠しなされたのですから……此廣い世界の

何處かの島に隠してあるのでせう。妾が此處へ追つ驅てきたのは、高姫様のお身

の上を案じ、お氣が違つては居らぬかと、宣傳使として「まさか」の時に助け

申さうと思つて來たのですから、斯んな危い山に上るのは止しませう。まアまア

木蔭へでも這入つて、風の當らぬ暖い處で日向ぼつこりを致しませう」

と先に立ち二三丁山を登り、日當りよき處にて休息する。見れば非常に大きな清

水を漂はした池が展開して居る。

鶴公「何と好い景色で御座いますな。こんな高い山に大きな池があるとは思議

ですわ」

玉能姫「此處は陸の龍宮かも知れませぬな」

東助「此島には斯んな小さい池だけぢやありません。山の頂上にも中程にも大變

大きな深い池があつて、底知らずぢやと言ふ事です。實に不思議な島ですわ。此

廣い島に昔から誰一人住んだ人がないのも一つの不思議、何でも大きな大蛇が出

て来て、人の臭がすると皆呑んで仕舞うといふ噂ですから、誰だつて、此處に住

居する者はありません」

貫州「さうかな、随分恐ろしい所と見えるわい。斯んな所に一人放かして置かれ

たら堪るまいなア」

清公「そりや、さうとも。誰だつてやりきれないわ」

色々雑談に耽り一時ばかり光陰を空費した。

貫州「さア玉能姫様、高姫さまは屹度此山の頂上さして登られたに違ひありませ

ぬ。寶を先に掘り出し吞まれて仕舞つては大變ですから、ポツポツと出掛けませ

うな」

玉能姫「妾は少し足を痛めましたから、此處に休んで待つて居ます。何卒御苦勞

だが貴方等五人連れ行つて下さい」

貫州「いや、それはなりませぬ。もう斯うなれば本音を吹くが、吾々は絶対に高姫崇拜者だ。こりや、お節、斯うなる以上はジタバタしても「あか」ないぞ。綺麗薩張と玉の所在を白状致せ。四の五のと吐すが最後、此池へ岩を括り着け、四人の荒男が放り込んで仕舞ふが如何だ」

玉能姫「今更そんな啖呵をきらなくても、淡路島より船を出した時から、高姫と八百長喧嘩をし、目と目と合圖をして居たでせう。そんな事の分らぬ玉能姫です

か。そんな嚇し文句を竝べたつて迂闊と乗る様な不束な女とはチツと違ひますぞ。纖弱き女と思ひ侮つての其暴言、此玉能姫は斯う見えても若彦が妻、教主言依別

命様より御信任を辱ふした抜目のない女です。お前さん等の五人や十人が何程揆鉢巻をして氣張つた處で何になりますか。ウンと一聲、靈縛をかけるが最後、氣

の毒乍ら萬劫末代動きのとれぬ石地藏になつて仕舞ひますよ。それでも御承知なら、何なりと試みにやつて御覽」

貫州「あゝ仕方の無い女だなあ」

鶴公つるこう「もしもし玉能姫様たまのひめさま、嘘言うそですよ。貫州くわんしゅうはいつもあんな狂言きやうげんをやつて空威張からゐばりをする癖くせがあるのです。アハ、ハ、ハ、ハ、」

東助とうすけ「何だなん、お前達まへたちは山賊さんぞくか知らぬと思つたら、此山中このさんちゅうで氣樂きらくさうに芝居しばゐをしてゐるのか、随分ずぶん下手へたな芝居しばゐだなア」

玉能姫たまのひめ「何でも宜よろしいよ。之これから高姫たかひめさまに會あうて玉たまの所在ありかでも知しらして上げませうかな」

貫州くわんしゅう「やア流石さすがは玉能姫様たまのひめさまぢや。實じつに立派りつぱな御精神ごせいしん、貫州誠くわんしゅうまことに感服かんぷく仕かまつりました。

宣傳使せんでんしはさうでなくては往ゆきますまい。堅かたいばかりが女をんなぢや御座ございませぬ。ま

アよう其處そこまで打解うちとけて下くださいました。貴女あなたがさう出でて下くだされば、敵てきもなく味方みかた

もなく三五あななひけう教まますは益々ますます天下てんか泰平たいへい、大發展だいはつてんは火ひを睹みる如ごとく明あきらかで御座ございます。さア玉

能姫様のひめさま、お手てを引ひいて上げませうか。……おい清公きよこう、貴様きさまはお腰こしを押おしてお上げ

申まをせ。俺おれはお手てを引ひいて此急坂このきふはんを登のぼるから」

玉能姫たまのひめ「ホ、ハ、ハ、ハ、年寄としよりか何ぞなんの樣やうに如何いかに女をんなの身みなればとて、これしきの山やま

が苦くるしうて如何どうなりますか。何卒どうぞお構かまひ下くださいますな。さアさアお先さきへお上あがり下くだ

さい。妾は一番後から参ります」

貫州「いや、さうはなりません。高姫さまの御命令ですから……オツトドツコイ

……そりや嘘言だ。中途に逃げられては虻蜂とらずになつて仕舞ふ。あゝ迂闊副

守の奴、囁來よつた。もしも玉能姫様、此奴ア皆私に憑依してる野天狗が混ぜ

返すのだから、お心に觸へて下さいませぬ」

玉能姫「靈肉一致の野天狗様が仰有つたのでせう、ホ、ホ、ホ、左様なれば貴方等

の御心配成さらぬ様に眞ん中に参りませう。玉能姫が逃げない様に十分御監督な

されませ」

貫州「別に貴女を監督する必要もありません、悪い所へ氣を廻して貰つては困り

ますよ」

玉能姫「何れそちらは高姫様を加へて荒男や神力の強い方が六人、此方は一人、

到底衆寡敵しますまい。一層の事此池へ飛び込んで死にませうかな」

鶴公「それは何と云ふ事を仰有るのだ。死ぬのはお前さんの勝手だ。然し乍ら此

方が困る、寶の所在を白状した上では死ぬるなつと生るなつと勝手になされ。そ

れ迄はどうかあつてもお前に死なれては高姫さまの願望が成就致しませぬから、何程死なうと蹴いたつて、斯う五人の荒男が付いて居る以上は駄目ですよ。觀念なさいませ、あゝ然し乍ら可惜美人を死なすのも勿體ないものだなア」

玉能姫「それでお前さま達の腹の底はすつかり分りました。妾にも覺悟がある」と言ふより早く後から跟いて来る三人を苦も無く突倒し、急坂目蒐けて韋駄天走りに元來し道へ降り来る。五人は捺鉢巻を締め乍ら、

五人「オーイ、玉能姫、待つた、逃がして堪らうか、おいおい皆の奴、彼奴が船に乗る迄に引つ掴まへねばなるまい。さア急げ急げ」

と一生懸命に追つ驅ける。玉能姫は阿修羅王の如く髪振り亂し、血相を變へて力限りに下り来る。道の眞ん中に大手を擴げて立ち現はれた一人の婆は高姫であつた。

高姫「オホ、〳〵、到頭高姫の計略にかかり此島まで引摺り廻されて來よつた。いい馬鹿者だな。さアもう斯うなる以上は何程蹴いても駄目だ。何處にお寶を隠したのか、神妙に白状するが宜い。此期に及んで愚圖々々言ふなら、お前の生命

でもとつて仕舞ふまいものでもない。此高姫の身の上にもなつて見て貰ひ度い。いい年をして、お前の様な若い女や初稚姫の様なコメツチヨに馬鹿にいられて、如何して世の中が歩けませうぞ。賢相でも流石は若い丈けあつて、肝腎の知慧がぬけて居る。さア如何ぢや、玉能姫、もはや否應はあるまい」
玉能姫「オホ、何處までも疑ひ深い譯の分らぬ方ですこと。知らぬ事は何と仰せられても知りませぬ。假令首が千切れても言はぬと云つたら言ひませぬから、其心組で覺悟遊ばせ」

斯く争ふ處へ五人の男、地響き打たせ乍ら此場にドヤドヤとやつて來た。玉能姫の身邊は危機一髪に迫つて來た。流石の玉能姫も進退谷まり如何はせむと案じつつ一生懸命に「木花姫命助け給へ」と祈願を籠めた。忽ち四邊は濃霧に包まれ咫尺を辨ぜず、恰も白襖を立てた如く見えなくなつて仕舞つたのを幸ひ、玉能姫は少しく道を横にとり、あと振り返り見れば濃霧は高姫一派の附近に極限され、外は一面の快晴である。玉能姫は神恩を感謝し乍ら磯端に漸く辿り着いた。
玉能姫の消息如何にと案じ煩ひ、虻、蜂の兩人は一艘の船を操り乍ら、丁度此

場ばについた所ところである。

玉能姫たまのひめ「ア、お前はまへ蛇あぶ、蜂はちの兩人りやうにん、よう来てき下さくだつた。話はなしはまア後あとでゆつくりし

よう

蛇公あぶこ「何卒どうぞ此船このふねに乗のつて下ください」

玉能姫たまのひめ「いえいえ妾わたしは乗のつて來た船ふねがある。一人ひとりで操あやつつて歸かへりますから、お前まへさ

まは其儘そのま妾わたしに従ついて歸かへつて下ください」

と言いふより早はやく船ふねに飛とび乗のり、高姫たかひめの乗のり來きたりし船ふねの綱つなを解とき放はなち、波なみのまにま

に漂ただよはせ置おき二艘にそうの船ふねは矢やを射いる如ごとく再度山ふたたびやまの麓ふもとを指さして歸かへり行ゆく。

(大正一一・六・一二 舊五・一七 北村隆光録)

第一三章 捨小舟すてをぶね〔七二五〕

高姫たかひめ一行いっかうを包つつみたる濃霧のうむは、暫しばくにして消散せうさんし、四邊あたりは元もとの如ごとく明あかるくなつて

来た。玉能姫の行衛は如何にと、高姫以下血眼になつて探し廻せど、何の影もな
く終には、船着場迄一行ゾロゾロやつて来た。見れば玉能姫の乗つて来た船も高
姫の船もない。高姫は地團太踏んで口惜しがり、
高姫「ア、残念、口惜しやな、お節の奴、濃霧を幸ひに三つの寶を掘出し、船に
乗つて逃げ歸つたか。それにしても残念なは船迄どうやら持つて歸つたらしい。
まるで島流しに遭はされた様なものだ。……コレコレ東助さま、第一お前が氣が
きかぬからだ。船頭は船にくつついて居れば好いのに、職責を忘れて宣傳使の様
に山に登つて来るものだから、こんな目に逢うたのだ。サアどうして下さる」
東助「どうして下さるもあつたものかい。大切な商賣道具を盗られて仕舞つて手
も足も出し様が無い。歸る譯にも行かず、第一お前が此んな所へ謀反を起して遣
つて来るものだから、神罰が當つたのだ。サア俺の船をどうして呉れる」
高姫「ヨウマアそんな事が言へたものだ、大切なお客を連れて来ながら、船を盗
られてどうするのだ。大方お節の奴と腹を合はし、日の出神を斯んな所へ押込め
る計略をして居つたのだらう。油斷も隙もあつたものだ無い」

東助は大いに怒り、

「女と思ひ柔かく申せば、無體の難題、此東助は貴様の如き悪人ではない。正直一方の名の通つた船頭だ。男の顔に泥を塗り居つたなア。モウ量見致さぬ覺悟をせい」

高姫頤をシヤクリ乍ら、

「オホ、何程力が強くて、此方は五人、お前は一人、到底駄目だよ。それよりも綺麗薩張白状したらどうだ」

東助「白状せいと云つたつて知らぬ事が白状出来るかい。餘り馬鹿にするない」

高姫「オホ、アノ白つぱくれようわいのう。知らぬかと思つてツベコベと其辨解、餘人は知らぬが、人の心のドン底迄見透かす御神力の高い、日の出神を誤魔化さうとはチツト蟲が好過ぎるぞ。お前は玉能姫にいくら金を貰うた。うまい事をやつたな」

東助は餘りの腹立たしさに、物をも言はず唇をビリビリ振はせ、拳を握り無念の涙に暮れて居る。高姫は、

「さうだらう、言ひ譯があるまい。何程辨解を巧に致しても、神の前では言靈は使へまいがな。お前も大勢の前で化けの皮をむかれ残念であらうが、それが自業自得だ。つまり己が「あざのう」た繩で己が首を絞たも同然、ほんにほんに可愛相なものだ。悪の企みは到底成就せぬといふ事が分つただらう。淡路島で難船した時に時間を見計らひ、ノソノソ遣つて来て此高姫をだまし込み、甘くやらうと考へたのも水の泡、忽ち日の出神の眼力に看破され、其態は何んだ。大きな男の癖に、メソメソと吠面かわき見つともない。何れは玉能姫と同類だから、玉の隠し場所も知つて居る筈だ。どうだお前、玉能姫は玉を持つて歸つたであらうがな」

東助は口許を痙攣させ乍ら、

東助「シ、知らぬワイ、バ、馬鹿にするな」

と漸う奇數的に癩聲を出して呶鳴つた。

高姫「シ、知らぬぢや無からう。シ、しぶといワイ。バ、馬鹿にするないと言つたが、お前の方から日の出神を馬鹿にしよとかがかかつて馬鹿を見たのだから仕方があるまい」

貫州「モシモシ高姫さま、肝腎の船が無くては、どうする事も出来ないぢやありませぬか。そんな話は次の次にして、先決問題として船の詮索から掛らなくては、我々安心が出来ないぢやありませんか」

高姫「オホ、お前は年が若いから心配するのだが、玉能姫の同類東助の居る以上は屹度人を替へて、素知らぬ顔して船を持つて来るに違ひない。其時は手早く東助奴其船に飛び乗り、一目散に逃げ歸る計略、今度船が來たら必ず必ず東助を放してならぬぞ。此奴が乗つたら此方も一緒に歸るのだから、お前等四人は此奴の見張りをして居つて呉れ。そうして船が來たら此中から一人妾を迎ひに来るのだ。それ迄船も船頭も取つ捉まへて放す事ならぬぞや」

と云ひ捨て山上目蒐けて足早に登り行く。後に五人の男は磯端に座を占め、廣き海面を眺めて呆氣た様な顔をして居る。東助はやうやう心柔いだと見えて、そろそろ喋り出した。

東助「オイお前達、俺を高姫とやらが言つた様な悪人だと思ふのか。俺は肝腎の商賣道具を盗られて仕舞ひ、其上に思はぬ難題を吹き掛られ、こんな引合はぬ事

はあつたものぢやない。本當に災難と云ふものは何時來るか分らぬものだワイ」
貫州「俺も別にお前を悪人の様には思はぬが、高姫の大將がアー言ひ出したら全然り氣違ひだから、メツタに口答へは出來ないので黙つて辛抱して居たのだが、お前の様子といひ顔色と云ひ、全く玉能姫と腹を合はして居る様な男でないと思ふ」

東助「ア、好う言うて呉れた。それで俺も一寸安心した。皆さまは如何いふ御感想を持つて居られますか、腹藏なく言つて下さい」

三人一度に、

「貫州の云つた通り、どうもお前が悪いとは思はれないよ。本當にエライお災難だ、御同情申し上げる。何分あの大将はあの通りだから困つてしまふ。玉能姫が逃げて歸ぬ際に、船を何處かへ流し居つたのは憎らしいが、併し乍ら今高姫に捨てられては鼻の下は忽ちだからなア」

東助「皆さま、そんな心配は要らないよ。私は淡路島の者だが、お前方の三人や五人は幾日遊んで食つて居つても、滅多に俺の家は潰れはせぬ。斯うして俺は船

頭どつが好きすでやつて居をるもの、淡路島あはぢしまで第一等だいいちとうの物持ものもちの主人公しゅじんこうだ。様子やうすあつて船せん頭どつはして居をるが普通ふつうの駄賃だちん取りの船頭せんどうとはチツと違ちがふのだ。お前まへの身みの上うへは俺おれが引受ひきうけてやるから心配しんぱいするな」

鶴公つるこう「それは有難ありがたい、然しかし本當ほんたうか」

東助とうすけ「本當ほんたうでなうて何なんとせう。昔むかしから正直者しやうぢきものの名なを取とつた東助とうすけとは俺おれの事ことだ。男をとこが假かりにも嘘うそを言いへるものかい」

鶴公つるこう「さう聞きけばさうかも知しれぬな」

と話し居をる所ところへ風かぜの吹ふき廻まはしにて一旦いつたん沖おきへ流ながされて居ゐた東助とうすけの持船もちぶねは、ダンダンと此方こなたに向むかつて近ちかづいて來くるのが目めに付ついた。東助とうすけは手てを拍うつて、

東助とうすけ「ア、嬉うれしい、風かぜのお蔭かげで流ながれて居をつた船ぶねが、ドウヤラ此方こちらへ流ながれて來きさうだ。皆みなさま、喜よろこびなさい」

四人よにんは立たつて海面かいめんを眺ながめながら、風かぜに吹ふかれて近ちかより來きたる船ぶねを見みて、思おもはず手てを拍うち「ウローウロー」と叫さけび居ゐる。

東助とうすけ「最早もはや此方こつちのものだ。俊寛しゅんくわんの島流しまながしも、ドウヤラ赦免しやめんの船ぶねが來きた様やうだ。サア

兔も角歸らねばなるまい。此んな處に長居をして居れば、又最前の様に濃霧に包まれ神罰を蒙るか分つたものではない。……これ貫州さま、早く高姫さまを呼んで来て下さい、船の用意をするから」

貫州「オイ鶴公、清公、武公、確り船を捉まへて東助さまを氣を付けよ。俺は急いで大將を呼んで来るから」

東助「アハ、ハ、ハ、滅多に逃げて歸りも致さぬ。安心して此山中を探して來なさい。待つて居るから……併し我家に歸つて……」

と小聲にて後を付けた。貫州は一目散に勇んで高姫に報告す可く森林へ上り行く。船は磯端に漸く寄つて來た。東助は拍手しながら、

東助「ア、ハ、ハ、船神様、有り難う御座います。サアサ三人の方々乗つたり乗つたり」

鶴公「高姫さまと貫州はまだ見えませぬから、一寸待つてやつて下さいな」

東助「待つてはやるが家に歸つて待つ事にせう。サア乗つたり乗つたり」

鶴公「ハ、ハ、ハ、ハ、矢張兩人は島流しだな。ア、それもよからう。何分にも日の出神が憑いて御座るから滅多な事はあるまい。マアとつくりと御修業が出来てよ

からう」

と云ひ乍ら四人はひらりと船へ飛乗り、艦をギクギクと漕出し始めた。猜疑心深

き高姫は最前より、傍の森林に身を潜め、一同の話を窺ひ聞いて居たが、コリヤ

大變と貫州を誘ひながら磯端に走り來り、

高姫「コレコレ東助さま、お前は何處へ行くのだ。妾をどうする積りだい」

東助「何處へも行きませぬ。淡路の洲本迄歸るのだ」

高姫「そら約束が違うぢやないか。チヨツと船を此方へ着けて下さい。妾も乗つ

て歸らねばならぬから、そんなことをなさると今迄の賃銀は拂ひませぬぞ」

東助「賃銀を取つて生活して居る東助とはチツと違ふのだ。私はこう見えても淡

路島第一の財産家だ。船頭は道樂でやつて居るのだから、賃銀などは此方から平

にお斷り申します。金が欲しけりや幾程でも此方からやるワ。マア緩くりと此島

でお二人さま、修業なさいませ」

と又もや艦を漕ぎ出す。高姫は聲限り、

高姫「コレコレそんな無茶な事がありますか。天罰が當りますぞ」

東助「天罰の當つたのはお前ら二人だ。餘り精神が良くないから、修業の爲めに
残して置くのぢやから、有難く思ひなさい。……コレコレ鶴公、清公、武公、お
前達は私の船に助けてやつたのだから、一舉一動、私の云ふ様にするのだよ」

三人は聲を揃へて、

「承知しました、何分宜敷く御指導を願ひます」

貫州「オーイオーイ東助さま、そりや餘りぢや、一遍船を此方へ着けて下さい」

東助は舌をペロツと出す、三人も顔を見合はして同じく舌をペロツと出す。

東助「折角だが今日は荷物が多いからお断り申しませうかい。此上罪の多い人間

が乗ると沈没すると迷惑だからなア」

三人一度に口を揃へて、東助の言葉其儘を繰返す。東助は何の頓着もなく艫を

漕ぎ、聲も涼しく船歌を唄ひながら追々島に遠ざかり行く。高姫、貫州の二人は

磯端に地團太踏んで「オーイオーイ」と呼んで居る。東助は、

(追分)

「家島立ち出で、神島越えて、向ふに見ゆるは淡路島」

(同上)

「誠明石の、海峽よぎり、洲本の我家へ歸ります」

(同上)

「後に残りしお二人の、高姫さまや貫州は、鬼界ヶ島の俊寛か。どうして月日を送るやら」

と唄ふ聲、海風に送られて兩人の耳に入る。二人は狂氣の如く猛び狂ひ騒ぎ廻れども、何んと船影泣く涙、トボトボと力なげに深林の中に薄き影を隠すのであつた。後に残された高姫は捨て鉢氣味になり、芝生の上に身を投げる様に横たはり

ながら、足をピンピン動かし、

高姫「コレコレ貫州、お前は餘程イ、頓馬だな。アレ丈け噛んで呑む様に言うて置いたのに、人の言ふ事を尻で聞き居るから、天罰が當つて、こんな目に逢はされるのだよ。是れから妾の云ふ事を素直に聞くのだよ」

貫州「天罰は御同様だ。貴女も矢張り此んなに置いとけ放りを食はされたのは、何か深い罪があるからでせう。私は貴女の罪の巻添へに逢うたのです。誰を恨め

る所もない、只高姫さまを恨む計りだ

高姫 「誠水晶の日の出神に罪があつて堪りますか。つまりお前の罪の巻添へに遭うたのだ。それだから神様が何時も水晶の身魂は、汚れた者と一緒にお置くと總損ひになると仰有るのだ。これを折にスツパリと改心をなされ。さうして日の出神様に絶體服従をするのだよ」

貫州 「此んな人影もない島に捨てられる様な日の出神さまも、頼りない好い加減なものですなア」

高姫 「お前は何ぞと云うと、直に日の出神の「わざ」の様に云ひなさる。それが第一慢心といふものだよ」

貫州 「貴女の御説教は何時も隔靴搔痒とか言つて徹底せず、恥を搔き、あたまを搔き、人には「靴靴」笑はれ、痛「かゆい」様な氣がしていけませぬワ」

高姫 「動中靜あり、靜中動あり、千變萬化、自由自在の神様の御經綸、蟲の放いた糞にわいた蟲の様な人間が、苟くも天地の御先祖様の御事に對し、ゴテゴテ小言を云ふ資格がありますか。況んや廣大無邊の御神徳の備はり給ふ日の出神の生

宮に於てをやだ。モウ是限り日の出神様に對し、不足がましい事は言はぬが宜しいぞや」

と肩を斜めに揺りながら、四邊の雜草を蹴散らす様な足つきで、ピンピン尻振りつつ坂路を上つて行く。貫州も是非なく二三間遅れて不性無精に従いて行く。高姫は怒り心頭に達し、益々肩をくねりくねりと互ひ違ひに揺り乍ら、見向きもせず山上目蒐けて上つて行く。貫州は後より獨語、

貫州「ア、今年は何んとしてこんな年廻りが悪いだらうか。力に思ふ高姫さまは伊勢蝦の様にピンピンとはねなさる、船には見棄てられる。こらマア何うなるのであらうかなア。∴ア、此處に枝振の好い松の木がニユーツと出て居る。一つ一思ひに徳利結びをやつて、一はねプリンプリンと出掛けやうかな。ア、何うなり行くも因縁だ」

と帶を解き徳利結を拵へ、松の木の枝よりプリンと下つた。此物音に高姫は後振り返り見てびつくりし、周章しく七八間驅戻り、貫州の體軀に取付き、高姫「コレコレ貫州、何といふ短氣な事をして呉れた。此島に放り殘され、力と

頼むお前に死なれては、どうして此高姫がたまらうか。何といふ情ない事をするのだいなア……」

貫州はポイと飛んだ拍子に灌木の枝に足がツンと引つ掛かり、首も締らず少しの痛さも感じなかつた。されど心の内に「エー序だ、高姫の我を折つて遣らねばなるまい」と態と細いイヤらしい聲を出し、
貫州「アア恨めしや、私は高姫様の餘り我が強いので、度々御意見をするのだけれどモチツトも聞いて下さらぬ。夫故死んで高姫さまに意見をするのだ。改心さへ出来たらばまだ死んで間が無いから、直に生き返り再び御用をするのだけだ。改心ども、到底改心は出来ない。ア、高姫様もたつた獨で淋しからう。併し乍らたつた今迎ひに来て上げる程に、必ず心配しなさるなヤア」

高姫は驚いて、

高姫「コレコレ貫幽どの、私が悪かつた。これからもう我を張らぬから、今一遍娑婆に歸つてお呉れ。これこの通りだ」

と手を合せ俯向く途端に、貫州は灌木の枝に兩足共チヨンと止り、首筋を見れば

徳利結はチツトも締つて居ない。ハテ不思議やと首を傾けて居る其間に、貫州は緩やかな首繩をグイと放し、

貫州「ア、高姫さま【よう】改心して下さつた。お蔭で肉體で貴女の御用がさして頂け升」

高姫「アタ呆らしい。お前は狂言をしたのだらう。本當かと思つて肝を潰しかけた。イ、加減な【てんごう】して置きなされ」

貫州「【てんごう】でも何んでもありません。本眞劍でやつたのだが、折悪くか折悪くか知らぬが、足の止まりが出来て遣り損うたのだ。そんなら今度は改めて本眞劍にやりませうか」

高姫は又もヤツンとして、

高姫「勝手にしなされ。お前の命をお前が失ふのだから」

貫州「ハイ有難う。お許しが出来ましたら即座に決行します。其代り最前の様な泣き言は言うて貰ひませぬぜ、迷ひますと困りますからなア」

と手早く松の枝にくくり付けた帯をほどき、再徳利結を拵へ、適當な枝振を探し

て居る。高姫は、

高姫「エーしつかりせぬかいな」

と平手で横面を二つ三つピシヤピシヤとやった。

貫州「アイタ、高姫さま、そんな無茶をなさるな。何を腹が立ますか」

高姫「お前は今死神に憑かれて首を吊つて居つたぢやないか。それだから氣を付

けてやったのだよ」

貫州「へー」

と生返事をしながら顔色をサツと替へ、兩方の手で頸の邊りを、嫌らしさうに撫

で廻して居る。

高姫「ア、今日は何となく氣分が悪い。ササ貫州、磯邊に行つて、廣い海でも眺

めて氣を換へて来よう。又船の一艘も流れて来るかも知れない。ササしつかりし

つかり」

と背を三ツ四ツ叩き、貫州の手を引き山坂を下つて、再元の磯端に歸つて来た。

見れば艫櫂の付いた新しい船が一隻磯端に横付けになつて居る。好く好く見れば

船の中側に「玉能姫より高姫様に此船進上仕ります」と記して在つた。高姫はこれを見て、

高姫「オホ、さすがの玉能姫も日の出神の御神力に恐れ、寢心地が悪くなつたと見えて、こんな新しい船を何處から買求め、そつと此處へ置いて遁げて歸んだのだな。意地くね悪い奴に似合はず、一寸氣の利いた事を遣り居るワイ。サア此船さへあれば何日此島に居つたつて心配は無いが、餘り長らく置いて置くとなれば俄に心が變りあの船が惜くなつたと云うて、取返しに來られては、それこそ此方が取返しのかね縮尻をやらねばならぬから、今日は兔も角此船に乗つて玉の所在を探して來う。どうも此島には在りさうにない。玉能姫の言葉に、龍神が持つて行き居つたと言つた事がある。大方南洋の龍宮島へでも納まつて居るだらう。此島の果物を澤山に積込み兵糧をドンと用意して、神の隨意此船の續く限り、腕力のあらむ限り探しに行く。お前も結構な御用だから、御伴をさして上げるから喜びなさい」

貫州「成る可くなら此お伴ばかりは、除隊にして貰ひ度いものですなア」

高姫「オホ、お前も中々の【しれ】物だ。除隊のない事を仰有るわい」
と果物を數多積込み、高姫は下手ながらも艦を操り、貫州は櫂を使ひながら家島
を後に瀬戸の海を西へ西へと進み行く。

(大正一一・六・一二 舊五・一七 谷村眞友録)

第一四章 籠拔〔七二六〕

洲本の里に名も高き、人子の司東助が留守の門前に佇み、宣傳歌を聲低に歌ふ
一人の宣傳使があつた。下女のお冊は臺所より此聲を聞きつけ、門の戸を開いて
眺むれば、蓑笠、草鞋脚絆の扮装したる、四十恰好の男盛りの宣傳使であつた。
宣傳使はお冊に向ひ、
宣傳使「我れは日頃の經驗上、此館の前を通り見れば、何とはなしに此家には變
事の突發せし如く覺ゆる。汝が家に何事もなきや」

と言葉淑やかに問ひかけた。お冊は少し首を傾け乍ら、

お冊「一寸お待ちを願ひます。奥へ云つて奥様に伺つて参りますから……」

と言ひ残し、其儘姿を隠した。奥の一閒には女房のお百合、火鉢の前にもたれかかり、何事か思案の態であつた。お冊は襖をソツと引あげ、

お冊「奥様々々」

と呼んだ。お百合は何事にか氣を取られしものの如く、お冊の聲が耳に入らなかつた。お冊は恐る恐るお百合の前に「にじ」り寄り、

お冊「モウシ奥様、門口に不思議な宣傳使が立つて居られます。如何いたしませうかなア」

と云ふ聲に、お百合は顔をあげ、
お百合「ナニ、宣傳使が門にお立ちとな。それは都合の好い事だ。一つ伺つて頂

きたい事があるから……どうぞ此方へ通つて貰うて下さい」

お冊「ハイ畏まりました」

と足早に表へ出で、

お册さつ「モシモシ宣傳使様せんでんしさま、奥様おくさまが何か御願おねがひなされたい事ことがあるさうですから、どうぞ奥おくへ御通おとほり下くださいませ」

宣傳使せんでんしは打うち頷うなづきお册さつのあとにしたがひ、草鞋わらぢを脱ぬぎ足あしを洗あらひ、お百合ゆりの居間ゐまに通とほされた。お百合ゆりは座ざを下さがり、宣傳使せんでんしを上座かみざに請しやうじ、丁寧ていねいに頭かしらを下さげ、

お百合ゆり「宣傳使様せんでんしさま、よくこそ御立寄おたちより下くださいました。先まづ御ごゆるりと御休ごきうそく息下くださいませ」

宣傳使せんでんし「私わたくしはバラモン教けうの友彦ともひこと申まをす宣傳使せんでんしで御座ござる。當家たうけの門前もんぜんを通過つうくわ致いたさむとする時とき、何なんとなく氣懸きがかりが致いたしましてなりませぬので、お宅うちには思おもひも寄よらぬ事件じけんが突發とつぱつ致いたして居をる様やうに考かんがへましたから、一寸御尋ちよつとおたづね致いたしました」

お百合ゆり「それはそれは御親切ごしんせつに有難ありがたう御座ござります。實じつの所ところは妾わたしの主人しゅじん東助とうすけと申まをす者もの、二三日以前にさんにちいぜんより何處どこへ参まゐりましたか、皆目行方かいまくゆくへは分わからず、大方此間おほかたこのあひだの颯風しやうふうに、

船自慢ふねじまんの主人しゅじんの事こととて船ふねを操あやつり、荒波あらなみに吞のまれたのではあるまいかと、上うへを下したへ

の大騷動おほさうどう、村中むらぢうの者ものが夫それ夫ぞれ手分てわけを致いたしまして、山林原野さんりんげんやは申まをすに及およばず、近海きんかいを隈くまなく探さがし廻まはれども皆目行方かいまくゆくへが知しれず、生いきて居ゐるのか死しんで居をりますのか、

それさへも分りませぬ。どうぞ神様に一應御伺ひ下さいませまいか」

友彦は近邊の者の騒ぎを見て、遠近の人々に東助の紛失せし事を、前以て聞き

知り、ワザと立寄つたのである、されど素知らぬ風を装ひ乍ら、

友彦「それはそれは御心配で御座いませう。一つ私が伺つて見ませう」

と手を洗ひ口を嗽ぎ、あたりに人無きを見てニタリと笑ひ、舌を出し、

友彦「村人の話に依れば、あれ丈探したのだから、最早生きて居る氣遣ひはない。

ウマクチヨロまかせば、淡路一の財産家、友彦が亭主となり、バラモン教を淡路

一圓に此富力を以て擴張すれば何でもない事だ。あゝ結構な風が吹いて来たもの

だ。併し乍ら萬々一主人が生きて歸つて来たなら大變だが、併し滅多にそんな事は

あるまい。一つ度胸を出してやつて見よう」

と小聲に呟いて居る。そこへ女房のお百合は新しき手拭を持ち、

お百合「宣傳使様、どうぞ此れでお手を御拭き下さいませ」

とつき出す。其横顔を見て、

友彦「ア、何と綺麗な女だなア。……併し今の獨語を聞かれはせなかつたか」

と稍不安の念に驅られ、盗み目にお百合の顔を覗いて見ると、お百合はそんな氣配も無かつた。友彦はヤツと安心の胸を撫でおろし、悠々と床の間に端坐し、バラモン教の經文を唱へ終り、偽神憑りとなつて、友彦「ウンウンウン、此方は大自在天大國別命なるぞ」
と雷の如く呶鳴り立てた。お百合は驚いて平伏し、お百合「ハイ有難う御座います」
と涙聲になつて居る。友彦は又もや口を切り、友彦「當家の主人東助は、何不自由なき身であり乍ら、海漁を好み或は冒險的事を致す悪い癖がある。それが爲に生命を棄てたのだ。不憫なれどもウ仕方がない。せめて三日以前に此宣傳使が當家に來て居れば、知らしてやるのであつたが、さてもさても残念な事であつたのう。モウ此上は仕方がない。靈魂の冥福を祈り、主人の天國に救はるる様、鄭重なる祭典を行ひ、且有力なる神の如き夫を持ち、東助の後繼を致ささねば、當家は到底永續致すまいぞよ。又東助は鞞丸病がある爲、子が出来ないから、折角蓄めた財産も他人に與らねばなるまい。汝は神の申

す事を、よつく肚に入れて、何事も大國別命の命令通り致すが上分別だ

お百合「ハイハイ有難う御座います。……神様の仰せなら、どんな事でも背きは

致しませぬ

友彦「何と偉い奴だ。其方は流石東助の妻だけあつて、よく身魂が研けたものだ。

神も感心致すぞよ

お百合「何を申しても、世間知らずの卑女、神様から褒められる様な事は一つも

御座いませぬ

友彦「坊間傳ふる所に依れば、汝は實に貞淑の女と云ふ事だ。世間の噂を聞かず

とも、神は心のドン底までよく見抜いて居るぞよ。一旦死んだ主人は最早呼べど

答へず、叫べど歸らず、是非なしと諦め、後の家を大切に守り、子孫を生み殖や

し、祖先の家を守るが、せめてもの東助への貞節、合點が行つたか

お百合「ハイハイ畏まりました御座います。併し乍ら妾の様な者に、如何して後

添に来て呉れる者が御座いませう。何だか夫の靈に對し氣が濟まない様に思はれ

てなりませぬ。そして其夫を持つのは、せめて三年祭を終つてからにして貰ふ事

は出來ますまいか』

友彦 『大國別命が申す事、しつかり聞け。人間の理屈は論ずるに足らぬ。善は急げだ、一日も早く夫を迎へたがよからう。其夫は神が授けてやる程に……さうすれば子孫は天の星の数の如く殖えて、家は萬代不易、世界の幸福者としてやるぞよ』

お百合 『ハイハイ有難う御座います。どうぞ宜しう御願申上げます。そして其夫と申すのは、何處から貰ひましたら宜しう御座いますか、これも一つ御伺ひ致したう御座います』

友彦 『別に何處へも探しに行くに及ばぬ。燈臺下は眞暗がり、今汝が目の前に三國一の花婿が來て居るぞよ。これも神が媒介を致さむと、遙々連れて來たのだから、喜び勇んで命令に服従するがよからう』

お百合 『神様、根っから其處らに誰も見えませぬ』

友彦 『ハテ察しの悪い。今汝の目の前に於て神の託宣を傳へて居る、大國別命の生宮の宣傳使であるぞよ』

お百合はハツと驚き、友彦の顔をつくづく看守り、

お百合「あなたは何時やら、浪速の里でお目にかかった事のある様な方ですなア」

友彦「馬鹿を申せ。他人の空似と申して、世界に同じ顔をした者は、二人づつ天

から拵へてあるのだ。此肉體は神の直々の生宮であるぞよ。よく調べたがよから

う」

お百合「鼻の先の一寸赤い所から、目の窪んだ所、口の大きさ、出つ齒の先の缺

けた所、似たりや似たり、よくマア似た方も有るものですなア。妾の姉は浪速の

里に嫁入つて居りますが、去年の冬、急飛脚が來ましたので、行て見れば姉の大

病、そこへ宣傳使がお見えになり、イロイロと仰有つて……姉の病氣を直してや

らう、それに就てはコレコレの薬が要るから、薬代を出せ……と仰せられ、大枚

三百兩を懐にし門口を出た限り、今に顔を見せないさうです。妾は其時に見た顔

と貴方のお顔と、餘りよく似て居りますので、一寸御伺ひ致しました」

友彦「神と詐偽師と一つに見られては、神も迷惑致すぞよ」

お百合「さう仰有るお聲は、あの詐偽師とそっくりですワ。聲までそれ程よく似

た人が有るものですかなア^{ひと}

友彦^{ともひこ}「つい話が横道へ這入^はつた。其方の覺悟は如何ぢや^{そのほう}」

お百合^{ゆかり}「どうぞ二三日お待ち下さいませ。其上でトツクリと考へ、親類にも相談^{かんが}致し、浪速の姉も招んで来て、其上に御厄介に預りませう。どうぞ神さま一先づ^{かみ}御引取り下さいませ^{おひきと}」

ポンポンと手を拍^うつた。友彦は顔色を眞赤に染め、冷汗を體一面ツクツクにか^{ともひこ}いて、湯氣をポーツポーツと立て乍ら、^{なげ}

友彦^{ともひこ}「あゝ失禮致しました。つい眠つたと見えて、結構な風呂に入れて貰うたと^{しつれい}思へば、ア、夢でしたか。體中此通り、守護神が入浴したと見えまして、湯氣が^{おも}立つて居ります^た」

お百合^{ゆかり}「イエイ工決して夢では御座いませぬ。お神憑りで御座いました。それは^{ゆめ}それは妙な事を仰有いました。妾は少し許り腑に落ちぬ事が御座いますので、二^{めづ}三日猶豫を願つて置きました^{にち}」

友彦^{ともひこ}「あゝさうでしたか。何分知覺精神を失つて了ふ神感法の神憑ですから、チ^{なにぶん}

ツトも分りませぬ。神憑も却て自分に取つては不便なもので御座います。ア
ハ、ハ、ハ、

と笑ひに紛らす。

お百合「それ丈立派な神懸が出来ましたら結構です。假令人間憑りに致しまして
も、あれ丈巧妙に託宣が出来ますれば、大抵の者は皆降参つて了ひます。妾でさ
へも一旦は、あの何々でした位ですもの。オホ、ハ、ハ、

友彦「何と、合點の行かぬ貴女の御言葉尻、何ぞ怪しい事が御座いましたか」

お百合「イエイ工別に怪しい事は御座いませぬ。神様の御引合せ、姉の内へ去年
参りました泥棒の模型か實物か、それは後で分りますが、……野太い奴が瞞しに
来ました」

と後の一二句に力を籠めて、優しき女に似ず唼鳴りつけた。友彦は此聲に打たれ、
思はず尻餅を搗いて、口を開けた儘、火鉢の横にバタリと倒れた。お百合は獨語、
お百合「オホ、ハ、ハ、何と悪魔と云ふものは、どこまでも抜目のないものだ。的
きり此奴は姉さんの宅で三百兩騙り取つた奴に間違ない。まだ主人の生死さへも

わかんない内から其處ら近所で噂を聞いて來よつて、良い加減な事を言ひ、若後家を誑らかさうと思つてやつて來よつたのだなア。どうやら目を眩かして居るらしい。今の間に細帯で手足を括り、庭先へ引摺り出し、水でもかけて氣を付けてやりませう。……アアそれにしても東助さまは如何なつたのかいな。村の衆は、未だに誰も報告に來て下さらず、イヨイヨ妾も未亡人になれば、今迄とは層一層腹帯を締めねばなるまい。あゝ困つた事が出來て來た

と自語する折しも、お冊は慌しく此場に驅來り、

お冊「奥様、お喜び下さりませ。旦那様が只今御機嫌よう御歸りになりました」

お百合は飛び立つ許り喜び、

お百合「ナニ、旦那様がお歸りとな。あゝ斯うしては居られまい。ドレドレお迎

へを申さねばなるまい」

と襟を直し居る所へ、早くも東助は三人の男を引連れ、廊下の縁板を威喝させ乍

ら現はれ來り、

東助「ア、お百合、餘り歸るのが遅かつたので、心配しただらうなア。村人にも

大變な厄介をかけたさうだ。俺も到頭風に吹き流されたと云ふ譯でもないが、家島まで往つて來たのだ。マア安心して呉れ」

お百合「それはそれは何よりも嬉しい事で御座います。つきましては貴方のお不在中に、四足が一匹這ひ込んで來ましたので、今生捕にして置きました。どうぞトツクリ御覽下さいませ」

と友彦を指さす。

東助「何、これは人間でないか。嚴しく縛られて居るではないか」

お百合「ハイ、一寸妾が縛しておきました。此奴は去年の冬、姉さまの内、で三兩騙り取つた泥棒ですよ。あなたが行方が知れないと云ふ噂を聞いて、ウマく妾を誑らかし、此家を横領しようと思つて出て來た圖太い代物です」

東助「それは怪しからぬ奴だ。併し乍ら斯うしてはおかれまい。助けてやらねばならぬから……コレコレ鶴公、清公、武公、お前達御苦勞だが、縛を解き水でも與へて、氣を付けてやつて下さい」

三人は命の儘に縛を解き水を吹き注けた。漸くの事で友彦は正氣に復し起きあ

がり、東助其他の姿を見て大に驚き、疊に頭を摺りつけ、涙と共に詫入る。東助は友彦に向ひ、

「お前は立派な宣傳使の風をして居るが、今聞く所に依れば、大變な惡黨らしい。此世の中は何處までも惡では通れませぬぞ」

友彦「ハイ誠に悪う御座いました。面目次第も御座いませぬ。どうぞ生命計りはお助け下さいませ。これつきりモウ宣傳使は廢めまする」

東助「結構な宣傳使の役をやめとは申さぬ。ますます魂を研いて立派な宣傳使にお成りなさい。そして世界の人民を善道に導きなさるのが貴方の天職だ。今迄の様な神様を松魚節にして女を籠絡したり、病人の在る家を探して、弱身に付け込み詐欺をしたりする様な事は、これ限りお廢めなさるがよからう」

友彦「ハイ有難う御座います。どうぞお助け下さいませ。これ限り惡は改めまする」

「斯かる所へ門口に大勢の聲にて、東助さまが生きてござつた。無事に歸られた、ウローウロー」

と山嶽も揺ぐ計り歡呼の聲聞え來る。

東助「お前、イヨイヨ改心を志たのならば、あの通り今門口に澤山の村人が來て居るから、一つ懺悔演説でもして下され。一伍一什包み隠さず、舊惡をさらけ出して改心の状をお示しなされ。それが出來ねば大泥棒として、此東助が酋長の職權を以て成敗を致す」

友彦「小さい聲で、

「ハイ致しまする」

東助「サア早く門口へ出て、懺悔演説を始めたが宜しからう」

友彦は、

「ハイ直に參ります。俄に大便が催して來ました。どうぞ便所へ往く間御猶豫を願ひます」

東助「便所ならば其處にある。サア早く行つて來たがよからう」

友彦は、

「ハイ有難う御座います」

と直様雪隠に入り、跨げ穴から潜つて外に這ひ出し、折柄日の暮れかかつたのを幸ひ、裏山の密林指して一生懸命に隠れたりける。

鶴公、清公、武公の三人は暫く東助の家に厄介となり、遂に東助に感化されて前非を悔い、心の底より言依別命の教を奉ずる事となりける。

(大正一一・六・一二 舊五・一七 松村眞澄録)

第四篇 混線状態

第一五章 婆と婆〔七二七〕

高姫は貫州と共に玉能姫より贈つた新造の船を操り乍ら、漸くにして瀬戸内海

の最大巨島小豆ヶ島に到着し、磯端に船を繋ぎ、暫し此島に滞在し、山の谷々までも隈なく寶の所在を探さむと、國城山の中腹まで登りつめた。茲には巨大なる岩窟があつて、昔から怪物の潛む魔窟と稱へられて居る。

貫州「高姫様、ここには立派な岩窟がありますなア。玉能姫の奴、ヒヨツとしたら斯う云ふ所へ隠して置いたかも知れませぬ。昔から人の出入した事のない、深い岩窟だと杣人が云つて居りましたから、一つ探險して見ませうか」

高姫「マア暫く考へさして貰はう。どこ迄も注意深い玉能姫の事であるから、吾々兩人が此岩窟へ這入るや否や、見張らして置いた味方の奴が穴でも塞ぎ、徳利詰にでもしよつたら、それこそ大變だ。此界限をせめて四五丁四面調査べた上の事にしよう」

貫州「そんな心配は要りません。そんなら此處に貴女は待つて居て下さい。私は一人探險して來ますから……」

と云ふより早く、岩窟の中へ腰を屈めて、ノソノソ這ふ様に這入つて了つた。後に高姫は腕を組み胡床をかき、思案に暮れて獨語。

高姫「あゝする事成す事、鶉の嘴程喰ひ違うと云ふのは、ヤツパリ自在天大國別命の御神慮に背いた酬いかも知れない。一旦鬼雲彦の部下となり、バラモン教の教理を稱へ乍ら、又もや三五教の變性男子が戀しくなり、ウライナイ教と銘打つて、中間教を捻り出し、何時の間にか大自在天の名も唱へぬ様になり、再び國治立命を信じ、再轉して素盞鳴尊の三五教に逆戻りをなし、今又三五教の幹部の爲に散々な目に遇はされ、日の出神さまも如何して御座るのだらうか。此頃は高姫の精神も變だが、日の出神様も何とはなしに便りなうなつて來た。あれ程光る玉の所在が分らぬ様な日の出神では、實際の事役に立たぬ。ヒヨツとしたら此頃は眼病でも患つて居られるのではあるまいかなア。あゝ最早瞋恚の雲に包まれて、一寸先も見えなくなつて了つた。どこを探ねたら此玉の行衛が分るであらうか。但は熱心な黒姫が最早手に入れて居るのではあるまいか、サツパリ五里霧中所か岩前夢中に彷徨すると云ふ高姫の今日の境遇。アアもう神様が厭になつて了つた。時々腹の中からイロイロの事を言つて聞かして呉れるが、後振り返り眺むれば、一つとして神勅的中した事はなく、自分の體に憑依して居る靈には、何と

はなしに鬮肩がつくものだから、自分もチツと怪しいとは思ひ乍ら、今の今日の出神の生宮で頑張り、貫き通して来たが、明石の灘で難船に遭ひ、又家島では船を奪られ島流し同様の憂目に會うても、何にも知らして呉れぬ様な盲神の容器になつた所で、日に日に恥の上塗りをするばかりだ、ア、如何したらよからうかなア。今更聖地へ引返し、言依別の教主や空助に對し謝罪するのも馬鹿げて居るし、モウ仕方がない、毒を喰はば皿迄舐れた。今となつて、ヤツパリ妾は日の出神の生宮では有りませなんだと……そんな事は是迄威張つた手前、言はれた義理でもなし。……一つ守護神に談判をして其上の事にしよう。……コレコレ腹の中の守護神、チツと發動して妾の質問に答へて下さい。今度は今迄の様なヨタリスクは聞きませぬぞ。ネットプライスの誠一つを開陳なされ。返答に依つては高姫も今日限りお前の言ふ事は聞かぬのだから、サア早く發動せぬか、口を切らぬかと拳を固めて臍の邊りを力一杯擲りつけて居る。如何したもののか、今日に限りて日の出神と稱する憑依物も、チウの聲一つ擧げず、臍の下あたりに萎縮して、小さき毬の様になつて付着して居る。高姫は力一杯其玉の上から握り詰め、

高姫「サアどうぞや、なんとか返答せぬか。結構な變性男子の系統の肉體を、今迄よくも弄物にしよつた。捻り潰してやらうか」

と腹の皮が千切れる程力を籠めて、グリグリとした固い塊を握り潰さうとする。腹の中より、

「ア、痛い痛い。白状します。どうぞ宥へて下さい。私は金毛九尾の狐の乾兒、昔エルサレムの宮で、大八洲彦命以下の神々を苦めた木常姫の靈で御座います。

其木常姫の分靈が疑つて貴女の肉體が形作られ、此世に生れて來たのだ。そして私は同じ身魂の分派だから、お前に憑るより外に憑る事は出來ないのだ」

高姫「よう白状した。大方そんな事だらうと思つて居つたのだ。併し乍ら同じ身魂の因縁なれば、お前の云ふ通り離す譯に行かず、妾も實際はお前と別れとも無い。併し木常姫の靈魂だなぞと、何と云ふ弱音を吹くのか。始めから日の出神と偽つて現はれた以上は、どこまでも日の出神で通さぬか。そんな氣の弱い守護神は妾は嫌ひだ。サア是から妾がキツと教育をしてやるから、今迄の様に此肉體を自由自在に使ふ事はならぬぞ。高姫が今度はお前を使ふのだから、さう思へ」

木常姫の靈「肉體が靈をお使ひになれば、體主靈従になりはしませぬか」

高姫「エー又しても、お前までが理屈を言ふのか。世間の奴は皆表面でこそ靈主

體従と濟ました顔して吐いて居るが、分らぬ奴だなア。物質の世の中にそんな馬

鹿な事が如何して行へるものか。體主靈従が天地の眞理だ。妾は今迄お前の靈に

従ひ、靈主體従を守つて来て、一つも碌な事は出来なんだぢやないか。體主靈従

に世の中は限る。虚偽式生活は此高姫の取らざる所、これからはスツクリ氣を持

直し、赤裸々に露骨に、體主靈従を標榜して世の中に立つ心組だから、お前もそ

う心得る」

木常姫の靈「ア、仕方がない。何を言つても水の【でばな】に聞いて呉れる筈が

ないから、ここ暫くは沈黙の幕をおろさうか。アハ、ハ、ハ、」

と自問自答を荐りにやつて居る。

此所へ糞まぶれになつて登つて来た一人の宣傳使があつた。宣傳使は岩窟の前

に中婆の首を垂れ、モノログして居るのを見て、

宣傳使「ハハア、此奴ア氣違だなア。獨り言うては獨り答へて居よる。昔から腹

の中なかから自然しぜんにものを言いふ病氣びやうきがあると云いふ事ことを聞きいて居をつたがテツキリ斯こんな奴やつの事ことを云いうたのだらう。神憑かむがかりにしては少すこし調子てうしが違ちがふ。併しかし乍ながら病氣びやうきでも何なんでも可いい、腹はらの中なかより何なんでも可いいから、物ものを言いつて呉くれると、實否じつぴは免とも角かくも、神憑かむがかりとして誤魔化ごまくわすのに都合つがふが好いいけれど……自分の様じぶんに何時いつまで修行しうぎやうしても、鎮ちん魂こんしても、腹はらの中なかからウンともスンとも言いうて來こない者ものには困こまつて了しまふ。あちらでも神憑かむがかりの眞似まねをしては失敗しつぱいし、こちらでも眞似まねをしては失敗しつぱいし、到頭たうとう洲本すもとの酋しうち長やうの宅たくに於おいて、九分くぶくりん九厘くと云いふ所ところで、女房にようぼうに看破かんぱされ肝きもを潰つぶし居をる所ところへ、死しんだ筈はずの主人しゆじんが歸かへつて來きよつて大おほいに面目めんぼく玉たまを潰つぶし、雪隠せついんの中なかから籠脱かごぬけをやつた時ときの苦くるしさ、恐こはさ、大自在だいじざいてん天様さまのお蔭かげで漸やっやく海邊うみべに無事ぶじ到着たうちやくし、一艘いっそうの舟ふねを見付みつけて、無理むりやりに沖おきへ漕出こぎだし、暴風ぼうふうに吹ふき流ながされ、此島ここまでやつて來きたのだが、雪せつ隠いんを潛くぐつた時ときに、自分じぶんの宣傳せんでん使服しふくは雪隠せついんの雜巾ざふきん役やくを勤つとめよつたと見みえて、未だいまに怪體けつたいな臭氣におひがする。ア、困こまつた事ことだ。一層いっそうの事こと、再びふたたび改惡かいあくして、此婆このばばを裸はだかにし、臭くさい着物きものと取換とりかへこをしてやらうかなア^四と何時いつの間まにか小聲ここゑが大おほきくなり、高姫たかひめの耳みみに聞きこえて來きた。高姫たかひめは、大部分だいぶん宣傳せんでん

使しの獨語ひとりごとを聞き悟さとり、

高姫たかひめ 『オツホ、、、糞くそまぶれの宣傳使せんでんし、雪隠せんちの雜巾ざふきんと日ひの出神でのかみの生宮いきみやの教服けうふくと換かへるなんて、そんな大だいそれた野心やしんを起おこすものぢやない。チヤンとお前まへの腹はらの底そこまで見抜みぬいてあるのだから……』

宣傳使せんでんし 『ヤアお前まへは何處どこの婆ばばアか知らぬが、俺おれの腹中はらをさう早くはやから見透みすかして居をるのなれば仕方しかたがない。止やめて置おかう。俺おれの着物きものにはドツサリと黄金色わうごんしよくのババが付ついて、ババの着物きものになつて了しまつた。貴様きさまのを脱ぬがした所ところでヤツパリ〔ババ〕の着物きものだ。……オイ婆ばあさま、どこぞ其處そこらの谷川たにがはで俺おれの着物きものを洗濯せんたくして呉くれぬか』

高姫たかひめ 『日ひの出神でのかみの生宮いきみやの宣傳使せんでんしと、洗濯せんたく婆ばばと間違まちがへられては迷惑めいわくだ。こんな高たかい山やまの水みづもない所ところに、洗濯せんたく婆ばばが居をるものか。谷川たにがはの畔ほとりへでも行いつて探さがして來こい。婆ばばは川かはに付物つきものだ。此婆このばばは世界せかいの人民じんみんの身魂みたまを洗濯せんたくする大和魂やまとたましひの根本こつぽんの洗濯せんたく婆ばばだぞ。……ヘン宣傳使せんでんし面めんをしゃがつて、何なにをとぼけて居あるのだ。餘程よつほどよい頓馬野郎とんまやらうだな

ア

と今いままでの腹立はらだち紛まれに、宣傳使せんでんしの方ほうへ鉾ほこを向むけて了しまつた。

宣傳使せんでんし「なんと口の達者たつしやな婆ばばアも有ればあるものだ。恰度ちやうど今いまウライ教けうを立てて

居をる高姫たかひめの様な、口喧くちやかましい婆ばアさまぢやないか」

高姫たかひめ「その高姫たかひめは此肉體このにくたいぢや。わしの名なを如何どうして知しつて居をるか」

宣傳使せんでんし「私わしは其時そのときに雉子きぎすと云いつた男をとこだ。お前まへが鬼雲彦おにくもひこの膝元ひざもとへ出でて來きて、バラモ

ン教けうを聞きいて居をつた時とき、私わしも聽きいて居をつた。あの時ときの事ことを思おもへば隨分ずぶん年としが寄よつた

ものだなア……今はバラモン教けうの宣傳使せんでんし友彦ともひこと云いふ名なを賜たまはつて、自轉倒島おのころじまいちゑん一圓

の宣傳せんでんに廻まはつて居をるのだ」

高姫たかひめ「ア、さうかい。そんな「しやつ」面つらで宣傳せんでんが出來できたかな」

友彦ともひこ「センデン」萬化ばんくわに身みを賣やっし、獅子奮迅ししふんじんの勢いきほひで活動くわつどうした結果けつぐわ、とうと「糞ふん」

塵ちんの中なかに陥おちいり、フン失しつの所ところだつた。アハ、ハ、ハ、ハ」

と打解うちとけて笑わらふ。

高姫たかひめ「お前まへもそこまで糞度胸くそどきようがすわつて、雪隱せんちの中なかまで潜もぐれば、最早もはや是これから上あがり

坂ざかだ。糞くそに生わく雪隱蟲せんちむしは遂つひには這はひあがつて、空中飛行自在くうちうひかうじざいの玉蠅たまばへとなり、どん

な偉えらい人間にんげんの頭あたまへでも止とまつて、糞くそを放ひりかける様やうになるものだ。お前まへも是これから

一つ糞發して、妾と一緒に活動したらどうだ。【フンパツ】せいと云つても雪隠へ往て尻をまくるのだないぞツ」

友彦「お前は随分口の達者な糞婆ぢやなア。併し乍らヤツパリ、ウラナイ教とか云ふ中間教を立て通して居るのかい」

高姫「バラモン教も、鬼雲彦の大將、大江山の砦から三五教に追ひまくられて逃げ歸る様な腰拔教なり、ウラナイ教から一寸都合に依りて、元の三五教へ逆轉して見たのだが、ヤツパリ此奴も糞詰り教だ。何分穴の無い教だから、萬事萬端行詰りだらけ、それに分らず漢が幹部を占めて居るのだから活動しようと思つても手も足も出し様がない。併し乍らバラモン、ウラル、ウラナイ、三五、四教を通じて一番勢力の有るのは依然三五の道だ。此島には天上天下唯我獨尊の三つの寶があるのだが、其奴の隠し場所を探し當てさへすれば、三五教は吾々の自由自在になり、天晴れ神政成就は出来るのだから、玉の所在を探さうと思つて、一人の家來を連れて此島まで来た所だが、お前も事と品に依つたら家來にしてやるから、今迄の經路を物語つて呉れ。先づ第一にお前の着物の因縁から聞かう。雪隠

から脱け出た事は聞いたが、それは何處の雪隠だい

友彦は有り次第を悉く物語りける。

高姫「さうすると、お前は東助の宅へ行つたのだな。彼奴は三人の男を連れて歸

つた筈だが、お前見たのかい

友彦「何だか三五教の宣傳使の服を着けて居つたやうだ。併し乍ら東助にスツカ

り服従して、是から東助を大將に、高姫の所在を探ね打亡ぼさねば置かぬと云う

て、力んで居ましたよ

と嘘を竝べ立て、高姫の肝を挫がうとする。高姫は驚いて口を尖らせ、目をグル

グルと廻轉させ乍ら、

高姫「そりや本當か。そして何時出て來ると云つて居つたかな

友彦「何でも東助の囁くのを聞けば、高姫は小豆島に漂着したに違ないから、數

百人の軍勢を引連れ、全島を片つ端から搜索して、高姫を生擒にして連れ歸り、

舌を抜いてやると云つてましたよ。用心せぬと何時やつて來るか分りませぬぜ。

アツハ、ハ、ハ、

と笑ふ。高姫は其顔をチラリと見て、

高姫「エー腹の悪い。そんな恐喝を食ふものか、小豆ヶ島へ来たと云ふ事がどうして東助に分る道理があらう。又お前の聲色と云ひ、顔色と云ひ、嘘を吐いて居るのだる」

友彦「ア、そこまで看破されては仕方がない。お察しの通りだ。マア嘘にして置きませうかい」

斯く話し合ふ所へ、顔一面に蜘蛛の巣だらけになつた貫州は、數多の衣類を小脇に抱へて出て来た。高姫はこれを見て、

高姫「ヤアお前は貫州、一體其顔は如何したのだ」
貫州「ハイ此處は恐ろしい泥棒の岩窟と見えて、澤山の掠奪品が山の如く積んで

有りました。私も泥棒のウハマへをはねて、大泥棒となり、顔は此通り「クモ」
助になつて出て来ました。資本が何分懸らぬ代物だから、安うまけと來ます。絹

物も有れば、木綿物も有るが、突込みで一尺何程で卸ませうかい。……ヤア何だ、怪しい臭氣がすると思へば、そこに糞まぶれの着物を着てる奴が一人立つて居る。

大方雪隠蟲のお化けだらう。早速此奴ア買手が出来た。世の中はようしたものだ。斯んな山中に店出した所で、たアレも買手は有るまいと思つて居つたのに、出せ買はう……とか云つて、不思議なものだなア
と一人洒落てる。

高姫 『お前そんな悪い事をして、何ともないのか。神様に済まぬぢやないか』

貫州 『私の天眼通で糞まぶれの人間が今出て来ると云ふ事を、チヤンと悟りました。こんな所で洗濯する譯には行かず、困つてるだらうと思つて、慈善的に抱へて来たのだ。サア俺の物ぢやないけれど、お前勝手に着たがよからう』

友彦 『持主の分らぬ着物を勝手に着る譯には行きませぬ。買ふとか、借るとかせなくては、黙つて着服すれば泥棒になりますから……』

貫州 『殊勝らしい事を言ふな。お前は宣傳使のサツクを嵌めて泥棒をやつて居つた男に違ひない。お前の面付は、どう鼻眞目に見ても、泥棒としか俺の天眼通に映じない、大方貴様の……ここは親分の根據地だらう。何だか此岩窟の奥には大勢の聲が聞えて居つたから、ソツト是れ丈の着物を引抱へ逃げ出して来たのだが、

貴様も大方岩窟の乾兒に違ひあるまい」

友彦「これは聊か迷惑だ。實の所は始めて此島へ漂着したばかりだから、そんな痛うない腹を探るものだない。併し此着物は暫く拜借しよう。其代りに私の衣類を渡すからお前御苦勞だが、岩窟の中まで持ち運んで置いてくれぬか」

貫州は、

「勝手にせい」

と捨臺詞を残して、又もや岩窟の中に驅込んだ。高姫、友彦も續いて岩窟の中に入。或は廣く、或は狭く、起伏ある天然の隧道を、身を堅にし横にし、或は這ひなどして漸く廣き窟内に進み入つた。どこともなく絲竹管絃の音が聞えて來る。三人は怪しげに耳を澄まして其音の出所を佇み考へ込んだ。或は前に聞え、後に聞え、右かと思へば左、左かと思へば頭の上に、地の底に音がする。途方に暮れ、半時ばかり無言の儘、顔を見合せて考へ込んでゐた。傍の岩壁は音もなくパツと開いて、中より現はれ來る一人の婆ア、三人を見るより、

「ア、お前は鷹鳥山に巢を構へて居つた鷹鳥姫其他の奴だなア。ア、よい所へ

やつて来た。サア是れから日頃の恨みを晴らし、金剛不壞の玉や紫の玉の所在を白状させねば置かぬ」

高姫「これはこれは御高名は豫て承はりて居りましたが、一つ谷を隔てた魔谷ヶ嶽と鷹鳥山、御近所で居り乍ら、誠に御不沙汰を致して居りました。妾も其玉を

……よもやお前さまが何々してゐるのではあるまいかと思つて来たのです。人を疑つて誠に濟みませぬが、貴女もあの玉に就ては非常な執着心がお有りなさるの

だから、妾が疑ふのも強ち無理では有りますまい」
とシツペ返しに捲し立てる。蜈蚣姫は顔色を變へ、

「盗人猛々しいとはお前の事だ。何なと勝手にほざいたがよからう。此穴にはス
マートボールや其他の勇士が澤山に抱へてあるから、最早お前達は袋の鼠も同様、
運の盡きぢやと諦めて、神妙に白状したがよからう。あのマア迷惑相な面付わい

の、オツホ、

と肩を揺り、腮をしやくり、舌まで出して笑ひ轉ける憎らしさ。

高姫「お前さまは音に名高い鬼ヶ城山、鬼熊別の奥さま蜈蚣姫さまと云ふお方で

せうがなア。妾も元は鬼雲彦の弟子となり、バラモン教の教理を信用して聞いた事がある高姫で御座います。今は一寸都合があつて、三五教の宣傳使と化け込んであるのだが、心の底はお前さまと同様、ヤツパリ自在天様を信仰し、生命までも捧げて、千騎一騎の活動をしてるので御座います。どうぞして三五教の三つの寶を奪ひ取り、それを手柄にメソポタミヤの本山へ献上し、御神業を助けたいばつかりに、斯うして化けてゐるのですよ。貴女方は今迄妾を敵と思つて御座るが、決して敵ではありません。強力なる味方です。玉の所在が分らうものなら、それこそ隠す所か、貴女の手を経て鬼雲彦様に奉つて貰ふ考へで、これ丈苦勞をしてゐるのです。三五教の教主言依別命が、玉能姫、初稚姫と云ふ女や子供に現を抜かし、肝腎の玉を隠さして了ひよつたのだから、何でも其所在を探さうと思つて、此島までやつて來たのが、神様の不思議の縁で、思はぬ所でお目に掛りました。

蜈蚣姫「ア、そう聞くとメソポタミヤでお目に掛つた高姫さまによく似てゐる。それなら何故妾が魔谷ヶ嶽に居つた時、お前さまは三五教ぢやと云つて反對をし

たのだ。それが一體合點がいかぬぢやないか」

高姫「アハ、々、誰も彼れも皆、此高姫の腹は知らない奴計りだから、三五教

の熱心な宣傳使とのみ思つて居る矢先に、何程お前さまに會ひたうても、會ふこ

とが出来ない。そんな事ども分つた位なら、今迄の苦心が水の泡になるのだから、

妾の心もチツと推量して下さい。神の奥には奥があり、其又奥には奥があるのだ

から、そんな企みをして居れば直に發覺しますから、事を成さむとする者は假令、

自分の夫であらうが、女房であらうが、何程信用した弟子であらうが、一口でも

喋る様な事では、成就しませぬからな。オホ、々、」

蜈蚣姫「何とお前さまは感心な人ぢや。さう事が分かれば敵でもなし、姉妹同様、

サアどうぞ奥へ通つてゆつくりと寛ろいで下さい。昔話をして互に楽しみませう」

と今迄と打つて變つた挨拶振りに、高姫は與し易しと心の中に笑ひ乍ら、蜈蚣姫

の後に従つて、奥の間に進み入る。

貫州、友彦は入口の間に木の根で造つた火鉢を與へられ、手をあぶり乍ら、様子如何にと待つて居た。高姫は今後如何なる策略をめぐらすならむか。

(大正一一・六・一三 舊五・一八 松村眞澄録)

第一六章

蜈蚣の涙〔七二八〕

バラモン教けうの御教みをしへを

自轉倒島おのころじまに廣めむと

はやる心こころの鬼ヶ城おにがじやう

鬼熊別おにくまわけの妻つまとなり

朝あさな夕ゆふなに仕つかへてし

蜈蚣むかでの姫ひめは一心いっしんに

バラモン教けうの回復くわいふくを

心こころに深く誓ちかひつつ

三國みくにヶ嶽がだけに立籠たてこもり

千々ちぢに心こころを惱なやませて

三あな五な教ひけうの神寶かむだから

黄金こがねの玉たまを奪うばひ取り

筐底けうてい深く納をさめつつ

得意とくいの鼻はなを蠢うごめかせ

又またもや第二だいにの計畫けいかくに

取りとかからむとする時ときに

天の眞浦の宣傳使

お玉の方に看破され

難攻不落と誇りたる

三國ヶ嶽の山寨も

木端微塵に碎かれて

無念の涙遣る瀬なく

瞋恚の炎を燃やしつつ

心も固き老の身の

企を通す魔谷ヶ嶽

スマートボールを始めとし

數多の教徒を呼集へ

鷹鳥山に立て籠る

三五教の宣傳使

鷹鳥姫の神策を

覆さむと朝夕に

心を碎き身を碎き

盡せし甲斐も荒風に

散りて果敢なき夢の間の

願は脆くも消え失せて

齒がみしながら執拗に

又もや此處を飛出し

曇りし胸も明石瀉

朝夕祈る神島や

家島を左手に眺めつつ

身も魂も捨て小舟

此世の瀬戸の浪を越え

大島、小島、小豆島

浪打ち際に漂着し

素 <small>そ</small> 知 <small>し</small> らぬ顔 <small>かほ</small> にて奥 <small>おく</small> の間 <small>ま</small> へ	仕 <small>し</small> 濟 <small>す</small> ましたりと高 <small>たか</small> 姫 <small>ひめ</small> は	聞 <small>き</small> くより顔 <small>かほ</small> 色 <small>いろ</small> 一 <small>いつ</small> 變 <small>へん</small> し	解 <small>と</small> けて嬉 <small>うれ</small> しきバラモンの	肩 <small>かた</small> 肱 <small>ひぢ</small> 怒 <small>いか</small> らし剛 <small>がう</small> 情 <small>じやう</small> の	不 <small>ふ</small> 思議 <small>しぎ</small> の縁 <small>えん</small> に蜈蚣 <small>むかでひめ</small> 姫	上 <small>うへ</small> を迂 <small>すべ</small> つて上 <small>じやう</small> 陸 <small>りく</small> し	時 <small>とき</small> 待 <small>ま</small> つ折 <small>をり</small> しも高 <small>たか</small> 姫 <small>ひめ</small> が	此 <small>この</small> 岩 <small>いは</small> 窟 <small>やど</small> を暫 <small>しばし</small> 時の間 <small>ま</small>	山 <small>やま</small> の尾 <small>をの</small> 上 <small>へ</small> や河 <small>かは</small> の瀬 <small>せ</small> を	醜 <small>しこ</small> の岩 <small>いは</small> 窟 <small>や</small> に陣 <small>ぢん</small> 取りて	山 <small>やま</small> を目 <small>め</small> 蒐 <small>が</small> けて一 <small>いつ</small> 行 <small>かう</small> の	三 <small>み</small> つの寶 <small>たから</small> の所 <small>あり</small> 在 <small>か</small> をば	探 <small>さぐ</small> らむものと國 <small>くに</small> 城 <small>しろ</small> の	頭 <small>あたま</small> の數 <small>かず</small> も四 <small>し</small> 十 <small>じふ</small> 八 <small>はち</small>	手 <small>て</small> 下 <small>した</small> を四 <small>よ</small> 方 <small>も</small> に配 <small>くば</small> りつつ	隈 <small>くま</small> なく探 <small>さが</small> し求 <small>もと</small> めつつ	假 <small>かり</small> の住 <small>す</small> 家 <small>みか</small> と繕 <small>つくろ</small> ひて	神 <small>かみ</small> の仕 <small>し</small> 組 <small>ぐみ</small> も白 <small>しら</small> 浪 <small>なみ</small> の	又 <small>また</small> もや此 <small>こ</small> 處 <small>こ</small> に出 <small>い</small> で來 <small>きた</small> る	心 <small>こころ</small> の角 <small>つの</small> を生 <small>はや</small> しつつ	日 <small>ひ</small> 頃 <small>ごろ</small> の固 <small>かた</small> 意 <small>い</small> 地 <small>ぢ</small> どこへやら	道 <small>みち</small> の友 <small>とも</small> なる高 <small>たか</small> 姫 <small>ひめ</small> と	打 <small>う</small> つて變 <small>かは</small> つた待 <small>たい</small> 遇 <small>ぐう</small> に	後 <small>うしろ</small> を向 <small>む</small> いて舌 <small>した</small> を出 <small>だ</small> し	進 <small>すす</small> み入 <small>い</small> るこそ可 <small>を</small> 笑 <small>か</small> しけれ
---	--	---	--	--	---	---	---	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--

高姫「久し振で御座いましたなア。貴女が魔谷ヶ嶽に時めいて居られました時、妾も鷹鳥山に庵を結び、バラモン教に最も必要なる、如意寶珠の玉を尋ねあてむものと、三五教の馬鹿正直の信徒を驅使し、一日も早く手に入れて、自在天様に獻納仕度いと明けても暮れても心を悩ませ、何うかして貴女に面會の機會を得度いものと考へて居りましたが、何を云うても人目の關に隔てられ、思ふに任せず、遇ひたさ見たさを耐へて今日が日迄暮して來ました。天運循環と云ひませうか、今日は又日頃お慕ひまうす貴女に、斯様な安全地帯で拜顔を得たと云ふのは、是全く自在天様の高姫が誠意をお認め遊ばして、こんな嬉しい對面の喜びを與へて下さつたのでせう。妾は餘り嬉しうて何からお話をしてよいやら分りませぬ」

蜈蚣姫「時世時節で、今日はバラモン教となり、明日は三五教と變ずるとも、心のドン底に自在天様を思ふ眞心さへあれば、人間の作つた名稱雅號は末の末です。大神様はキツとお互の心を鏡にかけた如く御洞察遊ばして、目的を遂げさせて下さるでせう。雪氷、雨や霰と隔つとも、落つれば同じ谷川の水」とやら、機に臨み變に應じ圓轉滑脱、千變萬化、自由自在の活動をなすだけの用意がなければ

ば到底神業に参加する事は出来ませぬ。メソポタミヤの本國には綺羅星の如く立
派な神司は竝んで居りますが、何れも猪突主義の頑愚度し難き、時勢に合ない融
通の利かぬ者計りで、お前さまのやうな豁達自在の活動をする人は一人もありま
せぬので、あゝバラモン教も立派な教理はありながら、之を活用する人物がない
と明け暮れ心配して居りました。然るに貴女のやうな拔目のない宣傳使が、バラ
モン教の中に隠れて居たかと思へば、勿體なくて嬉し涙が零れます。神様は何時
も經綸の人間を拵へて神が使うて居るから、必ず心配致すな、サアと云ふ所にな
りたら、因縁の身魂を神が引き寄せて御用を勤めさせて、立派に神政成就をさし
て見せる程に、何處に何んな者が隠してあるか分りは致さぬぞよ。敵の中にも味
方あり味方の中にも敵があると仰有つた神様の御教示は争はれぬもの、もう此上
は何事も心配致しませぬ。何卒高姫さま、是からは打ち解けて姉妹となり、神業
に参加しようではありませぬか」
高姫「何分不束な妾、行き届かぬ事ばかりで御座いますから、何卒貴女の妹だと
思つて、何かにつけて御指導を願ひます」

蜈蚣姫むかでひめ「互たがひに氣きの付つかぬ事ことは知らせあうて、愈いよ千騎せんき一騎いつきの活動くわつどうを致いたし、夫をつとの汚名をめいを回復くわいふく致いたさねば、女房にようぼうの役やくが濟すみませぬからなア。高姫たかひめ様さま、貴女あなたの夫をつと美山みやま様に對たいし申譯まをしわけがありますまい」

高姫たかひめ「妾わたしの夫をつと美山みやま別わけは御存知ごぞんぢの通りとほ人形にんぎやうのやうな男をとこで、妾わたしが右みぎへ向むけと云いへば「ハイ」と云いうて右みぎを向むき、左ひだりと云いへば左ひだりを向むくと云いふ、本當ほんたうに柔順おとなしい結構けつこうな人ひとですから、妾わたしが願望ぐわんぼう成就じゆうじゆ、手柄てがらを表あらはして見みせた所ところで、餘あまり喜よろこびも致いたしますまい。その代かはり失敗しつぱいしても落膽らくたんもせず、何年なんねん閒斯かんこう妾わたしが家いえを飛とび出だし、神様かみさまの御用ごようをして居ゐましても、小言こごと一つ云いはないと云いふ頼たよりない男をとこですから、【まどろしく】て最早もはや相手あひてには致いたしませぬ、生人形いきにんぎやうを据すゑて置おいたやうな心組つもりで居をりますよ、ホ、ホ、ホ、ホ、」

蜈蚣姫むかでひめ「妾わたしもそんな柔順じつじゆんな夫をつとに添そうて見度みたう御座ございますわ。なんと高姫たかひめさま、貴女あなたは世界せかい一いちのお仕合しあはせ者もの、さういふ柔順じつじゆんな男計をとこばかり世よの中なかにあつたら、此頃このころのやうな女權ぢよけん擴張くわくちやうだの、男女だんぢよ同權どうけんだのと騒さわぐ必要ひつえうはありませぬ。妾わたしの夫をつとも柔順おとなしい事ことは柔順おとなしいが、柔順おとなやうが些ちつと違ちがふので困こまります、オホ、ホ、ホ、ホ、」

高姫「斯んな所で旦那様のお惚氣を聞かして貰うちや遣り切れませぬわ、
ホ、ホ、ホ、ホ、」
と嫌らしく笑ふ。

蜈蚣姫「高姫さま、笑ひ所ぢやありません。此長の年月、妾は今日迄笑ひ聲を聞
いた事もなし、妾も嬉しいと思うた事は唯の一人も御座いませぬ。メソポタミ
ヤの顯恩郷は、素盞鳴尊の家來太玉神や、八人乙女に蹂躪され、止むを得ず鬼雲
彦の棟梁様は遙々海を渡り、大江山に屈竟の地を選び館を建て、立派に神業を開
始し遊ばした所、部下の者共が餘り心得が悪いのと利己主義が強いため、丹波栗
ぢやないが、内からと外からと瓦解され、お痛はしや折角心を痛めて造り上げた
立派な大江城を捨て、伊吹山に逃げ去り、此處で又もや素盞鳴尊の一派に惱ま
れ、やみやみとフサの國へ逃げ歸り、素盞鳴尊の隠れ家を脅かさむと、鬼雲姫の
奥さまと共に歸られました。ア、思へば思へばお氣の毒で堪りませぬ。それにつ
けても妾の夫の鬼熊別は、副棟梁として鬼ヶ城に砦を構へ、鬼雲彦様の御神業を
誠心誠意お助け致して居りましたが、是れ又脆くも三五教の宣傳使や、味方の裏

返りの爲、破滅の厄に遇ひ、ア、痛ましや鬼熊別の我夫は、棟梁の後を追うて波斯の國に歸つて仕舞ひました。其時夫は妾の手を握り「これ女房、私は棟梁様の御爲に波斯の國へ別れて行くが、何卒お前は三國ヶ嶽に立て籠り、會稽の恥を雪ぎ寶の所在を探し出し、功名手柄を現はして歸つて呉れ」と云うて、涙をホロリと流された時は、妾の心は何んなで御座いましたらう。天にも地にも身の置き所が無いやうな心持が致しました。人間として難き事天下に二つある。其一つは天國に昇る事、も一つは立派な家來を得る事で御座います。バラモン教もせめて一人立派な家來があれば、斯んな惨めな事にはならないのですが、ア、思へば思へば残念な事だ」

と皺面に涙を漂はせ、遂には聲を放つて泣き伏しにける。

高姫「そのお歎きは御尤もで御座います。併し乍ら日の出神の生宮、オツトドツコイ大自在天様の御眷族の憑らせ給ふ眞の生宮高姫が現はれて、貴女と相提携して活動する上は、最早大丈夫で御座います。何卒お力を落さず、もう一働き妾と共に遊ばして下さいませ。あの玉さへ手に入らば、バラモン教は忽ち暗夜に太陽

の現はれた如く、世界に輝き渡るは明かで御座いますから……、蜈蚣姫さま、此

岩窟は大江山の鬼ヶ城とはどちらが立派で御座いますか

蜈蚣姫「とても比べものにはなりません。三國ヶ嶽の岩窟に比ぶればまアざつと

三分の一位なものです。妾も立派な鬼ヶ城を追はれ、だんだんとこんな狭い所へ

入らねばならないやうに落ちて仕舞ひました。思へば思へば残念で耐りませぬ。

それでも何とかしてこの目的を遂げたいと朝夕神様を祈り、何卒御大將御夫婦が

御健全で此目的を飽迄も遂行遊ばすやうに、又我夫の無事に神業に奉仕するやう

にと、夢寐にも忘れずに祈願致して居ります。是からは貴女と二人で腹を合せ、

飽迄も初志を貫徹せねばなりません

高姫「左様で御座います。何分に宜敷く御指導を願います。併し乍ら此立派な岩窟

に似ず今日はお人が少い事で御座いますな

蜈蚣姫「ハイ、今日は神前の間で祭典を致して居りますので、誰も此處には居り

ませぬ。あの通り音楽の聲が聞えて居るでせう。あれが祭典の聲です

高姫「妾も一度参拜させて頂き度いもので御座います」

蜈蚣姫「何卒後で緩りと参拜して下さいませ。中途に入りますと皆の者の氣が散り、完全にお祭が出来ませぬから、……時に高姫さま、貴女のお連れになつた二人の男は、ありや一體何者で御座いますか」

高姫「ついお話に身が入つて貴女に申上げる事を忘れて居ましたが、彼はバラモンの教の宣傳使の友彦と云ふ男、も一人は妾の召使の貫州と云う阿呆とも賢いとも、正とも邪とも見當の付かない男で御座います」

蜈蚣姫「何と仰せられます。バラモン教の友彦が来たとは、それは又妙な神様のお引合せ、……餘り姿が變つて居るので見違へて居つた。ア、さう聞けば鼻の先に赤い所があつたやうだ。彼奴は私の一人娘をチヨ口まかし、手に手を取つて何處ともなく姿を隠した男、廻り廻つてこんな所へ來るとは是又不思議、あれに尋ねたら定めて娘の消息が分るであらう。……コレコレ高姫さま、此事は祕密にして置いて下さい。妾が直接に遠廻しに聞いて見ますから」

と心臓に波を打たせながら、そはそはとして居る。高姫は此場を立つて次の間に現はれ兩人に向ひ、

高姫「友彦さまに貫州、退屈だつたらう。蜈蚣姫さまが一寸奥へ通つて呉れと仰有るから通つて下さい。此處もバラモン教の射場だから……、友彦さま、お前は親の家へ戻つたやうなものだ。久し振りで蜈蚣姫様に御面會が出来るから喜びなさい」

友彦「何と仰有る。此處が蜈蚣姫様のお館ですか、そりや違ひませう。世界に同じ名は澤山御座います。まさか本山に居られた、副棟梁の鬼熊別の奥さまの蜈蚣姫さまではありますまい」

高姫「さうだとも さうだとも、チツとは不首尾な事があらうが辛抱しなくては仕方がない。逃やうと云つたつて逃げられはせぬワ。お前も可愛い娘の婿だから、さう酷くも當らつしやるまい。安心して妾に伴いて御座れ」

友彦は顔色忽ち蒼白となり、恐る恐る高姫の後について奥の間に進み往く。

(大正一一・六・一三 舊五・一八 加藤明子録)

第一七章 黄龍姫（七二九）

高姫の後に従いて蜈蚣姫の居間にやつて来た友彦は、忽ち頭を床にすりつけ乍ら、

友彦「コレはコレは蜈蚣姫様、久し振りです御壯健なる御尊顔を拜し、友彦身に取つて恐悦至極に存じ奉ります。唯何事も神直日、大直日に見直し、聞き直し下

さいまして、今迄の重々の罪科を御赦し下さいませ様、懇願致しまする」

蜈蚣姫「オホ、コレ友彦、お前も長らく世間をして来た徳に依つて、随分

辨舌は巧になつたものだなア。お前は顯恩郷に於て、我が一人の娘小絲姫をチヨ

ロマカし、飛び出て了つた不届きな男だが、一體小絲姫は何處へ隠してあるのだ。

可愛い娘の戀男だから、成る可く親として添はしてやりたいは山々なれど、苟く

もバラモン教の副棟梁鬼熊別の養子としては、餘り御粗末だから我が夫は何うし

ても御承諾遊ばさず、妾は母親の事とて娘の戀を叶へさしてやりたいばかりに、

いろいろと申し上げたが中々御聞き遊ばさず、其間にお前は、天にも地にも一人

より無い我が大事な大事な娘を誘拐して、行方を晦ました太い男だ。其娘を一體何うして呉れたのだ。サ有體に白状しなさい。妾にも一つ考へがある。お前の出様に依つては又添はしてやらぬものでもない。さうすればお前も立派な鬼熊別の御世繼だ」

友彦「ハイ、貴女の御言葉は肝に銘じて感謝致します。併し乍ら小絲姫様は私の鼻の先が赤いとか、口が不恰好だとか、出齒だとかいろいろと愛想づかしを並べられ、一年ばかり添うて居りましたが、或夜のこと遺書を殘して私の側を離れて了ひました。それ故私はモ―一度探して會ひたいと思ひ、片時の間も小絲姫様の事を思はぬ暇はありません。誠に濟まぬ事を致しました」

蜈蚣姫「さうするとお前は娘に愛想を盡かされたのだな。ア―ア矢張り私の娘だ。一目見ても反吐の出るやうなお前の面つき。何うして彼の綺麗な娘がお前に戀慕したのだらうと、不思議でならなかつた。お前は娘の幼心につけ込み、いろいろと威嚇文句を並べて、無理に伴れ出したのだらう」

友彦「イエイエ滅相も無い、初の間は何處へ往くにも、影の如くに付き纏ひ、煩

さくて悖らなかつた位です。決して私の方から戀慕したのぢや御座いませぬ。小
絲姫さまの切なる御願ひに依つて、私も已むを得ず應じました。一度勿ねて見ま
したところ、小絲姫様は「妾はお前が初戀ぢや。それに斯う無下に肱鐵砲を喰は
されては、最早此世に恥かしくて生て居る甲斐が無い。妾の思ひを叶へさして呉
れればよし、さうでなければ今此處で自害をする。妾の戀路は普通一般の戀では
無い。何處迄も九寸五分式だ」と光つたものを出して、吾れと吾咽喉を突き立て
給はむとする時、私は跳びついて「ヤア、逸まり給ふな」と九寸五分を奪ひ取り、
思はず互にキツスを致しました。それが縁となつて到頭「わり」無き仲となつた
ので御座います」

蜈蚣姫「小絲姫に限つてお前のやうな男に、さう血道を分けて呆ける筈が無い。
片相手が居らぬと思つて、そんな嘘を云ふのだらう。サアサ、本當の事を言つて
下され」
友彦「實の事は恥しい話ですが、最前も申した通り、私に肱鐵を喰はし、たつた
一枚の遺書を「かたみ」に雲を霞と遁げて了はれたので御座います。私は何うし

ても貴女の御側へ歸つて居られるものと思ひ詰て居りますが、何うぞ隠さずに一度で宜しい、會はして下さいませ」

蜈蚣姫「モシ高姫さま、なんと困つた男ぢやありませんか。よう圖々しい、あんな事が云へたものですなア」

高姫「コレコレ友彦さま、お前は餘程性質が悪いぞえ。さうして其の遺書とかは今持つて居りますか」

友彦「ヘーイ、其の一枚の遺書が私の生命の綱だ。之を證據に一度邂逅り會つて舊交を温め、萬一葉はずば恨の有り丈を言つて、無念晴しをするつもりで、大切に御守りさまとして持つて居ります」

蜈蚣姫「なに、娘の書いたものをお前は持つて居るか。それを一つ此處へ見せて下さい……」

友彦「見せないことはありませんが、貴女讀めますかな。何だか符牒のやうな文字が書いてあつて、テント私には讀めませぬ。二三人の友達にも見せましたけれど、こんな文字は見たことが無いと云つて、誰一人讀むものは無し、何が何だか

解りませぬ。淵川へ身を投げて死ぬと書いてあるのか、或は又何處かへ行つて待つて居るから来いと云ふのか、薩張り私には受取れませぬ」

蜈蚣姫「兔も角妾に一寸お貸し」

と云ひ乍ら、友彦の手より之を受取り、「ももくちや」だらけの紙を両手で皺を伸ばし乍ら、

蜈蚣姫「ハ、ア、これはスパルタ文字で記してあるから、餘程の學者で無いと解らぬワイ。エー……」

一、妾事一時の情熱に驅られ、善悪美醜を省みる違も無く、兩親の御意に背き、お前様の千言萬語を盡しての誘惑に陥り、今日で殆ど一年ばかり枕を共に致しました。初めに會つた時とは打つて變つて野卑と下劣の生地現はれ、妾としては女として鼻持ち相成り難く、氣の毒乍ら此の紙一枚を記念として、お前に與へる。今後は決してお前の面と相談し、餘り謀叛氣を出してはなりません。又妾のやうに恥を搔かされ、肱鐵砲を喰はされて悲しまねばなりません。妾は是より黒ん

坊ぼうの澤山たくさん居ゐる、オースタラリヤのひと一つ島じまへ渡わたり、黒くろん坊ぼうの女ぢやう王わうとなつて榮耀えいよう榮華えいげわに暮くらします。何程なにほど色いろが黒くろくてもお前まへ様のさまシヤツ面つらに比くらべれば幾いくら優ましか知しれませぬから、今迄いままでの縁えんと諦あきらめて、此この書ふみを見みても決けつして跡あとを追おうて出でて來くるなどの不ふり了やう見けんを出だしてはなりませぬぞ。萬々まんまん一いち後あとを追おうて來くるやうな事ことを致いたしたならば、數多あまたの乾兒こぶんに命めいじ、お前まへを黽殺なぶりころしに致いたすから、其その覺悟かくごをしたがよい。必かならず生いのち命めいが大事だいじと思おもはば、今日けふ限かぎり一いち場ぢやうの良よい夢ゆめを見みて居をつたと思おもつて、諦あきらめたがよからう。苟いやしくもバラモン教けうの副棟ふくとりやう梁おにくまわ鬼熊おにくまわ別の娘むすめと生うまれ、お前まへのやうな馬鹿ばか男をとこに汚けがされたかと思おもへば、殘念ざんねんで、恥はづかしくて、父ふ母ぼにも世せ界かいのひと人ひとにも、何どうして顔かほが會あはされやう、ア、此この文ふみを書かくのも胸むねが悪わるくなつて來きた。水みづで書かくのは餘あまり勿體もつたいないから、お前まへの小便せうべんの汁じゅうで墨すみをすつて、茲ここに一ひと筆ふで書かき遺のこし置おきます。

天下てんかの賢明けんめいなる淑女しゆくぢやう 小絲こいと姫ひめ様さまより

振ふられ男をとこの友彦ともひこ殿どの

と記しるしありぬ。蜈蚣むかで姫ひめは之これを見みて思おもはず大おほ口ぐちを開あけ、

「オホ、、、コレ友彦、お前も餘程よい抜作だなア。今改めて讀んで聞かしてやらうか。イヤイヤ恥を搔かすも氣の毒ぢや。讀まぬがよからう。娘の恥にもなることだから……。モシ高姫様、随分間抜けた男ですワ。さうして戀しい娘の行方は分りました。サアこれからお寶を探しがてら、娘の後を追うて参りませう。」

高姫さま、貴女は此の館を守つて下さいませぬか」

高姫「滅相もないこと仰有いますな。三つの寶を探し出し、大自在天様に献上する迄は、妾の身體は安閑と斯様な處に居ることは出来ませぬ。何處までも貴女とシスターとなつて目的を成就する迄は参らねばなりません」

蜈蚣姫「ア、それもさうだ。そんなら相提携して活動を致しませう。ア、娘の所在が分つてこんな愉快なことは無い。噂に聞いて居る龍宮島の黄龍姫といふのが、オースタラリヤの聲望高き女王と云ふことだ。そんなら彼の女王は我が娘であつたか。嬉しや嬉しや、高姫さまの御「かけ」で、到頭娘の所在が分りました。これと云ふのも大神様の御引合せ、有り難う御座います」

と手を合し涙と共に拜み居る。

友彦「モシモシ、高姫さまに伴れられて来たものではありませぬ。私は勝手に此の岩窟の入口迄参りますと、高姫さまが来て居られたのです。高姫様に逢うたのも今日が初めてだ。高姫さまに御禮を仰有るなら、何故私に御禮を仰有らぬか」
蜈蚣姫「措きなされ、面の皮の厚い、妾が是れ丈け心配をしたのも、可愛い娘が知らぬ他國へ行つて苦勞をして居るのも、元を糺せば【みんな】お前が悪い故だ。何處を押へたら、そんな音が出るのだ。本當に譯の分らぬ奴だ、一國の女王にもなると云ふ、流石の小絲姫が肱鐵を喰はしたのも無理もない。乞食婆だとしてお前のやうな男に、秋波を送る奴があるものか。自惚も好い加減にしなされ。泥棒面をさらして何の態だ。娘の行方が分つた以上はお前に用は無い。サア、トツトと歸つて貰ひませう」
友彦「神様は慈愛を以て心となし給ふ。神直日大直日に見直し聞き直しと云ふ事は御忘れになりましたか」
蜈蚣姫「ア、仕方がない、それもさうぢや。改心さへ出来たら、【どんな】罪でも赦して下さる神さまだから、私も惟神に赦してやりませう」

友彦「早速の御赦免、有り難う御座います。何うぞ私も貴女の御供をして、オースタラリヤの一つ島迄伴れて行つて下さいませ」

蜈蚣姫「それや絶対になりませぬぞ。又病が再發すると親が迷惑するから、中途迄は御供を許して上げるが、彼の島へは絶対に伴れて行くことは出来ませぬ」

友彦「モシモシ高姫さま、袖振り合ふも多生の縁だ。貴女、其處を好いやうに挨拶して下さいなア。……オイ貫州、私に代つて一つ御大に御願ひして赦して貰つて呉れないか」

高姫「私も木石を以て造つた肉體ぢやないから、酸いも、甘いもよく知つて居る。併し今は水の「でばな」だ。マア控へなされ。折を見て何とか挨拶をして上げるから」

貫州「高姫さまの仰せのやうに、マア暫らく辛抱するのだなア」

蜈蚣姫「誰が何と云つても一旦言ひ出した上は、後へは退きませぬぞや」

貫州「オイ友彦、斯う低氣壓がひどく襲來しては駄目だ。グツグツして居ると風雷雨電、如何なる地異天變が勃發するか分らせぬぞ。マア取越苦勞は止めて、刹

那心なしんで従ついて行くゆのだなアア
友彦ともひこ『アア、昔むかしの古疵ふるきずが、今いまとなつて【うづき】出だして苦くるしいことだワイ』
(大正一一・六・一三 舊五・一八 外山豊二録)

第一八章 波濤萬里はたうばんり〔七三〇〕

世界せかいの樂土らくどと聞きえたる　メソポタミヤの瑞穂國みづほくに
顯恩鄉けんおんきやうに現あらはれし　バラモン教けうの棟梁神とうりやうしん
鬼雲彦おにくもひこが懷中ふところの　刀かたなと恃たのむ副棟梁ふくとつりやう
鬼熊別おにくまわけや蜈蚣むかで姫ひめ　中なかに生うまれた一粒ひとつぶの
蕾つぼみの花はなの小絲こいと姫ひめ　年としは二八にはちか二九にくからぬ
仇あだな姿すがたに憧あこがれて　教をしへの道みちの友彦ともひこが

力ちから限りかぎにに付きつ纏まとひ

言葉ことば盡つくしてして説ときと落おとし

二人ふたりのの親おややや人ひとのの目めの

關所せきしよをを越こえてえて波フ斯サのの國くに

荒野あらのヶが原はらをを打うち渡わたり

高山かうざん數かず々かず乗のりり越こえてえて

釋迦しやかのの生うまれれしし月つき氏の國くに

錫蘭セイロン島たうにに身みをを忍しのび

夫婦ふうふ仲なか良かよくく暮くらすす内うち

戀こひのの魔ま風かぜにに煽あふれれて

力ちからとと恃たのむむ小こ絲いと姫ひめは

只ただ一いつ通つうのの遺かき書おきを

殘のこしてして浪なみぢ路ぢをを打うち涉わたり

何處いづくのの果はててやや白しら波なみの

船ふねにに姿すがたはは消きええににけり

とりと殘のこされれしし友とも彦ひこは

夜食やしよくにに外はづれたれた梟ふくろどり鳥とり

つつままららぬぬ顔かほをを曝さらししつつ

執念しふねん深ふかくくもも蛇くちなはの

魅みれれしし如ごとくく氣きもも狂くるひ

胸むねをを焦こがしてして自おの轉ころ倒るの

神島かみしまささしてして進すすみみ來くる。

尋たづねねるる由よしもも夏なつのの夜よの

蟲むしにに脛すねををばば刺さされれつつ

山川やまかは涉わたりり蓑みの笠かさの

輕かるきき扮いで装たち此こ處こ彼か處しこ

彷徨さまよひひ巡めぐりりてて宇う都づ山やまの

里さとにに輿みこしをを据すゑえ乍ながら

支離滅裂の説法を

説き廣め居る折柄に

三五教の宣傳使

天の眞浦の神人が

其神力に恐怖して

又もや此處を驅け出し

流れ流れて淡路島

隈なく廻り北の果

洲本の里の酋長が

館の内の失敗に

廁の穴より籠脱けし

着衣を黄色に染め乍ら

此世の瀬戸の浪の上

堅磐常磐に浮かびたる

小豆ヶ島に漂着し

狐狸に魅せられし

如き怪訝な顔をして

國城山の岩窟に

當途もなしに來て見れば

胸の動悸も高姫が

差俯向いて獨語

聞くより誰かと尋ねれば

口から先に生れたる

布留那の辨の高姫は

口を極めて喋り出す

鼻持ならぬ屁理屈に

忽ち据わる糞度胸

臭い婆アと知り乍ら

鼻を掴んで岩窟に

伴ひ進み来て見れば

思ひがけなき蜈蚣姫

般若の様な面をして

鼻先赤い出齒男

出齒龜式の友彦を

見るより早く佛頂面

蟹の様なる泡を吹き

怨みの數々繰返す

その權幕の恐ろしさ

流石の友彦肝潰し

小絲の姫が残したる

皺苦茶だらけの遺書を

怖々前に差し出し

蜈蚣の姫の手に渡す

婆アは手早く我顔の

皺と同時に伸べ乍ら

潤んだ眼を光らせて

覗いて見れば此は如何に

スパルタ文字にて記したる

戀しき娘が筆の蹟

愛想づかしの數々を

竝べ立てたる可笑しさに

流石の婆も吹き出し

音に名高にオセアニヤ

龍宮島に名も高き

黄龍姫は吾子ぞと

初めて悟る蜈蚣姫

嬉し悲しの泣き笑ひ
一座白けた最中に

岩窟の口を押開き
ドヤドヤ出て来る男あり

あゝ惟神々々
靈も腰もスツカリと

抜かした馬鹿の友彦が
身の上こそは哀れなる

奥の間の祭典は濟んだと見えて、數多の老若男女は此場にドヤドヤと現はれ來り、蜈蚣姫に祭典無事終了の報告をして居る。頭の頂邊が饅頭の様に禿げた男、

友彦の顔を見るなり、

男「ヤア、貴様は六ヶ月以前に我家に忍び入り、我留守宅を幸に女房を

額に負傷を負はせ逃げ去つたる友彦と言ふ奴であらう。俺が門口へ歸つて來る途

端、我家より血刀提げ飛び出した奴の顔そつくりだ。貴様は留守の家に巧言を以

て入り込み、友彦の宣傳使だと申し、女房の隙を覗ひ大それた事を致して逃げ失

せた奴、最早天命の盡、覺悟をせい」

此男の言葉に蜈蚣姫始め一同は、呆れて二人の顔を穴もあけよと許り睨みつけ

て居る。

友彦「滅相な事を仰せられては困ります。他人の空似と申しまして、世界には、

二人や三人は同じスタイルの者はある相です。貴方のお見違ひで御座いませう。

何卒とつくり調べて下さいませ」

男「私は明石の里の久助と言ふ者だが、日の暮まぎれに顔はよく分らねど、鼻の

頭の赤い特徴が何よりの證據だ。も一つ確める爲めに女房が次の間にお籠りをし

て居るから、呼んで来て調べさして見る。……これこれお民、一寸来てお呉れ」

友彦「メ、滅相な。御夫婦共御苦勞を掛けて濟みませぬ。過ぎ去つた事は水に

流したが却て御都合が宜しからう。過越し苦勞は神様の道に大禁物だ」

久助「お前の方は御都合が宜からうが、久助にとつては、無理難題を掛けた様に

皆の人々に思はれては誠に御都合が悪い」

と言つて居る所へ女房お民はシトシトと出で來り、友彦の顔を見るや否や、

お民「アツ泥棒」

と言つたきりビツクリ腰を抜かして仕舞つた。久助は驚いて、

久助「こりやこりや女房、是丈け澤山の人が居るのだから、泥棒の一人位は恐るには足らぬ。まア氣をしつかりと持つて呉れ」
と背を無理に叩く。貫州は兩手を組んで「ウン」と靈を送る。お民は漸う氣を取り直し、

お民「お前は此春吾家に入り來り妾に無禮を加へた上、金を浚つて逃げ去つた悪黨者、妾が額の疵は汝が殘せし罪の痕、之でも言ひ分あるか」

と齒を食ひ縛り目を睨らし睨みつける。友彦は、

友彦「ハイ、誠に……」

と僅かに言つたきり、床に頭をすりつけて地震の神の神憑りをやつて居る。

岩戸を開いて入り來る三人の男、

男「へい、御免なさい、私は淡路島の洲本の酋長、今は東助様の家來となつた清

公、武公、鶴公の三人で御座る。極悪無道のバラモン教の宣傳使と名告る大盜賊、

靈隱の跨げ穴より脱け出し、濱邊に繋ぎし酋長の所有船を盗み、艦を操り海原に

逃げ去りしと訴ふる者あり。我々酋長の命令に依り直に船を用意し友彦の後を追

ひ來る折しも暴風に出會ひ、艦は折れ進退の自由を失ひ漸く此島に漂着し、見れば泥棒が乗つて來た東助と刻印のついた釣船、てつきり此島に逃げ忍び居るならむと、吾々三人後を追つ驅來て見れば、嗅覺鋭利な此犬の力によつて、此處まで尋ねて參つた捕手の役人で御座る。もう斯うなつてはお隠しになつても駄目で御座る。糞の臭が此岩窟の中まで續がつて居る以上は、てつきり泥棒は當岩窟に居るに相違御座るまい、さア速かにお渡し召され」

と肩臂怒らし仁王立ちになつて力味かへり居る。

蜈蚣姫「皆さま、御苦勞で御座つた。此處に犬が一匹居ります。何卒早く縛つて御歸り下さい。どうも斯うもならぬ友彦と言ふ野良犬で御座います。オ

ホ、、、

と齒の脱けた口から零れた様な笑ひをする。高姫は目敏く三人の顔を見て、高姫「誰かと思へば清に武、鶴の三人ぢやないか。東助船頭と共謀になつてようこの高姫を馬鹿にした。さア良い處へうせた。もう量見ならぬぞ。……モシモシ蜈蚣姫さま、貴女の部下を十人ばかりお貸下され。如何も斯うもならぬ反逆者、

懲戒の爲め縛りつけて、チツと許り膏をとつてやらねばなりません

三人「アハ、ハ、ハ、オイ高……婆ア何を吐かすのだ。勿體なくも淡路島の洲本に

於て雷名隠れなき人子の司、東助様の御家來だぞ。今迄は貴様に清だの、武だの、

鶴だのと頤の先で使はれて来たが、もう今日の俺達はチツと相場が違ふのだから

其心組で謹んで返答をせい。無禮な事を致すと貴様も一緒に召捕つて歸らうか

高姫は泰然自若として、

高姫「オホ、ハ、ハ、鉛製の閻魔の様な其態は何だ。見つともない。玩具の九寸五

分を以て嚇かす様な事をしたつて此高姫は、いつかないつかなビク付く様な弱

い女で御座いませぬワイ。之でも猪食つた犬だ。見事召捕るなら召捕つて見よ

と争ふ其隙を考へ、友彦は四つ這ひになつて、ノソリノソリと黒い禪を尾の様に

垂らし乍ら、表口さして遁げ出さうとする。三人の引張つて来た洋犬はワンワン

と威喝し乍ら友彦の尻に噛じり付いた。蜈蚣姫は何が何やら、二組も三組も混線

した此争ひに肝を潰し、一生懸命に、

蜈蚣姫「南無バラモン教主大國別命、守り給へ幸倍給へ」

と一心不亂に汗を流して祈願して居る。清、武、鶴の三人は友彦を高手小手に縛め、岩窟の外に引き出し、茨の苔を携へ、
「さあ、泥棒、キリキリ歩めツ」
と引張り行く。

是より蜈蚣姫は、高姫、貫州、久助を伴ひ、寶の所在の探索を兼ね、オースタラリヤの女王黄龍姫に面會せむと、一艘の船に身を託し果物を數多積込み、小豆ヶ島を後に、瀬戸の海を乗り切り馬關海峽を越え、西へ西へと進み行く。

(大正一一・六・一三 舊五・一八 北村隆光録)

(昭和一〇・六・五 舊五・五 王仁校正)

靈の礎(八)

一、現界の人間が人生第一の關門なる死といふ手續を了つて、神靈界に突入する

に際しては決して一様で無い。極善の人間にして死後直に天國に上り行く時は、
嚙喫たる音楽や、名状することの出来ぬやうな芳香に包まれ、容色端麗なる天人
の群や、生前に於て曾て死去したる朋友、知己、親、兄弟等の天人と成りたる人々
に迎へられ、際限なき美はしき空中を飛翔して、莊嚴なる天國へ直様上り行くも
あり、又四面青山に包まれたる若草の廣大なる原野を、極めて平靜に進み行くも
のもあり、又死後忽ち五色の光彩を放射せる瑞雲に身邊を包まれて上天するもの
もある。その時の気分といふものは何んとも言語に盡せないやうな、平和と閑寂と
歡喜とに充ち、幸福の極點に達したるの感覺を攝受するものである。餘りの嬉し
さに、現界に遺しておいた親、兄弟、姉妹や朋友知己、その他物質的の欲望を全
然忘却するに至るものである。萬一上天の途中に於て地上の世界のことを思ひ出
し、種々の執着心が萌芽した時は、その靈身忽ち混濁し、體量俄に重くなり、再
び地上に墜落せむとするに到る。迎へに來りし天人は、新來の上天者が地上に心
を遺し、失墜せざる様にと焦慮して、種々の音楽を奏したり、芳香を薰じたり、
美はしきものを眼に見せたりなぞして、可及的現界追慕の念慮を失はしめむと努

よく力するものである。山河草木、水流、光線等も亦地上の世界に比ぶれば、實に幾倍の清さ美はしさである。然し斯ういふ死者の靈身は、凡て地上に於ける人間としての最善を竭し、克く神を信じ、神を愛し、天下公共のために善事を勵みたる人々の境遇である。

一、凡て人間の心靈は肉體の亡びたる後と雖も、人間の本體なる自己の感覺や、意念は引續き生存するものである。故に天上に復活したる人の靈身は、恰も肉體を去つた當時と同じ精神状態で、靈界の生活を營むものである。一旦天國へ上り、天人の群に這入つて天國の住民となつたものは、容易に現界へ歸つて來て肉體を具へた友人や、親戚や、知己達と交通することは難かしい。併し乍ら一種の靈力を具へて、精靈の發達したる靈媒者があれば、其の靈媒の仲介を経て交通するところが出来るものである。その靈媒者は概して女子が適してゐる。女子は男子に比して感覺が強く、神經鋭敏で知覺や感情が微妙だからである。又靈媒力の發達した人の居る審神場では、靈身は時に現界人の眼に入るやうな形體を現はし、その姿が何人にも見えるのである。その靈身に對して現界人が接觸すれば、感覺があ

り、動いたり、談話を交ふることが出来るのである。されど天國に入つて天人と生れ代りたる靈身は、自分の方から望んで現代人と交通を保たんと希望するものは無い。現界人の切なる願ひによつて、靈媒の仲介を以て交通をなすまでである。さりながら中有界に在る靈身は、時に由つて現界に生存せる親戚や、朋友等と交通を保たんと欲し、相當の靈媒の現はることを希望するものである。それは自己の苦痛を訴へたり、或ひは靈祭を請求せむが爲である。又執着心の深い靈身になると、現界に住める父母や兄弟、姉妹や遺産などに對して、自分の思惑を述べやうとするものである。かかる靈身は現世に執着心を遺してゐるから、何時までも天國へは上り得ずして、大變な苦惱を感受するものである。

一、靈界の消息、死後の生涯を述ぶるを以て、荒唐無稽として死後の生涯を否定する人々は、最早懷疑者では無く、寧ろ無知識の甚だしきものである。斯の如き人々に對して靈界の真相を傳へ、神智を開發せしむるといふ事は到底絶望である。

一、人間の肉體の死なるものは、決して滅亡でも、死去でもない。只人間が永遠に亘る進歩の一階段に過ぎないのである。只人間の所在と立脚地とを變更した迄

である。意念も、愛情も、記憶も、皆個性の各部分であつて不變不動の儘に残るものである。死後に於ける生活状態は、現界に在りし時より引續いて秩序的に、各人がそれ相應の地位の天國の團體の生活を營むものである。

一、又卑賤無智にして世道人情を辨へなかつた悪人は、光明と愛と自由の無い地獄に落ちて苦しむものである。生前既に不和缺陷、闇黒苦痛の地獄に陥つた人間は、現界に在る間に悔い改め、神を信じ、神を愛し、利己心を去り、神に對しての無智と頑迷を除き去らなければ、決して死後安全の生活は出来ない。現世より既に已に暗黒なる地獄の團體に加入して居るものは、現界に於ても常に不安無明の生活を續けて苦しんでゐるものである。一時も早く神の光明に頑迷なる心の眼を開き、天國の團體へ籍替を爲すことに努めなければならぬのである。

柳は煙る

モウ何と云つても春である。

ポカポカと暖かい春光に柳が芽ぐんで

寒^{さむ}い綾^{あや}部^べにも春^{はる}が來^きた事^{こと}を物^{もの}語^がつて居^ゐる。
軟^{やは}かいグリー^いン色^{いろ}の柳^{やなぎ}の下^{した}に兒^こ等^らが三^{さん}四^し
他^た愛^{あい}なく遊^{あそ}び戯^{たは}れて居^をるのも何^なんとなく
春^{はる}の長^の閑^どけさである。

くくくくくくくくくくく

靈界物語 第二三卷 如意寶珠 戌の卷

終り